1　共同研究

［概　要］

「共同研究」は，大学共同利用機関としての歴博が国内外の研究者の参加を得て実施する研究プロジェクトであり，研究課題は日本の歴史と文化に関する今日的動向をふまえて設定されてきた。共同研究の特徴は，1981年に機関設置されて以来，歴史学，考古学，民俗学および関連諸科学の連携による学際的で実証的な研究に基本をおいてきた点にある。

「共同研究」は，「基幹研究」「基盤研究」「開発型共同研究」および「人間文化研究機構関連共同研究」の４つの柱から成り立っている。「基幹研究」は人間の営為と歴史に注目した大きな研究課題の下に学際的研究を目指すテーマを設定したものであり，「基盤研究」は館蔵資料の高度情報化や新しい歴史研究の方法論的基盤を作るための課題を設定したものである。この２つを「共同研究」の核とすれば，「開発型共同研究」は，任期付き助教への若手研究者育成を目的とする共同研究であり，今後に発展しうる萌芽的課題を設定することで，「共同研究」全体を実りあるものとする役割をも担っている。「人間文化研究機構関連共同研究」は人間文化研究機構が設定した課題に基づき歴博が主体となって取り組む共同研究である。

本年度の「共同研究」は，「基幹研究」６課題，「基盤研究」13課題，「人間文化研究機構関連共同研究」７課題について進めてきた。以下，本年度新たにスタートした新規課題を中心に説明を行う。

【基幹研究】　昨年度から始めた，全体課題「古代列島世界の歴史像の再構築」の３ブランチ，全体課題「震災と博物館活動・歴史叙述に関する総合的研究」の３ブランチが継続して進められた。いずれも総合展示リニューアルや企画展示のための学術的基盤を高めるための共同研究であり，歴博がめざす博物館型研究統合の実践例である。

【基盤研究】　本年度は多元的フィールド解析研究として「保護地域制度が周辺地域の生業変化や資源化に及ぼす影響―持続可能な地域発展における規制のあり方―」が，歴史資源開発研究として「高度経済成長と地域社会の変化」，「学際的研究による漆文化史の新構築」，「対外関係・交流史を歴史展示で表現するための実践的研究―19世紀を中心とする対米および対独との関係・交流を展示で表現する試み―」，「年代情報に基づく木材の利用・活用に関する横断的研究」，「研究資源としての民俗研究映像の制作と活用に関する研究」，公募型共同研究として「歴史資料デジタルアーカイブデータを用いた知的構造の創生に関する研究―小袖屏風を対象として―」が開始された。他に継続で進められた共同研究が６本あった。

【人間文化研究機構関連共同研究】　本年度は「都市風俗と「職人」―日本中近世の絵画資料を中心に―」が開始され，本館教員は代表としてではないが複数名が参画している。

この研究は，主として歴博・国文研所蔵史資料から「職人」画像を集積し，共同研究会を通じて，約400年間に絵画化された個々の職業・「職人」について，職種とその変遷，「職人」の描き方の継承・変化等を具体的に識別・分類することを主な課題としている。

なお経費の運用においては，選択と集中の観点から共同研究と連動した科研費の採択分を有効活用して，新たに基幹研究および公募型共同研究の重点化などに充当し，効率的運用に努めた。

共同研究担当　樋口　雄彦・村木　二郎

平成25年度　国立歴史民俗博物館共同研究計画一覧

研究種別	研究課題	年度					
		22	23	24	25	26	27
基幹研究	（１）古代列島世界の歴史像の再構築（歴博・考古研究系　教授　林部 均　他）						
	Ａ【広領域歴史創成研究】先史時代における社会複雑化・地域多様化の研究（歴博・考古研究系　准教授　山田　康弘　他18名）						
	Ｂ【広領域歴史創成研究】東アジアにおける倭世界の実態（歴博・考古研究系　准教授　上野　祥史　他15名）						
	Ｃ【広領域歴史創成研究】古代地域社会の実像（歴博・考古研究系　教授　林部　均　他19名）						
	（２）震災と博物館活動・歴史叙述に関する総合的研究（歴博・歴史研究系　教授　荒川　章二　他）						
	Ａ【広領域歴史創成研究】戦時/災害と生活世界の関わりに関する総合的研究（歴博・歴史研究系　准教授　原山　浩介　他40名）						
	Ｂ【多元的フィールド解析研究】東日本大震災被災地域における生活文化研究の復興と博物館型研究統合（歴博・民俗研究系　准教授　川村　清志　他16名）						
	Ｃ【歴史資源開発研究】災害の記録と記憶をめぐる資料論的研究（歴博・歴史研究系　教授　樋口　雄彦　他８名）						
基盤研究	◇広領域歴史創成研究						
	（１）日韓における青銅原料の産地の変遷に関する研究（歴博・情報資料研究系　教授　齋藤　努　他４名）						
	◇多元的フィールド解析研究						
	（１）日本の中山間地域における人と自然の文化誌（千葉県立中央博物館海の博物館　分館長　原　正利　他21名）（館内担当　西谷　大教授）						
	（２）保護地域制度が周辺地域の生業変化や資源化に及ぼす影響―持続可能な地域発展における規制のあり方―（歴博・民俗研究系　准教授　柴崎　茂光　他17名）						
	◇歴史資源開発研究						
	（１）東アジアの宗教をめぐる交流と変容（歴博・民俗研究系　教授　松尾　恒一　他20名）						
	（２）高度経済成長と地域社会の変化（歴博・民俗研究系　教授　関沢　まゆみ　他９名）						
	【展示型】（３）学際的研究による漆文化史の新構築（歴博・情報資料研究系　教授　日高　薫　他18名）						
	【展示型】（４）対外関係・交流史を歴史展示で表現するための実践的研究　―19世紀を中心とする対米および対独との関係・交流を展示で表現する試み―（東京大学史料編纂所　教授　保谷　徹他17名）（館内担当　久留島　浩教授）						
	（５）年代情報に基づく木材の利用・活用に関する横断的研究（歴博・情報資料研究系　教授　坂本　稔　他11名）						
	（６）研究資源としての民俗研究映像の制作と活用に関する研究（歴博・民俗研究系　准教授　内田　順子　他16名）						
	◇先端博物館構築研究						
	（１）民俗儀礼の変容に関する資料論的研究（歴博・民俗研究系　准教授　山田　慎也　他22名）						
	◇公募型共同研究						
	（１）高松宮家伝来書籍等を中心とする漢籍読書の歴史とその本文に関する研究（九州大学大学院人文科学研究院　准教授　靜永　健　他13名）（館内担当　井原　今朝男教授）						
	（２）柳田國男収集考古資料の研究（東京大学大学院人文社会系研究科　教授　設楽　博己　他９名）（館内担当　工藤　雄一郎准教授）						
	（３）歴史資料デジタルアーカイブデータを用いた知的構造の創生に関する研究― 小袖屏風を対象として（横浜国立大学大学院工学研究院　教授　濱上　知樹　他９名）（館内担当　澤田　和人准教授）						

機構関連共同研究	（1）連携研究〈大型〉「人間文化資源」の総合的研究	A　正倉院文書の高度情報化研究（歴博・歴史研究系　教授　仁藤敦史　他16名）							
		B　近現代の生活と産業変化に関する資料論的研究（歴博・民俗研究系　准教授　青木隆浩　他12名）							
		C　歴史研究資料としての映画の保存と活用に関する基盤的研究（歴博・民俗研究系　准教授　内田順子　他７名）							
	（2）連携研究〈小型〉活動提案	◇カテゴリーⅠ　◇ 都市風俗と「職人」―日本中近世の絵画資料を中心に―（代表：国文研・教授　大高 洋司）（歴博・歴史研究系　教授　小島道裕）							
		◇カテゴリーⅢ　大規模災害と広域博物館連携に関する総合的研究（歴博・民俗研究系　教授　小池淳一　他16名）							
	（3）日本関連在外資料調査研究	A　シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究（代表：歴博・歴史研究系　教授　久留島浩）							
		B　近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究（代表：日文研・教授　鈴木貞美）（歴博・歴史研究系　准教授　原山浩介）							

［基幹研究］

（１）「古代列島世界の歴史像の再構築」2012～2014年度

（総括研究代表者　林部　均）

１．目　的

本研究では，近年の最新の研究成果をもとに，多角的な観点から古代列島世界像の構築をおこなうことを目的とする。

本研究は，大まかには時代枠にもとづく３ブランチで構成されるものが，「社会構造」「対外交渉」「地域社会」の三つの研究項目を貫く共通テーマとして設定する。本研究では上記テーマに関連する様々な事象について，広く列島世界を対象として，時代を越える観点を含めつつ体系化・総合化し，新しい古代史像を構築することを目指す。

Ａ班は，縄文時代（先史時代）を中心に地域多様化と社会複雑化のプロセスに焦点をあて，社会構造と地域性に重点をおいた新たな歴史像の構築をめざす。

Ｂ班は古墳時代を中心として「東アジア諸地域」「王権」「地域社会」の相互関係を王権と地域社会という視点から整理し，対外交渉の視点も加味して「倭世界」の実態を明らかにする。

Ｃ班は，飛鳥時代以降の古代を中心として，地域社会がもつ多様性と画一性を多角的・総合的に把握することにより，中央中心の歴史観ではない，地域の視点からみた新しい古代史像を構築する。

本研究の３ブランチは，いずれも総合展示第１室「原始・古代」のリニューアルに向けて，その学術的な根拠とすべく実施されるもので，その成果は総合展示に反映される。本館の理念である「博物館型研究統合」の実践例として位置づけられる。

２．研究成果

Ａ班は，縄文時代・文化のタテ・ヨコ範囲を引き続き検討するとともに，昨年度の集落の検討に引き続い

て，個々のケースにおける社会のあり方について議論を行なった。これにより，各地域における社会および全国的に俯瞰する観点からの社会という二種類の社会像を描くことができ，来年度に予定している議論の収束に向けての準備が整った。

Ｂ班は，地域社会の視点からの倭世界を検討することを中心に研究を進めた。倭世界を構成する地域社会の動きを，地域社会の対外交渉という視点から整理した。ことに，前方後円墳築造地域の北と南の周縁を対象に，フィールド調査も並行することによって，王権・地域社会・東アジアという視点から検討した。

Ｃ班は，４回の研究会をおこない，古代列島の地域社会の実態について検討を加えた。「東国（関東地方）」「日本海北部（出羽）」「日本海中部」「美濃」という地域を取りあげ，それぞれの地域のもつ特徴を把握するとともに，地域の中にある多様性を抽出した。また，それぞれの地域間での比較もおこない，より地域のもつ特徴を鮮明にした。

Ａ「先史時代における社会複雑化・地域多様化の研究」2012～2014年度
（研究代表者　山田　康弘）

１．目　的

日本列島における昨今の先史時代研究を概観してみると，そこで語られる時代像（特に縄文時代像）は，研究者間で大きく異なっている。このような状況は，従来私たちが縄文時代・縄文文化と一括してきた枠組みとその内容に対して，時期性・多様性・地域性という観点から再検討を要請していると言ってよいだろう。

地域多様化および社会複雑化という視座は，現在の縄文時代研究，ひいては人類史的な先史時代研究には欠くことのできないものはずであるが，社会構造や地域性に関する既存の研究において，両者が列島規模（この領域設定方法に一国史的歴史観が内在されているとしても）で総合的に検討されたことはほとんどない。今回の共同研究においては，まずこのような大規模な議論の場を形成することを最初の目的とし，各研究分担者が多様な見解を出し合い議論を交えながら，意見の統合が可能かどうか，可能であればどのような形で意見を調整・統合し，時代像を再構築できるか見極め，その結果を展示に結びつけることを目的とする。

２．今年度の研究計画

今年度の課題は，「集落」と「墓域」の分析双方から析出される集団像について，時期的・地域的な差異の有無を明らかにし，差異があるとすればそれはどのような内容をもったものであったのかといった諸点に検討を加え，それが従来の縄文時代像（例えば80年代に構築された時代像）とどのように異なるのか検討を加えることである。そのため，前年度の研究成果をうけて，事例ごとに社会のあり方を把握し，その地域性の理解に努めるとともに，墓域構造の検討から推定される社会構造のあり方について考察を加える。これにより各地における先史時代の「社会」がどのようなあり方をし，その展開が地域ごとにどのように多様化していったのか把握することを目指す。

３．今年度の研究経過

第１回共同研究会

2013年６月29日（土）～６月30日（日）　国立歴史民俗博物館　第２会議室

小畑弘己「圧痕法の最近の成果―韓国新石器時代の穀物栽培と縄文文化―」
阿部芳郎「環状盛土遺構と後晩期の地域社会―千葉県印旛沼南岸地域の事例より」
山田康弘「愛知県保美貝塚における盤状集骨の調査」
高瀬克範「北海道キウス４遺跡と縄文後晩期集落・墓地研究」
米田　穣「同位体からみた縄文時代の食生態」
山田康弘「第１展示室リニューアルにむけての説明」
その後展示見学・討論会

第２回共同研究会
2013年11月30日（土）～12月１日（日）　国立歴史民俗博物館　第２会議室
高橋龍三郎氏　「縄文時代のトーテミズムの可能性を探る」
瀬口眞司氏　　「琵琶湖周辺における定住集落の成立と展開」
舟橋京子氏　　「抜歯風習からみた縄文社会」
冨井　眞氏　　「遺跡群研究の論理・土器黒化部の向き」
山田康弘　　「第１展示室（縄文）の展示構想について)」

第３回共同研究会
2014年３月８日（土）～10日（月）　種子島総合開発センター・南種子町役場・中種町歴史民俗資料館
山田康弘「縄文文化の範囲―タテとヨコの議論」
総合討議「縄文文化の枠組みと地域社会のあり方について」
その後　奥ノ仁田・鬼ヶ野・立切・広田遺跡踏査・資料実見

４．今年度の研究成果

今年度は縄文時代・文化のタテ・ヨコ範囲を引き続き検討するとともに，昨年度の集落の検討に引き続いて，個々のケースにおける社会のあり方について議論を行なった。これにより，各地域における社会および全国的に俯瞰する観点からの社会という二種類の社会像を描くことができ，来年度に予定している議論の収束に向けての準備が整った。また，同時並行している第一展示室リニューアルについても，おおよその形をまとめることができ，大きな成果を得ることができた。

５．研究組織（氏名　所属　役割分担／◎は研究代表者，○は研究副代表者）

設楽　博己	東京大学大学院人文社会系研究科・教授	関東・中部地方の社会
高橋龍三郎	早稲田大学文学学術院・教授	社会階層化の研究
阿部　芳郎	明治大学文学部・教授	関東地方の社会
瀬口　眞司	（財）滋賀県文化財保護協会・主任	近畿地方の社会
佐々木由香	（株）パレオ・ラボ・統括部長	植生・環境史からみた社会
高瀬　克範	北海道大学大学院文学研究科・准教授	北海道の社会
松村　博文	札幌医科大学医学部・准教授	縄文人の起源
近藤　　修	東京大学大学院理学系研究科・准教授	縄文人の形質差
米田　　穣	東京大学総合研究博物館・教授	縄文人の食性分析

舟橋　京子	九州大学総合研究博物館・助教	抜歯等からみた社会
長田　友也	中部大学人文学部・非常勤講師	東海地方の社会
冨井　　眞	京都大学文化財総合研究センター・助教	中国地方の社会
小畑　弘己	熊本大学文学部・教授	九州・韓半島の社会
福田　正宏	東京大学大学院創成科学研究科・准教授	北海道・沿海州の社会
菅野　智則	東北大学埋蔵文化財センター・専門職員	東北地方の社会
○工藤雄一郎	本館研究部・准教授	環境史的観点からみた社会
◎山田　康弘	本館研究部・准教授	全体統括・墓制からみた社会

B「東アジアにおける倭世界の実態」2012～2014年度
（研究代表者　上野　祥史）

１．目　的

倭という表現は，漢書地理志を初出として，宋書や隋書などの中国史書や，広開土王碑文などにみえており，日本列島に対する古代東アジア世界からの呼称である。東アジアが倭と呼ぶ日本列島の世界は，弥生時代中期後半から古墳時代終末期に相当する。それは，前方後円墳という存在が象徴するように，日本列島で広く共有した規範・価値観が確立した時代であり，国家形成の歩みを進める時代でもあった。

本研究では，倭世界を中央（王権）と地域（地域社会）の関係が規定する世界としてとらえ，日本列島的な視点と東アジア的な視点―内なる視点と外なる視点―を対照することによって，この倭世界の実態を評価することを目的とする。

求心性を志向した王権は，倭世界の周縁（九州等）や外部（朝鮮半島）との接触によって得た情報をもとに，絶えず新たな規範や価値観を創出し続けた。それは，王権が地域社会を序列化し包摂する動きに他ならない。本研究では，その規範や価値観を創出するプロセスや，如何にそれが序列化のシステムとして機能したのかに注目することによって，倭王権の実態を整理する。この実態と新羅や百済など朝鮮半島の諸王権との比較を通じて，東アジアの視点で倭王権の特質を相対化し，史書や金石文に記す王権の天下観との対照を通じて，理念と実態の交錯する倭王権の本質を相対化することが可能となる。

一方，地域社会にとっては，王権との関係は外部世界とのつながりの一つである。地域社会と朝鮮半島の各地や日本列島の他地域との関係を対照し比較することによって，王権の意図とは必ずしも重ならない地域社会の独自の動きがみえてくる。本研究では，渡来系集団を受け入れた地域等を対象として，東アジア諸地域や王権との関係に注目し，倭世界を構成する地域社会の動きを整理する。無意識に従属的な性格が強調されやすい王権との関係を，地域社会の対外交渉という視点から相対化することが可能である。それは，王権と地域社会との間に想定される「内なる境界」と，東アジア諸地域と王権・地域社会との間に想定される「外なる境界」を改めて問うことにもなる。

総じて言えば，「東アジア諸地域」「王権」「地域社会」という３つのカテゴリーの相互関係を，王権と地域社会という二つの視座で整理し，王権と地域社会の関係によって規定される倭世界の実態を明らかにするものである。倭世界を自明のものとしてとらえるのではなく，「対外交渉」という視点そのものを相対化することも目的である。本研究では，東アジア諸地域と王権・地域社会がもっとも密接に関係をもった５世紀を中

心として検討を進めるものとする。

２．今年度の研究目的

本研究は，「王権」と「地域社会」という二つの視座から検討を進めるが，平成25年度は，地域社会の視点に重点をおいて倭世界を検討することを中心に研究を進める。倭世界を構成する地域社会の動きを，地域社会の対外交渉という視点から整理する。渡来系集団を受け入れた地域を意識しつつ，倭王権，あるいは日本列島内の他地域，朝鮮半島諸地域との関係を，地域社会の対外交渉ととらえて検討をおこなう。また，倭世界の周縁として位置づけられる東北北部や九州南部などを対象として，王権との距離と倭の外の世界との距離を比較し，「内なる境界」と「外なる境界」との対照をはかる。地域社会の動きを王権の論理から解放することによって，倭世界の実態を検討することを目指す。

３．今年度の研究経過

今年度は研究会を４回開催した。そのうちの２回は青森県と鹿児島県で開催し，前方後円墳築造の周縁領域における遺跡・遺物検討を研究会とあわせて遂行した。

【第１回研究会】　　於歴博　　2013年６月１日・２日

・2013年度の計画説明及び検討

・研究発表

岸本直文　　「倭王権にかかわる論点整理」

仁藤敦史　　「ヤマト王権の支配構造」

山本孝文　　「韓半島古代王権による墓葬制の運用―百済の例を中心に―」

上野祥史　　「古墳出土外来器物の検討視点　―鏡と帯金具―」

【第２回研究会】　　於歴博　　2013年７月20日・21日

権宅章　　「全南高興野幕古墳について」

吉井秀夫　　「構築過程からみた朝鮮三国時代墳墓の比較研」

若狭　徹　　「上毛野における古墳時代の社会構造―前・中期を中心に―」

松木武彦　　「物質文化のパターンからみた古墳時代「王権」の特質」

【第３回研究会】　　於八戸市埋蔵文化財センター　是川縄文館　2013年10月11日・12日

宇部則保　　「八戸周辺の古墳時代から飛鳥・奈良時代の遺跡」

藤沢　敦　　「古墳時代の北方社会をいかにとらえるか」

杉井　健　　「古墳時代熊本県地域における古墳と社会の動態」

※八戸地域の古墳群及び続縄文関係遺跡の出土資料の検討をあわせておこなった。

対象遺跡・遺物：阿光坊古墳群・丹後平古墳群・鹿島沢古墳群・田向冷水遺跡及び同出土資料

【第４回研究会】　　於鹿児島大学　　2014年３月15日・16日

中村友昭　　「古墳社会と南島域との交流　―研究の現状と課題―」

橋本達也　　「古墳築造周縁域における境界形成―南限社会と国家形成―」

※大隅地域の古墳群及び出土資料の検討をあわせておこなった。

対象遺跡・遺物：塚原古墳群・唐仁古墳群・岡崎古墳群・神領古墳群・横瀬古墳及び同出土資料

４．今年度の研究成果

第１回研究会では，岸本直文と仁藤敦史が王権という視点から，山本孝文と上野祥史が東アジアという視点から報告をおこなった。岸本報告では，古墳築造及び副葬品という考古現象に基づいて古墳時代史を概観し，記紀をはじめとする文献記録を対照することにより，歴史としての古墳時代像を描出した。仁藤報告では，文献史学の視点からヤマト王権を分節化し，外交権や支配構造，あるいは系譜という視点から，王権・国家を議論する論点を整理した。山本報告では，墓葬制度を通じて百済の王権構造及びその変遷・複雑化の過程を描出し，倭王権を相対化する視点を提示した。上野報告では，古墳時代社会が外来文物を受容する契機や価値に注目し，受容の実態の整理が，東アジアと倭との関係，倭世界を実体化させる王権と地域社会の関係を考える上で意義を有することを提示した。

第２回研究会では，権宅章と吉井秀夫が東アジアという視点で，若狭徹が地域社会という視点で，松木武彦が王権と視点で報告をおこなった。権報告では，倭系文物を保有する朝鮮半島南部の古墳について，最近の調査事例である野幕古墳の詳細な紹介をおこなった。倭系文物の動きと古墳の系譜を検討することで，倭韓の相互交渉の視点で同地域の動きを評価した。吉井報告では，墳墓の築造過程という視点で，朝鮮半島と日本列島の墳墓を比較検討し，地域社会が志向した葬制から諸王権の相互交渉を相対化した。若狭報告では，上毛野地域を対象として，河川が画する地理空間における耕地（生産領域）と居住域，居館や古墳（政治機構）の関係を整理し，古墳時代地域社会のモデルを抽出した。松木報告では，王権と古墳という二つのタームを丁寧に整理し，墳墓の築造を物質文化パターンの一つとしてとらえることにより，王権の性質あるいはその変遷を議論する論点を提示した。

第３回研究会では，八戸地域での遺跡・遺物検討をあわせておこない，古墳文化と接触し一部はそれを受容しつつも前方後円墳（倭系古墳）を築造しない続縄文文化の地域社会を検討し，古墳文化の周縁領域についての議論を展開した。田向冷水遺跡を擁する古墳時代中期の八戸平野を時空比較して，その歴史地理環境を評価した。研究会では，いずれも地域社会に主眼に置いた検討を進めた。

宇部則保をゲストスピーカーに迎え，八戸周辺の古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけての遺跡動態について，詳細な報告を受けた。竈や須恵器など古墳文化を受容しつつもそれが継続しない古墳時代中期の当該地域の地域社会を，遺跡の密度や古墳の築造などの視点で後続する時代と比較し，その性質についての指摘を受けた。藤沢報告では，より広域的な視点で東北全体を視野に入れ，南と北の視点を対照させて，弥生時代から古代に至る流れを概観した。古墳文化と続縄文文化の相互交渉という視点から，八戸周辺をはじめ北部東北にみえる現象を相対化した。杉井報告では，北と対置される南の動向に注目し，古墳文化の受容とその変遷を，交易ルートと生活様式という視点から検討した。地域圏内部の多様性や，生活様式の受容・伝播が地域社会の対外交流を検討する上で重要であることを提起している。

第４回研究会でも，大隅地域での遺跡・遺物検討をあわせておこない，古墳文化を直截的に導入する地域と，前方後円墳（倭系古墳）を築造しない地域に区分される，古墳文化の南の周縁領域について議論を展開した。研究会では，いずれも地域社会に主眼に置いた検討を進めた。

中村友昭をゲストスピーカーに迎え，南島域の歴史地理環境及びその遺跡動態について，土器，貝製品，葬制という視点から詳細な報告を受けた。南島文化と古墳文化との交流関係について，主に南島の視点に立ちつつ，南島産貝製品の動きを中心に古墳文化の地域間間ネットワークについて議論が及んだ。橋本報告では，大隅や日向など南の古墳時代社会周縁域を，北の周縁である東北との比較や，西の周縁である対馬・朝

鮮半島との比較を通じて，古墳時代の境界に対する認識を提示しようと試みた。こうした周縁像の提示を以て，古墳時代社会そのものの本質が描出できると推察している。

共同研究推進第２年目にあたり，２年間の研究会を通じて，王権・地域社会・東アジアという視座で古墳時代を論ずる論点がほぼ出揃った。支配構造や物質文化パターン，葬制システムな，地理景観や空間構造，生活様式の伝播と受容，あるいは交易ルートなどについて，複数の視座を横断する形で議論が展開されたとえいよう。来年度は，これらの議論を踏まえて，各分担視点で研究成果を集約してゆくことを目指す。本年度の橋本報告はその嚆矢にあたり，この方向で共同研究を進めたいと考えている。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

井上　直樹　京都府立大学文学部
岸本　直文　大阪市立大学大学院文学研究科
杉井　　健　熊本大学文学部
○高田　貫太　本館研究部
仁藤　敦史　本館研究部
坂　　靖　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
藤沢　　敦　東北大学埋蔵文化財調査室
山本　孝文　日本大学文理学部
若狭　　徹　高崎市教育委員会文化財保護課
［ゲストスピーカー］
権宅章　大韓民国国立羅州文化財研究所
中村　友昭　鹿児島市立ふるさと歴史資料館
◎上野　祥史　本館研究部
下垣　仁志　立命館大学文学部
高久　健二　専修大学文学部
新納　　泉　岡山大学大学院社会文化科学研究科
橋本　達也　鹿児島大学総合研究博物館
広瀬　和雄　本館名誉教授
松木　武彦　岡山大学大学院社会文化科学研究科
吉井　秀夫　京都大学大学院文学研究科
（50音順）
宇部　則保　八戸市埋蔵文化財センター

Ｃ「古代地域社会の実像」2012～2014年度
（研究代表者　林部　均）

１．目　的

本研究では，これまでの中央からの視点が中心であった古代史像に対して，列島の地域社会に視点をおいて，最新の考古学・古代史，そして関連分野から多角的・総合的に分析を加えることにより，新しい古代史像を構築することを目的とする。

奈良時代はじめに成立した古代国家は，中国から律令制を継受し，中央集権体制を推し進め，列島の地域社会を画一的に支配しようとした。

ところで，列島の地域社会は，畿内にあった中央集権的な国家の支配のもと，ほんとうに画一的な社会であったのであろうか。もちろん，当時の国家が列島各地域を画一的に支配しようと意図していたことはまちがいない。しかし，王権の所在地である都からの距離も大きく異なり，地形や気候条件といった自然環境も異なり，さらに王権への服属の過程も異なる列島の各地域が，画一的な社会であったとは，とうてい考えられない。本研究では，このような列島地域社会がもつ多様性を，多角的な視点から分析を加え，その特徴を具体的に抽出するとともに，その多様性が，いかに国家とのかかわりの中，形成されたのかを検討すること

により，地域社会のもつ特徴を明らかにしたい。

また，本研究では，こういった列島地域社会のもつ多様な側面だけに着目するのではなく，列島の各地域を貫いてみられる画一的な特徴（たとえば官衙のかたちや文書行政などの支配システム）にも着目する。そして，このような画一的な特徴についても，列島の各地域によって，顕著にみられる地域もあれば，顕著ではない地域もみられる。地域社会にみられる画一的な特徴には，古代国家による地域支配が端的に反映されているとみるのが自然であるので，それが顕著な地域では国家よる地域支配がより強く貫徹されていたことを意味し，国家がその地域の支配をいかに重視していたのかを示す。本研究では，地域社会がもつ画一的な特徴についても，このような視角から具体的に分析を加え，地域社会の実態について明らかにしたい。

そして，このような地域社会がもつ画一性と多様性の両面を多角的，かつ総合的に把握することにより，地域社会の実態を明らかにし，これまでの古代史像を再検討し，地域からみた新しい古代史像を描き出したいと考える。

２．今年度の研究目的

昨年度に引き続き，列島の地域社会の実態をできるだけ詳細に把握することを目標とした。

東国社会として「東国（関東地方)」，列島北部地域との接点として「日本海北部地域（出羽)」，大陸との対外交流も含めて「日本海中部」，東日本と西日本との接点として「美濃」という４つ地域をとりあげて地域のもつ特徴を具体的に明らかにした。

３．今年度の研究経過

今年度は４回の研究会を開催した。

第１回研究会　2013年７月13日（土)・14日（日）　国立歴史民俗博物館

共通テーマ「東国（関東地方)」

研究報告　江口　桂「古代武蔵国府の機能と役割―国府と周辺集落跡の検討から―」

渥美賢吾「古代那賀郡における官衙の形成とその意義」

池田敏宏「古代東国の仏堂施設・仏教系遺物―在地仏教信仰史へ向けての小序―」

内山敏行「７・８世紀の渡来系文化―栃木県地域―」

川尻秋生「古代東国の地域的特質」

第２回研究会　2013年９月28日（土）～30日（月）秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所ならびに遺跡踏査

共通テーマ「日本海北部（出羽)」

研究報告　伊藤武士「近年の調査成果から見た古代城柵秋田城跡の史的位置づけ」

遺跡踏査　「米代川流域の古代遺跡」

大館市博物館（秋田県大館市)・矢立廃寺跡（秋田県大館市)・胡桃館遺跡（秋田県北秋田市)・大館遺跡（秋田県能代市)・石崎遺跡（秋田県南秋田郡五城目町)・秋田城跡（秋田県秋田市)

第３回研究会　2014年１月25日（土)

共通テーマ「日本海中部」「国際交流」

研究報告　小嶋芳孝「渤海と日本の交流」

梁淑子「益山王宮里遺跡の調査成果」

第４回研究会　2014年３月15日（土）

共通テーマ「美濃」

研究報告　島田崇正「半布里戸籍故地の古代集落遺跡について」

田中弘志「弥勒寺官衙遺跡群について」

富田真一郎「『不破関』の再検討」

高田康成「美濃国分寺跡」（資料配付のみ）

林部　均「来年度の共同研究について」

４．今年度の研究成果

昨年度に引き続いて,列島地域社会の実像をできるだけ具体的に事例に即して分析を加えることができた。そして，それぞれの地域のもつ特性が明らかにできた。

「東国（関東地方)」では，東京都府中市に所在する武蔵国府跡をとりあげて，国府中枢とその周辺地域の変遷を具体的に分析することにより，地域社会の中での国府の役割について検討した。さらに，郡衙遺跡として茨城県水戸市に位置する台渡官衙遺跡群を取りあげた。関東地方と東北地方とが，海上交通を通じてつながっていること,そして,その拠点ともいえるところに郡衙遺跡が所在することが明らかとなった。また，関東地方の在地の仏教信仰について，村落内寺院や瓦塔などをもとに検討し，この地域のもつ独特の仏教信仰のあり方について明らかにした。さらに，関東地方における渡来人の移住について，出土遺物に即して検討した。そして，関東地方のもつ特徴の抽出をおこなうとともに，その地域の中での独自な特徴についても検討した。

「日本海北部（出羽)」では，秋田県・大館市・北秋田市・能代市の協力を得て，秋田県北部地域である米代川流域の古代遺跡の踏査・検討をおこなった。昨年からの懸案であった地域社会を実際に現地に立って考えるという作業をおこなうことができた。

米代川流域は，古代においては，まさに律令国家の北端に位置している。列島の北部社会との接点にあたる。そのような地域を実際に調査することにより，この地域のもつ特性，あるいは国家の境界領域について考えた。

「日本海中部」「国際交流」では，日本海中部地域，とくに石川県を中心として，日本海を介した大陸との交流について検討した。また，こういった国際交流がこの地域の大きな特徴であることを明らかにした。

「美濃」では，大宝２年「御野国加毛郡半布里戸籍」の比定地である岐阜県加茂郡富加町の東山浦遺跡の発掘調査成果を分析した。美濃国武義郡家である岐阜県関市の弥勒寺官衙遺跡群の検討をおこない，郡庁，正倉，付属寺院，居宅，祭祀場などがまとまって調査されており，郡衙の実態を考えるとき，きわめて重要な遺跡であることを確認した。また，郡庁に先立つ初期評家も存在する可能性が指摘された。さらに，美濃国におかれた不破関についても，過去の調査に再検討を加えた。

おおむね，地域の設定も妥当におこなうことができ，それぞれの地域の具体的な様相について，事例に即した充実した報告と活発な議論がおこなわれ，今後への発展が期待できる成果をあげたと考える。

古代における地域社会の実態を具体的に把握するということで,平成24年度から７つの地域を取りあげた。地域のもつ特性を把握するといったことでは，おおむね成果があがっているとみてよい。しかし，このまま個々の地域社会のもつ特性を抽出していっても，羅列的に特徴だけが把握できるだけで，共同研究としての

オリジナルな研究成果があがらないのではないかといった危惧がもたれる。そこで，来年度は，地域を列島の北部地域（東北地方），南部地域（九州）に焦点を絞って，より深く，これらの地域のもつ特性を明らかにしたいと考える。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

今泉　隆雄　東北歴史博物館館長（2013年12月に逝去）
佐藤　　信　東京大学大学院人文社会系研究科　　吉川　真司　京都大学大学院文学研究科
渡辺　晃宏　独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所
亀田　修一　岡山理科大学総合情報学部　　坂井　秀弥　奈良大学文学部
森　　公章　東洋大学文学部　　高橋　一樹　武蔵大学人文学部
今津　勝紀　岡山大学大学院社会文化科学研究科　川尻　秋生　早稲田大学文学学術院
坂上　康俊　九州大学大学院文学研究科　　田中　俊明　滋賀県立大学人間文化学部
八木　光則　元盛岡市教育委員会（2014年３月～）
吉野　　武　宮城県多賀城跡調査研究所（2014年３月～）
永山　修一　ラサール学園（2014年３月～）
平川　　南　本館・館長　　小倉　慈司　本館研究部・准教授
高田　貫太　本館研究部・准教授　　村木　二郎　本館研究部・准教授
○仁藤　敦史　本館研究部・教授　　◎林部　　均　本館研究部・教授

（２）「震災と博物館活動・歴史叙述に関する総合的研究」
（総括研究代表者　荒川章二）

本共同研究は，2011年３月11日の東日本大震災が本館活動に突き付けた課題に対応すべく，2012年度から４年計画で始まったものであり，以下，個別に報告されているA，B，Cの３つの集団研究から構成される。その総合的な目的は，①今回の震災は，その被害の広域性，被害の多様性，これらに起因する避難や復興の複雑性など経験したことのない広領域の問題群を含んでいるが，それに対する認識はなお個別的，断片的である。こうした断片化している知の状況を，いかに総合化し，歴史叙述や博物館展示に生かしていくかという，東日本大震災に対する認識そのものに関わる問題の解明，②以上の問題にあわせて，震災による破壊と再生の問題を人びとの生活・文化空間からどのように捉え，生活世界の連続性の意義をとらえかえすこと，③この巨大な震災を経験して，歴史的な震災経験，さらに自然災害を越えて戦争などを含む非常時にも目を拡大しつつ，異常事態という歴史経験に対する歴史の語りをどのように問いなおすのか，の３点に据えている。

本年度は，共同研究Aが，企画展示「歴史における震災」と連携して，東北の震災・津波を歴史的に追跡する形で①の課題に接近し，同展示で近代の震災を歴史的に展開することによって，③の課題にも取り組んだ。②の課題については，共同研究Bが，東北，中越，福島など被災地における文化遺産復興の取り組み経験や現状の課題を見極めつつ，着実に研究会を積み重ねている。共同研究Cは，災害に関する歴史的文書の目録作成や遺物・情報の収集と分析を進めており，③の課題への資料論的アプローチを進めている。

A「戦時／災害と生活世界の関わりに関する総合的研究」2012～2015年度
（研究代表者　原山　浩介）

１．目　的

本共同研究は，近現代史における歴史叙述のなかでも，とりわけ震災や戦争といった「異常時」が人びとにどのように経験されたのかをめぐり，歴史叙述を再構築することを目的としている。

歴史叙述は，展示であれ文字であれ，その受け手の有するバックボーンとの関わりのなかで考えられる必要がある。例えば戦争をめぐっては，戦争の時代を生きた者，あるいは戦争の歴史と関わって生起する社会問題と深く関わりながら生きている者が生存しているなかで，戦争の記憶や残像が生々しく残っていることを前提として歴史叙述が成立してきた。本共同研究に先立つ基盤研究「近現代展示における歴史叙述の検証と再構築」においては，そうしたひとつの前提が解体していくなかで，戦争をめぐる歴史叙述をどのように再構築するのかが眼目のひとつとなっていた。

他方で，同じく先行する上記の基盤研究においては，関東大震災時における「朝鮮人虐殺」をめぐり，日朝関係史や在日朝鮮人史が十分に議論されないなかで，虐殺という突出した出来事に収斂させる形で差別を描き出そうとする歴史叙述の手法の妥当性を問おうとしていた。そこでは，差別や虐殺をめぐって，植民地主義や朝鮮史など新たな歴史的なコンテクストを挿入することで問題をよりクリアに叙述することを目指していた。

しかしながら，2011年３月11日に発生した東北地方太平洋沖地震と，それによって引き起こされた震災ならびに原子力災害の長期化の下で，むしろ次のことが新たな課題として浮上している。

この一連の災害においては，長期化する「異常時」が経験され続けており，そのなかで過去の震災や戦争において起こった諸現象のパラフレーズとなる事柄に連続的に直面させられることとなった。例えば，「大本営発表」を含む諸情報の受容，異常時における日常感覚の喪失／根強さの両義性，渦中における異常事態の忘却，非理性的な状況への判断と解釈，状況に固有の用語の流通といった，一面で社会学的な分析を要する現象に，今日的状況との相似性を見出すことができる。また震災そのものについていえば，これまでは今日の社会との関連を一般に見出し難かった災害史をめぐって，感受性が高まったこと，また，震災に伴って起こる社会の変化を経験しつつあるという今日的なリアリティ，ならびに今後の風化の可能性を踏まえつつ，分析視角と叙述のあり方を見直してみる必要がある。

以上のことから，過去の震災や戦争をめぐっては，こうした極めて今日的な事態や経験を前提としつつ，「異常時」であることにより内在的な叙述のあり方を模索する必要が生じてきていると考えられる。その際に留意しなければならないのは，個別の状況のなかでの人びとの判断や行動をめぐり，主体性や自発性と，さまざまな権力作用の下での強制性という，二つのベクトルの狭間に置かれたものとして理解しようとする視角である。つまり状況の全体像を十分に把握できないなかでの人びとの行動をめぐり，具体的にどのような理解が可能かを，今次の震災に関わって見られる諸現象を踏まえつつ，検討していく必要がある。さらに，震災がどのような社会変化に結びついていくのかという論点をめぐっては，それぞれの時代状況の相違を踏まえつつも，より広範な視野から検討していく必要がある。

これらを踏まえ，本研究では，「災害史」「朝鮮史」「モダニズムと震災・戦争」を分担課題としつつ，博物館における歴史表象を念頭に置きながら研究を進める。その際，当座は以下の点を切り口にとする。

①戦争をめぐる今日的な理解と，戦後歴史学における戦争叙述の断層を意識しながら，戦争そのものの効果的な提示の仕方を検討する。その際，アジア太平洋戦争後に，日本社会が構造的に組み込まれてきた冷戦体制下の戦争に目配りし，断層が生じた要因に対する考察も行う。（先行する共同研究からの継承）【主にモダニズムと震災・戦争】

②日朝関係史・在日朝鮮人史というコンテクストを挿入し，関東大震災における朝鮮人虐殺，恒常的な差別，戦時における朝鮮人・朝鮮半島をめぐる意識形成を再評価する。（先行する共同研究からの継承）【朝鮮史】

③大正デモクラシー期の諸運動が，関東大震災を契機とする社会の再編や東京圏からの人の流動を経て，東京と地方の近代にどう作用したかを，山梨等の地域モダニズムを視野に入れながら検討する。【モダニズムと震災・戦争】

④「異常時」において，強制性と主体性の狭間で人びとの判断や行動がどのように作られたのか，そしてそれらが，「異常時」であることによってどのようなドライブがかけられるのか，といった事柄を，日記や証言のなかから読み取るとともに，その要因を為すプロパガンダや報道のなかに見出す。その際，東日本大震災等，今日的な「異常」への考察と突き合わせながら議論を深めることで，日常感覚との連動性を析出することに留意する。【全グループ】

⑤主として近代以降の震災に着目しつつ，現代における前近代の震災に対する認識とその変容を視野に入れ，多角的に災害史を検討し，今日的な状況において求められる叙述のあり方を検討する。【主に災害史】

⑥上記の点を考慮しつつ，展示表現としてどのような形で厚みを作ることができるのか，またどのような手法が望ましいのかを検討し，今後の第５・第６展示室の改善等の土台を作る。【全グループ】

２．今年度の計画

今年度は年度末に企画展示の実施を控えているため，全体としてこの企画展示の実施に向けた資料調査および研究会の実施を中心に進める。また他方で，第５展示室のリニューアルプロジェクトを視野にいれ，調査活動を行う。

- ◆ 戦争に関わって日記・証言・文書などをベースに，行動・判断の現場性を視野に入れた分析と提示のあり方を検討する。また同時に，戦争と近現代社会との関わりと変容をめぐり，戦後史を視野に入れた解釈枠組みを構築する。なお，調査対象については，平成24年度の研究の経過を踏まえて最終確定する。
- ◆ 震災に関わる企画展の実施に伴い，展示内容に関わる議論を行うと共に，具体的な展示内容に即して批評を行い，展示としての長短を整理した上で，展示手法の可能性について議論を行う。
- ◆ 企画展示「歴史に見る震災」に関わるフォーラムを，本共同研究と連動させて実施することとし，これに向けて，災害史研究の今日の到達点を整理する。

３．今年度の経過

４月15日　災害史に関わる研究会（神奈川大学）

４月17日～19日　津波碑調査

４月23日　災害史に関わる研究会（神奈川大学）

５月２日　南海トラフの地震に関わる調査（袋井市）

５月22日～24日　津波碑調査
５月23日・24日　北但馬地震に関わる調査（豊岡市）
５月27日・28日　災害史に関わる研究打合せ（京都）
６月３日～５日　災害史に関わる資料調査（大船渡），および災害史に関わる研究会（東北大学）
６月８日・９日　北但馬地震に関わる調査（豊岡市）
６月10日・11日　災害史に関わる資料調査（遠野市）
６月13日　関東大震災に関わる資料調査（逓信博物館）
６月16日　阪神・淡路大震災に関わる研究打合せ（大阪）
６月16日～18日　福井地震に関わる調査（福井）
６月27日　災害史に関わる研究会（神奈川大学）
７月２日　災害史に関わる研究打合せ（歴博）
７月20日 関東大震災に関わる研究会ならびに資料調査（横浜開港資料館）
７月23日 東南海・南海地震に関わる研究打合せ（関西大学）
７月26日 関東大震災に関わる研究打合せ（歴博）
８月４日～８月７日 沖縄近代史に関わる資料調査・研究会（沖縄）
９月５日～６日 東南海・南海地震に関わる資料調査（三重・愛知）
９月７日　北但馬・北丹後地震，東日本大震災に関わる研究打合せ（京都）
９月15日～17日　震災展示に関わる調査（大阪），および福井地震に関わる調査（福井）
９月18日～21日　津波碑調査
10月２日　関東大震災に関わる資料調査（群馬）
11月19日～21日　津波碑調査
２月　沖縄近代史に関わる資料調査（沖縄）
３月10日　企画展示「歴史にみる震災」の講評（歴博）

４．今年度の成果

今年度は，年度末に企画展示「歴史にみる震災」を控えていたため，災害史に関わる調査・研究に比重を置き，展示準備と連動させる形で計画・実施した。また他方で，第５展示室のリニューアルプロジェクトと連動する形で，沖縄における研究会と資料調査を計画・実施した。

災害史については，展示を控えていること，また，昨年度までに研究会等を実施して来たことから，今年度はそれぞれのセクションでの研究会・研究打合せ・資料調査を実施する形で，機動的に動くこととした。さらに，展示準備の一環としての意味合いを持たせつつ，津波碑調査においては，北原糸子・卯花政孝の両氏を中心に，1990年代に行われた調査の補足を行った。

これら調査等を通じて得られた成果の一端は，展示に反映した。この過程で，それぞれの震災についての議論の整理，一部については資料の発掘ができたのは大きな成果であると考える。しかしその一方で，本共同研究の主眼でもあった,近代史,そして戦時との関わりにおいて災害史を置き直していこうという目的は,必ずしも十分に果たせなかった。これは，災害史の蓄積を消化することに力を注がざるを得なかったことからくる必然的な結果でもある。今後，この点をどのように再検討するのかが，課題として残ったということ

になる。とりわけ，それぞれの時代像のなかに，震災をどのように置き直すのか，そして震災という一種の異常時がどのように経験されたのか，その経験の水準からみたときに戦災との連続性をどのように見いだせるのか，といった点が宿題となっている。また他方で，展示では東北に特化したコーナーを設置したが，この地域の歴史をどのように捉え直すべきかは，学会レベルでも試みがあり，今後，考え直さねばならない。これらはいずれも，第５展示室のリニューアルにおける重要な論点にもなり得るところであり，今後，共同研究，ならびにリニューアルの議論の中で改めて検討したい。

他方で，いわば「戦争」に関わる研究会や調査は，今年度はあまり回数を重ねることができなかった。ただ，そうしたなかで，第５展示室リニューアルプロジェクトと連動する形で，沖縄で二回にわたり調査と研究会を実施した。そのうちの最初のものが，本共同研究を主体として行ったものである。そこでは，沖縄の近代史展示の現状を踏まえつつ，数少ない近代の文書資料調査を行うとともに，沖縄の研究者とともに研究会を行った。沖縄の近現代史をめぐっては，ソテツ地獄や沖縄戦といった，これまでしばしば取り上げられて来た事柄のほか，琉球処分を国民国家形成との関連でどのように評価するのかが強く問われるようになっている。これは，境界がどのように生起し，設定され，そして民衆生活の水準で作り替えられて来たのかという議論にもつながっていく非常に重要な論点である。こうした問題について，沖縄での研究会において有意義な議論ができたといえ，これは今後の，本共同研究と，第５展示室リニューアルにおける議論の基底に置くものとなる。また，２月に実施した資料調査については，その成果のまとめが済んでおらず，次年度に継続して検討・分析を行うことになる。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

板垣　竜太　同志社大学
植村　善博　佛教大学　平成25年度から
内田　青蔵　神奈川大学　平成25年度から
卯花　政孝　学識経験者
蝦名　裕一　東北大学災害科学国際研究所　平成25年度から
大岡　　聡　日本大学
大串　潤児　信州大学
小川原宏幸　同志社大学
菅野　正道　仙台市博物館
北原　糸子　本館客員教員
崎山　政毅　立命館大学
宍倉　正展　産業技術総合研究所
慎　蒼　宇　法政大学
宋　　連玉　青山学院大学
高岡　裕之　関西学院大学　平成25年度から
高野　宏康　小樽商科大学
高村　竜平　秋田大学
田並　尚恵　川崎医療福祉大学　平成25年度から
谷口　仁士　立命館大学グローバルイノベーション研究機構　平成25年度から
趙　景　達　千葉大学
津久井　進　関西学院大学　平成25年度から
土田　宏成　神田外国語大学
寺嵜　弘康　神奈川県立歴史博物館　平成25年度から
冨山　一郎　同志社大学
鳥山　　淳　沖縄国際大学
中野　　聡　一橋大学
林　　能成　関西大学
原田　敬一　佛教大学
平川　　新　東北大学災害科学国際研究所
水野　直樹　京都大学人文科学研究所
宮本　正明　立教大学立教学院史資料センター
諸井　孝文　（株）小堀鐸二研究所　平成25年度から

	矢口	祐人	東京大学大学院	安田	常雄	神奈川大学
	山本	和重	東海大学	吉田	裕	一橋大学
	荒川	章二	本館研究部・教授	○久留島	浩	本館研究部・教授
	仁藤	敦史	本館研究部・教授	林部	均	本館研究部・教授
◎	原山	浩介	本館研究部・准教授	根津	朝彦	本館研究部・機関研究員

B「東日本大震災被災地域における生活文化研究の復興と博物館型研究統合」2012～2015年度

（研究代表者　川村　清志）

１．本研究会の研究目的

東日本大震災（以下，震災）は，日本社会全体に大きな被害を与えたが，特に歴史・文化研究の中核である地域社会がこうむった被害は甚大である。歴博では2011年４月以降，気仙沼市をはじめとする三陸地域で被災文化財のレスキューを中心とする救援事業を展開してきた。本研究はそうした事業と並行して，被災地域の調査研究システムの復興と地域における被災文化財を素材とした研究発信の可能性を探ることを目的とする。

本研究は大きく，以下の３つの目的を達成するために構想された。

まず，第１には，震災で大きな被害を受けた三陸沿岸域における文化財を救出と再資源化に関するシステムを実地で検証，整理し，今後起こりうる大規模災害に対する文化財保護の側面からの備えを構築することである。これまで地域における文化財の調査研究は地域の博物館，資料館が主要な役割を果たしてきた。しかし，震災によって施設はもちろん，人材，情報システム，ネットワークが大きく損なわれたことは周知の事実である。本研究はそうした状況を克服し，地域における生活文化研究を再起動するための方策を構築する。具体的には三陸沿岸域における文化財の保全活動を地域間，学問間，制度間の連携によって効果的に進行させるための組織構想と研究課題の検討を行いたい。

第２に，被災地域における無形文化財の保護に関する方法論の構築である。震災以降，有形文化財に関する調査，保全，復興などの救援活動は大きな成果を挙げてきたが，無形の文化財に関する救援については，必要性こそ意識されてはいるものの，着手に至るには多くの克服すべき課題があり，極めて手薄な状態である。本研究は地域の調査研究に長年従事してきた研究者の参加によって，地域における無形文化財の復興と継承に関する具体的な対象を設定し，そこから無形文化財の担い手や支援をめぐる問題を分析，検討することを通して，被災地域における有形・無形両面にわたる文化財の研究を構築し，発信したい。

第３に，こうした被災地における多様な文化財の復興，継承に関する問題を多角的に検討することで，生活文化のレベルからの地域社会の再検討が可能になる。今回の被災地域は津波による被害が深刻であったが，長い眼でみれば，豊かな漁業資源をはじめとする海の恵みを利用してきた地域でもある。三陸沿岸という海の正負の両面と向き合ってきた地域文化について，行政区分を超えた枠組みで再検討し，広域にまたがる生活文化の形成と展開に関する研究の可能性を地域における博物館，資料館と連携しながら提示していく。

２．今年度の研究目的

25年度は初年度の成果を踏まえつつ，研究を継続することになる。当該年は，おおまかに二つの方向性のもとに研究を進めることになる。一つは，共同研究会の研究員全体が，震災と復興にかかわる先行研究についての知見を深め，各々の調査実践と結びつけていく作業をおこなう。また，これまで大規模災害を経験してきた地域の被災から復興への取り組みを学び,東日本震災地域での調査,研究に活用する足がかりとする。もう一つの方向性は，被災地域でのインテンシブな調査の続行と具体的な調査対象の設定である。宮城県気仙沼市の研究調査を続行し，そこから生活文化の復興に関わる現地での取り組みや，これまでの営みに関する資料を整理，分析し，研究会において報告する。後述するように，それらの成果の一端は，25年度に中間報告として発表する予定であるが，これまで主な調査対象としてきた尾形家の生活文化資料に限っても，あまりに膨大な量にのぼるため，それらの基本情報のアーカイブ化の見通しがたってきたにすぎない。今後は館外の共同研究員も交えての調査研究を予定している。

さらに当初予定にあったように，被災地域における祭礼・芸能などの無形文化財の現況調査を行うとともに，それらが震災後の復旧過程においてどのような役割を果たしているかについて，多面的な調査を行う。

３．今年度の研究経過

・第一回研究会　　５月26（日），27日（月）　本館

発表：小池淳一「博物館連携をどのように構築するか：２年目の課題」

川村清志「生活文化の再構成と博物館型研究統合」

見学：国立歴史民俗博物館第４室特集展示「東日本大震災と気仙沼の生活文化」

・第二回研究会　　９月１日（日），２日（月）　新潟県立博物館

発表：田邊幹「新潟県における文化財レスキュー活動」

見学：長岡市立図書館における中越地震避難所資料の保存，活用状況の見学

「中越メモリアル回廊」による震災の記録・記憶の保存，活用の取り組みの見学

・第三回研究会　　11月24（日），25日（月）　山形県立博物館，東北芸術工科大学

発表：山口博之「山形県立博物館の概要」

川上新一（山形県立博物館・ゲストスピーカー）「植物標本のレスキュー活動について」

小林貴宏（山形文化遺産防災ネットワーク・ゲストスピーカー）

「山形文化遺産防災ネットワークの3.11以後の文化財・歴史資料保全の取り組み」

米村祥央（東北芸術工科大学・ゲストスピーカー）

「文化財保存修復センターと被災文化遺産のレスキュー」

見学：東北芸術工科大学における被災文化財の修復作業の実践過程

・第四回研究会　　２月１日（土），２日（日）　本館

発表：会田理人「災害と北海道移住の記憶を展示する―「北海道開拓記念館」の事例，「北海道博物館」の展示構想」

榎　陽介「資料館を運び出す―震災を契機に資料館まるごと引っ越しに立ち会って」

加藤秀雄「博物館，大学，市民の連携の場としての資料ネット―山形ネットにおける被災資料の保全，返却活動を事例に」

川村清志「研究会の課題と目標」

４．今年度の研究成果

第１回研究会は，人間文化研究機構連携研究「文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究」(代表：国立民族学博物館日高慎吾准教授),「大規模災害と広域博物館連携に関する総合的研究」(代表：国立歴史民俗博物館小池淳一教授）との合同で行われた。歴史民俗博物館の特集展示「東日本大震災と気仙沼の生活文化」の見学を行い，災害展示についての討議を行った。また,「大規模災害と広域博物館連携に関する総合的研究」代表である小池と，本共同研究代表の川村が，前年度の研究会の活動の整理と今年度の活動についての報告を行った。そのうえで，被災資料の取り扱いや災害展示の仕方といった問題関心を共有する研究員同士で，前年度までに生じた問題点や，震災後の状況の変化について検討を行い，情報の共有化を図った。

第２回と第３回研究会も,「大規模災害と広域博物館連携に関する総合的研究」との合同で，東北の博物館施設を中心とした文化財レスキューの現況と，災害後の組織の体制，その目的と課題をテーマとして開催した。まず，第２回研究会は，新潟県長岡市で開催し，文化財レスキューの先行事例として新潟県長岡市の新潟県立博物館，新潟県立図書館，中越メモリアル回廊の巡見を行った。また，田邊幹氏（新潟県立博物館）から，中越地震直後の博物館活動や新潟県での文化財レスキューの取り組みについて報告してもらった。第３回の研究会は山形県山形市の山形県立博物館を会場として開き，同博物館，東北芸術工科大学の巡検も行った。研究会では，山口博之氏（山形県立博物館)，川上新一氏（山形県立博物館)，小林貴宏氏（山形文化遺産防災ネットワーク)，米村祥央氏（東北芸術工科大学）から，災害展示や被災資料の取り扱い方について報告してもらった。

第４回研究会では，共同研究員の会田理人氏（北海道開拓記念館）に，北海道開拓記念館リニューアルのプランニングと，それにともなう課題と展望について報告してもらった。地域の総合博物館において，災害などの負の遺産の展示を行うこととの困難さと必要性が示された。また榎陽介氏(福島県立博物館)からは，放射線汚染地域における資料館の引っ越し作業と，特殊な環境下にあった被災資料についての保存と利用の見通しについて報告してもらった。また，機関研究員の加藤秀雄からは，主に山形県資料ネットワークの事例から，資料ネットという存在の有効性・可能性について報告を行い，最後に川村が今年度の議論をふまえて総括を行った。

なお，これらの研究成果の外部に向けての発信としては，2013年７月に，オーストラリアのキャンベラで開催されたオーストラリア日本研究協会の国際カンファレンス，“Cities, Nature & Landscapes: From Nara to the Networked City”に研究代表の川村と共同研究員の葉山が参加し，気仙沼における歴博の文化財レスキューについての発表を行った。同10月には台湾国立台北芸術大学文化資源大学院博物館・文化資源研究センター主催セミナーでも，葉山が文化財レスキューについての報告を行っている。また，新潟で行われた日本民俗学会年会において，副代表の小池と葉山，加藤が分科会を組織して発表を行なった。2014年１月に東京で行われたシンポジウム『災害に学ぶ―歴史文化情報資源の保全と再生』においても，共同研究員の葉山と川島が発表を行っている。

本年度の研究会では，災害を経験した地域で研究会を開催し，被災資料のレスキュー／保存／展示に携わった人物に報告してもらうことで，具体的な検討を行うことができるようになった。これらの問題は前年度

より論じられてきたものであるが，本年度はそれらの問題を乗り越えるために，被災資料を取り扱う意義や価値といった問題に遡って，議論が積極的に交わされるようになったのである。また，巡検や報告からさまざまな事例と接することによって,事例の普遍性と特殊性といった問題についても論じられるようになった。しかし災害に対する人々の認識は，時間の経過とともに変化しつつてあるという指摘もあり，その点を考慮に入れながら，議論を積み重ねる必要性に気づくこととなった。

また，研究代表を中心として，主に気仙沼といった被災地域のインテンシブな調査を行ってきた。前年度に引き続き，本年度も気仙沼での文化財レスキューで救出された尾形家・三浦家の生活文化資料の整理と分析を行っている。そのことに加え，本年度は昭和初期に書かれた尾形家の日記資料の分析に力を入れた。資料を翻刻し分析を行うことで，昭和初期の気仙沼の生活実態の一側面を明らかにしつつある。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

小山　　由　　リサーチ・アシスタント
会田　理人　　北海道開拓記念館・学芸員
榎　　陽介　　福島県立博物館・専門学芸員
川島　秀一　　東北大学災害科学国際文化研究所・教授
日髙　真吾　　国立民族学博物館・准教授
前川さおり　　遠野文化研究センター・調査研究課主査
山内　宏泰　　リアス・アーク美術館・主任学芸員

◎川村　清志	本館研究部・准教授	○小池　淳一	本館研究部・教授
青木　隆浩	本館研究部・准教授	内田　順子	本館研究部・准教授
久留島　浩	本館研究部・教授	柴崎　茂光	本館研究部・准教授
松田　睦彦	本館研究部・助教	山田　慎也	本館研究部・准教授
山田　康弘	本館研究部・准教授	加藤　秀雄	本館研究部・機関研究員
葉山　　茂	本館研究部・特任助教		

計：18名

C「災害の記録と記憶をめぐる資料論的研究」2012～2014年度
（研究代表者　樋口雄彦）

１．目的

2011年３月11日の東日本大震災を受け，少なからぬ研究者が反省をこめて学会誌上で指摘したように，戦後日本の歴史学は,わずかな例外を除き,災害史研究に真正面から取り組んだことがなかったといってよい。また，現在，歴史研究者に何ができるのか，何をしなければならないのかについて，現代的課題が鋭くつきつけられてもいる（『歴史学研究』第884号，2011など)。そのような認識を前提としつつ，本研究では，限られた範囲ではあるが軸足を定めて一定の課題に取り組みたい。

まず本研究の目的の第一は，災害に関する歴史資料について，考古学・民俗学・文献史学の立場から通史的におさえることである。あらゆる歴史研究が資料にもとづくものであるように，災害研究も特定の資料に

依拠して実現される。何を資料とするか，何が資料となるのか，またその資料にはどのような特徴があるのかについて，時代や地域，分野を横断して学際的な視点で考える。

目的の第二は，災害に関する記録と記憶との関係について，文献，遺物，伝承などを素材としながら考えることである。

〔文献資料〕　とくに古代以降に起きた災害は，まず公的文書に記録されたあと，多様な素材に様々な目的で遺されていく。その際，素材によって記録される内容が少しずつずれていったり，故意に改竄されたりすることもある。本研究ではそうした媒体によって異なる記録内容を資料の属性と規定し，その歴史的背景をさぐることにある。

〔遺物資料〕　先史時代においては人為的に記録が残される場合は希有で，古代以降と同じレベルの資料論は難しい。そのため，むしろこれまで知られていなかった先史時代の災害を，考古学，分析化学，地層学などをもとに掘り起こすことを目的とする。併せて歴史時代の災害に関する遺物資料情報の収集と分析にもつとめる。

〔民俗資料〕　災害の事実は記録や遺物とともに語りや儀礼などの民俗伝承としても共有される。それらについての日本各地の具体的な事例情報の収集と比較分析を行なうことを目的とする。

目的の第三は，災害と復興の関係性を，社会的，経済的な側面からとらえ直すことである。とくに歴史的なその反復の関係に注目して，被災と復興のメカニズムについての分析を試みる。

以上，三点の目的を設定して災害史研究の基礎をなす資料についての学際的な総合的研究を試みることとする。

２．今年度の研究計画

災害史に関して，典拠となった資料に着目した形での文献目録を作成する。また，各自が分担するテーマ毎に研究動向をおさえ，報告会を通じてそれらを共有化する。考古・分析班では，特定の地域（たとえば琵琶湖および淀川水系）を選び，すでにボーリングされた琵琶湖の堆積物や酸素同位体比から，洪水の履歴などを，植生との関係も含め，解明する一方で，近江，山城，摂津の弥生遺跡，文献や絵図類などの史資料から，植生との関係で淀川水系の洪水の歴史について考える（藤尾・若林・小椋・中塚）。

３．今年度の研究経過

〔研究会〕

第１回　日時：2013年６月１日（土）～２日（日）　場所：福島県いわき市

いわき市のボランティア団体「プロジェクト傳」の協力と研究協力者山崎祐子氏（学習院女子大学非常勤講師・民俗学）の説明・案内のもと，津波被害地を巡見し，被災当時のようすや現状や復興計画についての説明を受けた。

第２回　日時：2013年11月３日（日）～４日（月）　場所：沼津市明治史料館他

樋口雄彦「明治初年の治水行政と土木官僚―静岡藩水利路程掛を中心に―」

上記発表のほか，千本松原・浮島ケ原自然公園・昭和放水路・松岡水神社・雁金堤など，沼津市・富士市の水害・治水関連史跡の巡見

第３回　日時：2013年12月８日（日）　場所：東京ガーデンパレス

中塚武「「高分解能古気候学」と「歴史学・考古学」の接点―気候変動と人間社会の関係性の解明―」，小椋純一「植生景観史研究における学際性について」

上記発表のほか，共同研究のとりまとめ方，『研究報告』の原稿提出スケジュール等についての打ち合わせ

第４回　日時：2014年３月10日（月）　場所：国立歴史民俗博物館

大久保純一「館蔵の鯰絵の紹介・解説」

上記発表のほか，企画展示「歴史にみる震災」内覧会の観覧

〔個別調査〕

樋口：静岡県立中央図書館歴史文化情報センター（４月30日），焼津市歴史民俗資料館（５月18日），島田市博物館（７月６日），豊橋市二川宿本陣資料館（７月13日），富士市立中央図書館（８月11日，11月10日），国立公文書館（９月６日）などに赴き，明治初年の治水関係文書および文献の調査を実施し，前年度からの資料・情報の蓄積を継続した。

宮瀧・中塚：総合地球環境学研究所での打ち合わせ（２月26日）

４．今年度の研究成果

第１回研究会では，福島県いわき市のうち，豊間・薄磯・沼ノ内・久ノ浜地区を巡り，東日本大震災による被災地の現状を実見するとともに，体験談を聞き，また地域文化の復興にとりくむボランティア団体「プロジェクト傳」の活動状況についての説明も受けた。第２回研究会では，治水における行政の役割の一例として，明治初年の静岡藩についての研究報告が行われるとともに，沼津市・富士市に所在する治水関係の史跡・施設などを巡見し，実地において発表内容に関しての理解を深めた。第３回研究会では，古気候学・植生景観史など自然科学分野から災害史へのアプローチの方法をめぐって，最新の研究成果の報告（過去4,000分の降雨量が復元できたこと）とともにこれまでの研究歴と使用資料の変化や広がり（絵図・地形図・写真から微粒炭・樹幹解析へ）についての報告がなされたほか，今後の研究成果のとりまとめ方とそのスケジュールを検討した。第４回研究会では，歴博所蔵の鯰絵（安政江戸地震に関する錦絵）数十点を実見し，それについての説明を聞き，質疑を行うとともに，企画展示「歴史にみる震災」の内覧会に参加した。

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

中塚　　武	総合地球環境学研究所	若林　邦彦	同志社大学歴史資料館
宮瀧　交二	大東文化大学文学部	小椋　純一	京都精華大学人文学部
三浦　正幸	広島大学大学院文学研究科	藤尾慎一郎	本館・研究部・教授
大久保純一	本館・研究部・教授	○関沢まゆみ	本館・研究部・教授
◎樋口　雄彦	本館・研究部・教授		

［基盤研究］
◇広領域研究歴史創成研究

（１）「【科研型】日韓における青銅原料の産地の変遷に関する研究」
2012～2014年度

（研究代表者　齋藤　努）

１．目　的

2004～2006年度に行った科研費基盤研究「東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究」において，青銅器時代～三国時代を中心に韓国慶尚道地域（旧加耶諸国および新羅の一部）と日本列島出土の青銅製品の鉛同位体比分析を行った結果，４世紀頃を境として，中国北方産から朝鮮半島産の可能性がある青銅原料へと大きな変化のあったことが明らかになった。

その後，同時代の旧百済地域における状況を調査するために，2007年度にリーダーシップ支援経費，また平成2008～2010年度には科研型の共同研究として，韓国国立中央博物館が所蔵する青銅製品と日本国内出土資料について調査を行っていたが，2009年度に先方より共同研究を中止したい旨の連絡があったため，韓国出土資料の調査は不十分なままとなってしまった。そこで，2010年度は，韓国の考古調査財団などと連絡をとって，調査の継続をはかってきた。

本研究では，あらためてそれらの考古調査財団を研究協力者として，旧百済地域において，朝鮮半島産原料の使用開始時期について，青銅製品の鉛同位体比分析を実施することによって，その可能性を調べていくこととする。韓国では製錬遺跡や鉱山遺跡の発掘調査があまり進んでおらず，朝鮮半島産原料の開始時期がよくわかっていない状況にあるため，自然科学的な視点からそれを探り，考古学的な裏付けの有無についてもあらためて検討することが本研究の目的の一つである。

これまでの研究により，日本産原料の開始時期について，考古学と自然科学の両面からほぼ確実と考えられているのが７世紀中葉頃，自然科学的な分析から可能性の指摘されているのが６世紀後半～７世紀初とされている。また，国産原料開始以前の輸入原料の産地について，従来の鉛同位体比研究では中国との関係を中心に論じられてきたが，上述の一連の共同研究によって，朝鮮半島産と判断されるものが少なからず検出されている。そこで，古墳時代～古代の資料の調査を重点的に行うことによって，国産原料の開始時期をより明確化するとともに,その前後の産地の変遷について,地域による差異などを含めて検討していくことが，本研究のもう一つの目的である。

２．今年度の研究計画

韓国の資料については，東亜細亜文化財研究院，嶺南文化財研究院などの考古調査財団や市立博物館，大学博物館などを研究協力機関として，連携をとって研究を進める。

平成24年度当初に計画書を提出した際にいただいたご意見にしたがい，古代における鉱山開発や技術との関連性について考察を深めるために，古代史（文献史学）を専門とする研究者に参加していただくことを検討中である。本研究では，日本産原料の開始時期がテーマの一つとなっており，考古学と自然科学の両面からほぼ確実と考えられているのが７世紀中葉頃，自然科学的な分析から可能性の指摘されているのが６世紀

末～７世紀初である。これまで古墳時代～古代の資料の調査を行ってきたところでは，九州北部から中国地方の北西部において国産原料を使用した古い時期のものが見つかる可能性があるので，それぞれの地域の研究者などにゲストスピーカーとして参加していただき，資料の調査を進める予定である。

３．今年度の研究経過

取得している科学研究費補助金（基盤研究（B)「日韓における青銅器原料の国産開始時期と産地の変遷に関する研究」）とあわせて，日韓の出土資料を対象として，下記の調査と試料採取，研究会を行った。

７月

韓国・東亜細亜文化財研究院，義城召文国博物館，嶺南文化財研究院において，青銅器の調査と鉛同位体比分析用試料のサンプリング。

11月

新潟県胎内市教育委員会において，青銅鏡，銅鏃の調査と鉛同位体比分析用試料のサンプリング。

１月

韓国・東亜細亜文化財研究院において，青銅器の調査と鉛同位体比分析用試料のサンプリング。

２月

鹿児島県喜界町において，青銅鋤先の調査と鉛同位体比分析用試料のサンプリング。

韓国研究者２名を招聘し,歴博において,韓国内の鉛鉱床分析結果と青銅資料との関連性に関する研究会。

４．今年度の研究成果

韓国の各財団および日本国内の教育委員会が所蔵する青銅資料について，鉛同位体比測定用試料のサンプリングと，それらの分析を行った。また，最近，韓国内の鉛鉱床を系統的に鉛同位体比分析した研究者と，それと韓国出土青銅資料との関連性を考察している研究者の２名を招聘し，研究会を実施した。その報告によれば，韓国内の鉛同位体比は，地質によって大きく４つのゾーンにわけることができ，判別分析によって高い確率で相互の識別が可能であることがわかった。また，予備的研究として，忠清道南部の水中から引き上げられた，高麗時代の難破船に積まれていた青銅容器類の原料産地が，「ゾーンⅢ」（嶺南山塊の中部～西南部と沃川褶曲帯）内に帰属すると推定された。

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

亀田　修一	岡山理科大学総合情報学部	土生田純之	専修大学文学部
◎齋藤　　努	本館研究部・教授	○藤尾慎一郎	本館研究部・教授
高田　貫太	本館研究部・准教授	島津　美子	本館研究部・助教

◇多元的フィールド解析研究

（１）「日本の中山間地域における人と自然の文化誌」2011～2013年度
（研究代表者　原　正利）

１．目　的

第１の目的は，フィールド調査と文献資料調査によって近世から現代における村の歴史を，自然環境・自然資源利用の歴史，それに生業の歴史との関係性を含めて明らかにしつつ，人間側の歴史と生物側の歴史とを統一する方法をあみ出し，農村景観の背後に存在する自然資源利用の歴史的な特質とその変遷を，実証的，具体的に明らかにすることにある。

その上で，第２の目的として地域の人びとが創造してきた自然資源を持続的に利用する「身の丈にあった技術と知恵」の存在と，なぜそれが現在まで継続・継承されてきたのかを具体的な事例にそって明らかにし，今後の持続的な自然資源利用を考える上で必要なことは何なのかを提示することにある。

さらに本共同研究は，「学問分野が異なる研究者が同一のフィールドを研究対象とする」「フィールド調査におけるエンド・ポイントを明確化する」「展示による成果の公開をおこなう」という特色をもつ。多分野の研究者が参画する共同研究では学問分野ごとの，研究対象・方法論・時代による資料レベルの差異などの要因によって，最終的には参加メンバーによる個々人の研究成果の集成になる傾向が強い。その問題点を改善し，共同研究のあり方の新たな模索と，調査成果の総合化の実現も目的としている。

２．研究経過

2011年年度

予備調査　平成2011年５月25日，26日

場所　千葉県君津市黄和田畑地区（東京大学大学院農学生命科学研究科千葉演習林（以下「東大千葉演習林」）内札郷作業所）

調査　黄和田地区内の川回し廃村調査及び，今年度のフィールド調査の方法を再検討した。その結果，地区に入り調査を行うにあたって，君津市の行政と調査地の住民の理解を得ることが必要だと判断した。そこで君津市の教育委員会への説明と２回の現地説明会を行った。

第１回現地説明会　平成2011年７月13日　第２回現地説明会　平成2011年８月10日

場所　千葉県君津市坂畑亀山コミュニュティーセンター

内容　第１回は，上総，亀山，蔵玉，黄和田畑地区の自治会長に対して，８月10日は，蔵玉地区，黄和田地区の住民に対して説明会をおこなった。その結果，調査は蔵玉地区から開始することにし，調査開始前に蔵玉地区の回覧で地区住民全員に調査内容を通知し理解を得てから調査を行うことにした。そのため本調査は，９月22日からの開始になった。

本調査

本調査は計34回行った。

2011年

９月22日～23日，９月28日～29日，10月５日～９日，10月12日～13日，10月15日～17日，10月19日～20日，

22日～24日，10月26日，11月４日～８日，11月９日～12日，13日～14日，16日～17日，19日～21日，11月23日～25日，11月27日～28日，12月１日～２日，12月14日～15日，12月17日～18日，12月21日～22日，12月24日～26日

2012年

１月28日～29日，１月30日～31日，２月４日～５日，10日～13日，２月16日～17日，２月18日～20日，２月24日，３月２日，３月８日～11日，３月14日，15日～16日，18日～19日，22日～25日，28日～31日

調査の内容は，主としてフィールド調査であるが，このなかには５回の文献調査も含まれている。いずれの調査も，専門分野が異なる共同研究のメンバーが複数参加することをこころがけ，フィールドで土地利用の調査をおこないながら，それぞれの専門分野からの視点で議論をおこなった。

2012年

蔵玉・折木沢，天津（東大千葉演習林を中心として）

１月６～７日，１月８～９日，１月12日，１月21～22日，１月30～31日，２月４～５日，２月９～11日，２月12～13日，２月15～16日，２月18～20日，２月24日，３月１～２日，３月８～11日，３月13日，３月14日，３月15～16日，３月18～20日，３月22～25日，３月28，３月29～30日，

2012年度

2012年

４月７～９日，４月17～18日，４月21～23日，４月25～26日，５月３～６日，５月11～12日，５月25～26日，５月27日，７月29～30日，８月３～５日，８月８日，８月９～10日，８月21～23日，８月25～26日，８月29～30日，９月１～７日（岐阜県関ヶ原マンボ灌漑用水路調査），９月10～11日，９月13～14日，10月３～５日（三重県いなべ市マンボ灌漑用水路調査），11月５～６日，11月４日（河口湖新倉堀抜調査），12月８日（河口湖新倉堀抜調査），12月５～７日（千葉県立中央博物館上野館長，国立歴史民俗博物館平川館長へのフィールド現場説明会），12月11日，12月19日，12月20日，12月22～23日，12月24～28日，12月29～30日

2013年

１月16日，１月17～18日，１月29日，２月２日，２月６～７日，２月10日，２月13日，２月18日，２月20日，２月21日，２月25～27日（宮崎県都城横市川灌漑用水路の調査），３月２日，３月３日，３月11日，３月13日

研究会

５月20日　国立歴史民俗博物館

発表内容

西谷　大「二五穴の構造について」

島立理子「文献からみた二五穴」

大久保悟「二五穴のGIS化」

加藤久佳「地質からみた二五穴」

2013年年度

蔵玉，折木沢，東大演習林内

４月３日，４月５日，４月７日，４月13日，５月１～３日，５月10日，６月５～10日，６月12日～13日，６月15日，６月16～17日，６月19～20日，６月26～27日，６月28～29日，７月３日，７月７日，７月18日，７月20日，７月29～31日，８月４～６日，８月11～18日，８月19～21日，８月31～９月１日，９月６日，10月９～11日，10月12～13日，11月６日，11月９～11日，11月13～15日，11月27～12月１日，12月４～５日，12月７～９日，12月18～20日，12月21～23日，12月29～31日

2014年　蔵玉，折木沢，東大演習林内

１月４～６日，１月12～13日，１月16～19日，１月22～23日，２月19～22日，３月１～３日，３月12～15日，３月27日，３月29～30日

〈研究会〉

６月23日　国立歴史民俗博物館

発表内容

西谷　大「小櫃川の二五穴―蔵玉折木沢用水，平山用水，大戸用水」

島立理子「君津市利根本吉よし子文書からみた二五穴普請」

大久保悟「蔵玉・折木沢用水の立地と水田耕作の関係―GISデータを利用して」

３．成果

初年度

調査は，蔵玉地区の現在の土地利用，特に灌漑用水路と水田の分布からはじめた。水と生業との関係を明らかにすることで，さまざまな分野との協業を行う上での接点を模索しようと考えた。

その結果，第１の特徴として，蔵玉地区の灌漑は，「二五穴」（横二尺，約60センチ，縦五尺，約150センチ）というトンネル状の用水路を山に穿ち水を引いていることである。蔵玉用水と呼ばれ，黄和田畑の小櫃川沿いに取水口があり，トンネル状の用水路は，長いもので一本が250メートルもある。これを何本もつないで，下流の折木沢までおよそ５キロに及ぶ灌漑用水路を作る。嘉永６年（1853年）に掘削したもので，現在も利用されている。

小櫃川は河床が低く，台地の上の水田には直接水を引けないために，上流から水路を作る必要がある。この地域は，蔵玉用水以外に，黄和田畑用水，大戸用水，平山用水があり，いずれも「二五穴」による用水路である（黄和田畑用水は，昭和45年７月１日の大洪水のため崩壊。現在は利用されていない）

第２の特徴として川回しという，谷間を蛇行して流れていた小川を直線化し，蛇行部分を水田にする方法がとられていた。これについても2500分１の地図に記録しつつ，観察と聞き取り調査をおこなった。また明治時代の迅速地図などを参考に，水田面積を復元すると昭和30年代まで水田面積が増加していることがわかってきた。

第３の特徴として，近世から現代まで，蔵玉地区の土地利用は相当に変化している。明治のはじめまでは，村の周囲の斜面はマツなどを選択的に残し，その周囲を同心円状に焼き払って広大な茅場（草地）にする。さらにその周囲は奥山と称して，薪炭林として利用していた。この広大な茅場は，イノシシ，シカ，サルなどの野生動物が耕作地に侵入するのを防ぐ役目を果たしていた可能性がある。

文献調査

蔵玉地区には，「蔵玉区有文書」（約1500点）「門生区有文書」（約200点）
「朝生家文書」（79点）が残っている。初年度は，それぞれの文書についての目録ごとに分類し写真撮影を行った。近世の土地利用を復元するうえで有用な資料であることがわかった。
「蔵玉区有文書」: いくつかの村絵図が存在しており，特に天保11年の村絵図は「三方領地替え」に関わって作成された史料である。また元禄の検地帳写しやその後の土地関係の帳面，地租改正時に作成された絵図類と土地帳簿などが良く残っていることがわかった。
「門生区有文書」:「年貢割り付け状」と「年貢皆済状」などが比較的よく残っている。

次年度から最終年度
「蔵玉区有文書」・「門生区有文書」に加えて，蔵玉・折木沢土地改良組合で土地台帳関連資料が，君津市図書館で灌漑用水の普請（経費を含む）に関する「君津市利根本吉よし子文書」がみつかった。これらの文書から江戸時代・明治・大正・昭和にかけての蔵玉・折木沢地区の土地利用（水田，畑，山林）変遷過程を復元可能した。

また東大千葉演習林が所有する，明治からの帳簿類を整理することで，演習林が周辺の地域社会とどのような関係にあったのかを明らかにしていった。

フィールド調査では，黄和田畑，蔵玉，折木沢，坂畑の山を貫くトンネル状の蔵玉・折木沢用水（二五穴。1853年開削）に加えて，平山用水（1836年開削），大戸台用水（1855年開削），草川原用水の，灌漑用水についての位置，構造，灌漑域などの調査をおこなった。あわせて文献資料を参照にしながら明治からの水田域の変容過程を調査した。

黄和田畑，蔵玉だけでなく，下流の折木沢，坂畑まで同じ水源による灌漑がおこなわれており，黄和田畑，蔵玉，折木沢，坂畑は一つの生活世界を構成してきたと考えられる。当初，蔵玉・折木沢用水で灌漑される水田は，開削当初からそれほど変化が無いと考えていた。しかし，フィールド調査と文献調査を重ね併せていくと，トンネル状灌漑用水路も毎年のように修理や付け替え工事をおこなうし，新田開発も行うだけでなく，既存の水田の形態も常に変化していることがわかった。それに投下される資金も記録をみる限り相当な額にのぼる。

一体その原資は誰がどのように支払ったかが問題なのだが，その一つに東大千葉演習林の存在があった。演習林は，毎年薪炭林として山を払いさげるだけでなく，炭焼きの技術指導もおこなっていた。この演習林が，周辺と比較して有利な金額で払い下げしていたことが蔵玉・折木沢・黄和田畑地区の貴重な収入源になっていたと考えられる。

里山は歴史的な要因や人間側の働きかけによって，その姿をたびたび変えてきた。村落周辺の景観は固定的だったのではなく，その姿は歴史とともに常に変化してきたと捉える必要がある。今回の研究は，選定したフィールドの景観のもつ歴史的特質を知ることが目的の１つだったが，人間側の歴史的な自然資源利用とともに変化してきた生物側の歴史との関係性は，それこそ地域よって地域の数だけ多様である。

原発のように高度で複雑な技術は，一旦問題をおこすと制御が困難である。また河川からポンプアップによって灌漑している水田は，現在電気料金が高騰しコスト高から次々と放棄されている。しかし「二五穴」による水田灌漑は百人前後を単位とする地区の人びとによって，江戸末期から現在まで持続的に利用されてきた。二五穴のような在来技術は，電気や複雑な機械を必要せず低コストで運用可能である。本共同研究は，

地域の人びとが創造した，自分達の人力と小規模な共同体で維持管理が可能な「身の丈にあった技術と知恵」が，自然資源利用の歴史的な変遷のなかで，どのような過程を経てなぜ創出されたのか，そしていかにして継承されてきたのか，その背景を探り在来の創造力を見直したことが最大の成果であり，このことが，今後の自然資源利用の持続的利用を考える上で，非常に重要な意義があったと考えられる。

また，成果論文を国立歴史民俗博物館研究報告に発表した。
西谷　大，島立理子，大久保悟，「共同研究［日本の中山間地域における人と自然の文化誌］中間報告―二号穴からみた水利用―」，『国立歴史民俗博物館研究報告』第186集，pp. 295～309，国立歴史民俗博物館，2014年３月（査読有）
上田大斗，大久保悟，島立理子，西谷　大「共同研究［日本の中山間地域における人と自然の文化誌］中間報告―蔵玉･折木沢用水の立地と水田耕作の関係―」,『国立歴史民俗博物館研究報告』第186集, pp. 311～319, 国立歴史民俗博物館，2014年３月（査読有）
島立理子，西谷　大，大久保悟「共同研究［日本の中山間地域における人と自然の文化誌］中間報告―記録からみる蔵玉・折木沢の開削―」，『国立歴史民俗博物館研究報告』第186集，pp. 321～335，国立歴史民俗博物館，2014年３月（査読有）

2012年に，トピックス展を開催した。
「房総特有の灌漑用水「二五穴」。二五穴を通して，地域で暮らす人々の歴史と知恵を紹介」という内容のトピックス展示を二箇所でおこなった。

①トピックス展「二五穴―山をブチヌク用水路―」
　会期　１月26日（土）～２月３日（日）
　会場　君津市亀山コミュニティセンター
　主催　千葉県立中央博物館，国立歴史民俗博物館
　共催　君津市久留里城址資料館

②トピックス展　「二五穴―山をブチヌク用水路―」
　会期　２月16日（土）～３月３日（日）
　会場　千葉県立中央博物館　本館第２企画展示室
　主催　千葉県立中央博物館，国立歴史民俗博物館
　共催　君津市久留里城址資料館

４．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）
　尾崎　煙雄　千葉県立中央博物館・上席研究員　島立　理子　千葉県立中央博物館・上席研究員
　江口　誠一　千葉県立中央博物館・上席研究員　加藤　久佳　千葉県立中央博物館・上席研究員
　大木　淳一　千葉県立中央博物館・上席研究員　小田島高之　千葉県立中央博物館・上席研究員
　梅崎　昌裕　東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻人類生態学教室・准教授

大久保　悟　東京大学農学生命科学研究科・助教
後藤　雅知　千葉大学教育学部・准教授
富田　瑞樹　東京情報大学　総合情報学部　環境情報学科・講師
管根　幸裕　千葉経済大学経済学部・教授
森田　彩子　東京大学大学院医学系研究科・特任助教

岩淵　令治	本館研究部・准教授	青木　隆浩	本館研究部・准教授
村木　二郎	本館研究部・准教授	柴崎　茂光	本館研究部・准教授
工藤雄一郎	本館研究部・助教	松田　睦彦	本館研究部・助教
久留島　浩	本館研究部・教授	○西谷　　大	本館研究部・教授

◎原　　正利　千葉県立中央博物館・生態・環境研究部長

（２）「保護地域制度が周辺地域の生業変化や資源化に及ぼす影響
―持続可能な地域発展における規制のあり方―」2013～2015年度
（研究代表者　柴崎茂光）

１．目的

本研究で述べる保護地域とは，『自然・文化的資源を保全・保護するために，法律・法令・省令・自主ルールなどの手段により，管理される地域』を指す。とりわけ近年は，世界文化遺産・自然遺産制度など，保護地域の指定に対する世論の関心が高まっている。このほかにも，国有林，自然公園，自然環境保全法や文化財保護法に基づく地域指定，鳥獣保護区・保護水面など，ある一つの地域に対しても多様な保護地域の指定が重層的になされている。しかし，保護地域の指定とは新たな規制が課せられることにほかならず，これまで地域社会が継承してきた多様な価値が切り捨てられ，その周辺部との関係性を分断するといったコンフリクトを生じさせる可能性がある。その一方で，保護地域の指定をきっかけに，地域内の文化的資源の新たな価値づけや，さらに進んだ場合には観光資源化や，保護地域に関連するブランド商品の開発という動きが起きる可能性がある。日本においても，エコツーリズムやグリーンツーリズム，ジオツーリズムといわれる「もう一つの観光」をベースにしたブランディングの動きが一部の保護地域で興りはじめたが，一方で「真正性」の観点からそのあり方に疑問を投げかける声が出ている。しかしながら，上述した事象に関しては，フィールドワークに基づく実証研究や，政策研究はまだ十分なされておらず，さらなる研究蓄積が不可欠な状況といえる。

本研究では，日本国内の農山漁村を主な対象として，民俗学・考古学・歴史学・経済学・社会学などの視点を学際的に用いながら，保護地域制度が周辺地域の生業変化や資源化に及ぼす影響について多面的に捉えることを目的とする。具体的には，保護地域の価値の歴史的な経緯を踏まえつつ，①規制によるコンフリクト発生の構造とその変遷を把握し，②ブランド化の展開とそれが内包する課題を明らかにする。さらに，③地域住民の視点からみた，保護地域制度のあり方について改善策などを提案したい。

２．今年度の研究計画

研究会を年３回程度実施するが，そのうちの１回は合同でのフィールド調査を実施し，共同研究員との共

通認識を深めていく。具体的には，保護地域制度（法律・法令上の規制）や，地域社会との軋轢となる可能性の高い項目について概略を説明し，情報を共有する。また，自然的資源を対象とした保護地域がもたらした地域の生業や暮らしとの軋轢に関する具体的な事例について研究会などで議論を深めていく。このほかに現地調査としては，文化的資源を対象とした保護地域を訪れ，実態を把握する（広島県鞆の浦）。

３．今年度の研究経過

☆第１回　６月16日～17日　（国立歴史民俗博物館ほか）

６月16日　研究会（国立歴史民俗博物館）

柴崎茂光（国立歴史民俗博物館）「趣旨説明」

その後，リニューアルオープンした第４展示室の見学・討論

６月17日　現地調査（君津市蔵玉・平山地区）

「日本の中山間地域における人と自然の文化誌」（代表：原正利・千葉県立中央博物館）（平成23年度～25年度）と共同で現地調査を開催した。具体的には，川回しや二五穴を見学し，近世末期に行われた農業開発の状況を把握するとともに，房総地域における保護地域の活用方法について検討を行った。

☆第２回　９月15日～17日（広島県福山市鞆の浦）

柴崎茂光（国立歴史民俗博物館）「鞆の浦における開発史概説」

上机美穂（札幌大学）「広島地裁判決　平成21年10月１日（鞆の浦訴訟）」

葉山茂「地域の生業変遷と観光開発　―西海国立公園:長崎県北松浦郡小値賀町を事例に―」（国立歴史民俗博物館）

八巻一成（森林総合研究所北海道支所）「北海道における森林の開発・保護と林業遺産」

現地調査では，福山市鞆の浦歴史民俗資料館や，鞆の浦における架橋建設賛成・反対派の住民に対する聞き取り調査を実施した。このほかに，本共同研究に関連した科研申請について議論を行い，概ねの方針を決定した。

☆第３回　11月２日～３日（国立歴史民俗博物館）

青木隆浩（国立歴史民俗博物館）「庄川流域に向けられた学問的関心の変化と集落の盛衰」

奥敬一（森林総合研究所関西支所）「嵐山国有林をめぐる保全と利用の歴史と課題」

茅野恒秀（岩手県立大学）「国有林における自然再生プロジェクトに対する地域社会の応答：赤谷プロジェクトの経過と課題」

次年度の研究計画や，科研以外の外部資金獲得の可能性についても検討を行った。

４．今年度の研究成果

今年度は，保護地域の保全をめぐる諸事例を報告してもらった。守るべき資源（景観）の対象が年代ごとに大きく異なってきているにもかかわらず，法的な規制には大きな変化がみられないことや，保護地域指定によるブランディング効果が必ずしも十分得られていないという事例が明らかになった。今後もこうした事例を蓄積していくことに加えて，定量的な分析や法的な枠組みから，これまでの知見を多角的に検討できる

ようにしたい。

なお研究会の成果の一部について，総合誌歴博No182「特集：保護地域（世界遺産や国立公園）と地域社会」（2014年１月号）で公表した。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

伊藤　幸男　岩手大学農学部・准教授
奥　　敬一　森林総合研究所関西支所・主任研究員
奥山洋一郎　愛媛大学農学部・助教
金澤　悠介　立教大学社会情報教育研究センター・助教
上机　美穂　札幌大学法学部法学科・准教授
齋藤　暖生　東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林・助教
茅野　恒秀　岩手県立大学総合政策学部・准教授
原田　一宏　兵庫県立大学環境人間学部・准教授
深町加津枝　京都大学大学院地球環境学堂・准教授
八巻　一成　森林総合研究所北海道支所・グループ長
渡部　鮎美　総合研究大学院大学学融合推進センター・特任助教
◎柴崎　茂光　本館研究部・准教授　　○川村　清志　本館研究部・准教授
西谷　　大　本館研究部・教授　　青木　隆浩　本館研究部・准教授
内田　順子　本館研究部・准教授　　松田　睦彦　本館研究部・助教
葉山　　茂　本館研究部・機関研究員

◇歴史資源開発研究

（１）「東アジアの宗教をめぐる交流と変容」2012～2014年度
（研究代表者　松尾　恒一）

１．目　的

古代以来の長期にわたっての漢字の使用，仏教・儒教の大きな影響を受けた精神文化といった点で大きな共通性を有する東アジアの宗教・信仰をテーマとして，文献のみならず，埋蔵資料・伝承資料に基づいて，その歴史と，民衆文化として変容・定着をして現在に続く様相を考究する。日本のみならず，東アジアを専門とする研究者や，欧米からの国際的な関心にも注目した共同研究を行う。

欧米における，日本仏教は現在なお，“禅”に代表されるような，東洋の神秘思想としての側面のイメージが強く，研究においても思想（史）研究が主流となってきた。一方，日本においては，この20年ほどの寺院研究の成果はめざましく，権門寺院についての，朝廷や貴族，幕府と結びついた政治・経済的側面を，鎮護国家の祈願のための儀礼といった実践や，仏教行政や寺僧の組織との関係性にも注目しつつ，多くの実態が解明され，その意義が討議されてきた。また，こうした研究とともに，仏教の実践としての儀礼や，儀礼と深くかかわりをもって展開，形成された音楽・舞踊，絵画，口承等の諸文化や，あるいは修験道・陰陽道・

神道等，仏教と深くかかわった日本宗教についての研究も大きな進展を見ている。

仏教と関わった日本の民衆文化研究の大きな潮流としては，戦前からの民俗学による漂泊の芸能者による唱導の研究や，その流れをも汲む，日本文学における，中世の語りの起源を寺院における儀礼に探ろうとする研究等があるが，美術史における仏教絵画研究や，建築史学からの儀礼空間としての特質を追及する仏堂研究をも統合して新たな「唱導」概念を打ち立てたり，あるいは「法会文芸」なる枠組みを設定しようとしたりする動向が存する。

また，変容を遂げつつも，時代を超えて現在に継続する宗教的な諸現象を「宗教遺産」として認め，現代における価値や意義を見出そうとする文化研究も立ち現われている。

こうした，民俗的な宗教についての新たな研究動向とも連携しつつ，国際的な日本，及び東アジアの伝統宗教や信仰への関心にも応え得る共同研究を推進することを目標とする。

欧米や東アジアの研究者との，それぞれの視点からの共同研究を推進しつつ，宗教を含む精神文化や，その表象が，国や地域を超えて伝播，錯綜する，現代における信仰や神仏の問題を考える基盤の構築にもつなげてゆきたい。

２．今年度の研究経過

下記３回の，共同研究員の所属機関や科研との共催を含む共同研究会を中心とする共同研究を実施した。

第１回共同研究会　４月27～28日　於　歴博

・王霄冰（中国 中山大学　中国非物質文化遺産研究センター）「中日韓における現代の孔子祭祀儀礼の比較研究」
・王暁葵（中国 華東師範大学社会発展学院民俗学研究所）「中国人の死生観に関する一考察―災難死の葬送を中心に―」
・荒見泰史（広島大学）「韓国東海三和寺水陸斎調査報告」
・楊洋（千葉大学大学院博士課程/歴博共同利用研究員）「中国湖南省普美村における女紅文化の特質」
・本間浩（國學院大學大学院博士課程）「琉球における天妃信仰―東シナ海周辺地域における媽祖信仰の一例として―」

主として，中国の共同研究員との共同研究と討議を実施した。

孔子祭祀についての，中国の現況と，日本・韓国への伝播の状況についての発表，中国における大震災における，民間，及び，国家の復興事業，その後の慰霊についての研究発表等が行われた。

あわせて，日本における，近代をも含めた中国との結びつきが明確な，民俗・史跡の調査として，湯島聖堂の孔子祭，長崎孔子廟の調査等を行った。

第２回研究会　10月９～10日　於 アメリカ イリノイ大学

イリノイ大学において，２日間にわたる国際研究集会「古代・中世の宗教儀礼とパフォーマンス，都市と地域」“Religious Performance, City and Country in East Asia”を実施した。発表者，プログラム等は，下記の通り。

Wednesday, October 9, 2013

ご挨拶：日本総領事館，イリノイ大学

Bagawa Tōru, Buddhist monk: “The Episode ‘Sacred Teachings in the Entrails of Honkōbō’（本向房腹籠もりの聖教）in the Illustrated Biography of Master Rennyo” 馬川 透流 師 （真教寺） による絵解き実演：「蓮如上人絵伝」

Hisano Toshihiko (Toyo U.)： “Visual-Didactic Preaching: Its History and Social Milieux”

久野俊彦（東洋大学）：絵解きの成立と復活―高野山苅萱堂と長野市西光寺の絵解きを例として―

Discussant: Elizabeth Oyler (UI, EALC)，Megan McLaughlin (UI, History)

Keynote Address １/基調講演Ⅰ

・Haruo Shirane (Columbia U.)：“Japanese Performing Arts, Demons, and The Pacification of Angry Spirits”

ハルオ シラネ（コロンビア大学）「日本の芸能，鬼，そして怨霊の鎮魂」

Session １：“Early and Medieval Religious Ritual and Performance: Between City and Country”／古代・中世の宗教儀礼とパフォーマンス，都市と地域

・Abe Yasurō (Nagoya U.)“The Mushiboshi-hō’e at Jōhana Betsu-in: An Unveiling Assembly as Urban Buddhist Ritual and Its Performance Arts”

阿部泰郎（名古屋大学）「城端別院の虫干法会，都市的仏教儀礼としての開帳法会とその芸能」

・Muraki Jirō (N. Museum of J. History)“Archaeological Study of Pure Land Buddhism in City and Countryside”

村木二郎（日本国立歴史民俗博物館）「中世日本の聖地を創出する経塚・石塔」

・Elizabeth Oyler (UI)：“The Apparitional Capital in the Noh Plays Nue and Yorimasa”

エリザベス　オイラー（イリノイ大学）「能「頼政」と「鵺」における幻影の本質」

・Chikamoto Kensuke (Tsukuba U.)“Religious Policies and Temple Arts in the Late Ancient Period”

近本謙介（筑波大学）「古代後期の宗教政策と寺院芸術」

Discussants: Brian Ruppert and Roderick Wilson (UI)

Session ２：“Japanese Buddhism in East Asia: Research History and Contemporary Issues”／東アジアの日本の仏教：研究史と現代の課題

・Arami Hiroshi (Hiroshima U.)“The Ten Kings Worship and Prosperous Rituals in China During ９th and 10th century”

荒見泰史（広島大学）「９，10世紀中国における斎会の隆盛と十王信仰」

・Uejima Susumu (Kyoto University)“Re-visioning ‘Japanese Buddhism’ in East Asian Buddhist History”

上島享（京都大学）「新たな中世仏教思想史像へ」

・David Quinter (U. Alberta)“Eison and Visual-Liturgical Performance of the Shōtoku Taishi Cult: Localizing and Delocalizing”

デビッド クインター（アルバータ大学）「叡尊と聖徳太子信仰における儀礼実践:その局在化と非局在化」

Discussant: Alexander Mayer (UI, Religion)，Robert Tierney (UI, EALC, CWL)，Anne Burkus-Chasson (UI, Art History)

Thursday, October 10, 2013

Keynote Address ２ and Documentary Screening /基調講演Ⅱ

・Matsuo Kōichi (N. Museum of J. History) : “Temple Rites and Arts Ancient and Medieval: Festivals of Altar Adornment (Shōgon) and Their Transfiguration”

松尾恒一（日本国立歴史民俗博物館）「日本寺院の儀礼と芸能，古代から中世へ―荘厳の祝祭とその変容―」

Screening of Short Version (Levis) : “Divine Dancing (Kagura) to The Chaotic Deities of Hiba: Faith and Countryside” (2012).

日本国立歴史民俗博物館 民俗研究映像上映「比婆荒神神楽：地域と信仰」

Discussant: David Plath (University of Illinois)

Session ３ : “Combinatory Religious Performance”／日本仏教，儀礼と芸能

・Furukawa Motoya (Kanagawa Prefectural Museum)

古川元也（神奈川県立博物館）「晨狐王曼荼羅の成立」

・Kawasaki Tsuyoshi “The Reconstruction of Space-Time on a Sacred Mountain (Reizan) : The Appearance of Minoodera engi and Its Aftereffects”

川崎剛（就実大学）「霊山の時空の再構築 ―『箕面寺縁起』の出現とその余波―」

・Ikumi Kaminishi (Tufts U.) “Michizane and the Buddhas’ Names: Reading the Kitano Tenjin Engi Emaki though the Ritual of Butumyō-e”

上西郁美（タフツ大学）「菅原道真と仏名会：『北野天神縁起絵巻』からの考察」

・Abe Mika (Showa Women’s U.) The Festive Yūzū Dainenbutsu and the Nō Hyakuman : Rituals, Picture Scrolls, and Performance Celebrating the Virtue of the August Reign

阿部美香（昭和女子大学）「祝祭としての融通大念仏と能「百万」―御代の徳を言祝ぐ儀礼・絵巻・芸能―」

Discussant: Heather Blair (U. Indiana)

Session ４ : “Medieval Religion and Culture” ／日本，中世仏教と文化

・Daitō Takaaki (Kokugakuin U.) “Rites of Kami and Buddhas: The Jinmyōchō Liturgy in Nara Prefecture”

大東敬明（國學院大學）「神と仏教儀礼―奈良県における神名帳奉唱儀礼を中心に―」

・Brian Ruppert (UI) “Sacred works (Shōgyō) and Religious Performance in Late Medieval Japan: The Monk Chō’is Networks and Ninnaji Liturgical Practice”

ブライアン ルパート（イリノイ大学）「聖教と中世後期における宗教的実践：脩怡のネットワークと仁和寺の仏教儀礼」

・Michael Jamentz (Kyoto U.) “Penitence in Poetry: A Buddhist Justification of a Literary Art as Seen in a Mid-13th Fugen Kōshiki”

マイケル ジャメンツ（京都大学）「詠歌と懺悔―東大寺宗性書写本「普賢講式」をめぐって―」

Discussant: Elizabeth Oyler (UI)

第３回　３月７～８日　名古屋大学「アジアの中の日本文化」研究センター主催 歴博共同研究共催「東アジア文化遺産をめぐる交流と形成―イメージとテクスト―」　於 名古屋大学

・ロナルド・トビ（イリノイ大学）「名古屋を訪れた朝鮮通信使の海外―「朝鮮使節歓待図屏風」を読む―」

・ブライアン・ルパート（イリノイ大学）「人類文化遺産テクスト研究センターへの提言」
・同「聖教，修行者ネットワークとその移動―修学文化と中世日本仏教「聖典」形成の再考―」

３．今年度の研究成果

本共同研究は，宗教的な性格の強い信仰文化について文献のみならず，埋蔵資料・伝承資料に基づいて，その歴史と，民衆文化として変容・定着をして現在に続く様相を考究することを特色とする。

さらに，科研「人類の思想的営みとしての宗教遺産の形成に関する総合的研究―宗教遺産学の構築へ―」（上島享京都府立大学准教授代表）や，中国・華東師範大学（民俗学研究所），中山大学〈中国非物質文化遺産研究センター〉との連携により，現在への有形・無形の伝承を建築・美術や，民俗資料としてのみならず，宗教遺産としての面からの研究をも推進した。

本共同研究は，米国イリノイ大学との研究交流協定とも関わってイリノイ大学ほか，欧米の研究者も共同研究員として加わってる（163頁国際交流「東アジアの宗教をめぐる交流と地域的展開」項参照）。また，科研「中世宗教テクスト体系の綜合的研究―寺院経蔵聖教と儀礼図像の統合―」（代表：名古屋大学・阿部泰郎），「人類の思想的営みとしての宗教遺産の形成に関する総合的研究」や，ロンドン大学SOAS，広島大学敦煌学プロジェクト研究センター等との相互協力をおこなって，日本と東アジアの宗教研究者，及び，欧米の研究者とともに，仏教を中心とする日本の宗教文化を国際的な視点から研究を推進した。

本年は３回の共同研究会を中心とする活動を実施したが，第１回は，中国の共同研究員との共同研究を行い，信仰・宗教の伝播と変容・定着の実態や，災害という，いずれの国においても起こり得る事態への対処についての，国家の防災政策や民俗による相違等を浮き彫りにした点を，大きな成果としてあげることができる。

第２回，イリノイ大学での国際研究集会は，歴博とイリノイ大学との交流協定に基づく，共同研究会である。イリノイ大学との本交流事業は，第一期目の久留島代表より，松尾が代表として引き継ぎ，２期目に入り，本年で７年を超えるが，日本の先端研究との継続的な本研究交流は，アメリカ国内における東アジア研究者の注目を集めつつあり，ウエスタンミシガン大学・南カリフォルニア大学・コロンビア大学からの，歴博への研究や教育への協力についての打診を受けており，継続的な交流が，アメリカ内でも認知されつつある段階に入ったといえる。本研究集会では，歴博民俗研究映像『比婆荒神神楽』英語版（制作担当：松尾）の上映と討論をも行い，欧米の宗教をはじめとする，日本文化研究者にとって，外国の研究者には難しい，伝承事象（民俗）の重要性や，考古学的な手法，埋蔵資料の活用などは斬新な研究方法として注目を集め，認識された。予稿集は，日米両国語の収載の冊子を作成し，欧米への研究者への発信にも寄与した。

第３回は，名古屋大学の主催，本共同研究の共催により，本共同研究員のイリノイ大学の共同研究員による，日本の宗教・信仰に関わる歴史・民俗関係資料の，人類遺産としての価値についての提言と討論を中心とする研究集会を開催した。

本年度３月には，前年度の本共同研究の国際シンポジウム等の研究成果を基にした，成果報告書『東アジアの宗教文化―越境と交流―』を，歴博の国際交流の成果報告の助成金を受けて，３月に刊行し，共同研究の成果の社会発信・還元にもつとめた（163頁国際交流「東アジアの宗教をめぐる交流と地域的展開」項参照）。

なお，共同研究会開催のために，上記アメリカ協定機関（イリノイ大学）や，館外の科研や研究機関から

も出張費，翻訳費等，必要経費が支出され，歴博との相互協力のもとに本共同研究を推進した。

４．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

Ronald Toby　イリノイ大学東アジア言語文化学部・教授
Alexander Mayer　イリノイ大学東アジア言語文化学部・准教授
Brian Ruppert　イリノイ大学東アジア言語文化学部・教授
Elizabeth Oyler　イリノイ大学東アジア言語文化学部・教授
Hank Glassman　ハアヴァフォード大学東アジア研究学部・准教授
Lucia Dolce　ロンドン大学人文学部　SOAS日本宗教文化研究所・所長／准教授
田　兆元　中国華東師範大学民俗学研究所・所長／教授
王　暁葵　中国華東師範大学民俗学研究所・教授
康　保成　中国中山大学中国語学科・教授／中国非物質文化遺産研究センター・主任
王　宵氷　中国中山大学中国語学科・教授／中国非物質文化遺産研究センター
阿部　泰郎　名古屋大学大学院文学研究科・教授
近本　謙介　筑波大学大学院人文社会科学研究科・准教授
荒見　泰史　広島大学大学院総合科学研究科（敦煌学研究センター長）・教授
上島　享　京都大学文学部・准教授
大東　敬明　國學院大學研究開発推進機構・助教
久野　俊彦　東洋大学文学部・非常勤講師
Michael E.Jamentz　京都大学・文学部　非常勤講師
村木　二郎　本館研究部・准教授
○小池　淳一　本館研究部・教授
◎松尾　恒一　本館研究部・教授

（２）「高度経済成長と地域社会の変化」2013～2015年度
（研究代表者　関沢まゆみ）

１．目的

本共同研究の目的は，1950年代半ばから70年代初めにかけての高度経済成長の時代を経て，人々の生活がどのように変化したかについて，従来の，農村，山村，漁村，町場，そして都市という場によって分析を行なう発想から，それに加えてそれぞれの場において生活スタイルがどのように「都市型化」していったか，という発想をもって，その生活実態の変化について調査，分析を行ない，資料情報を集積し研究貢献をすることである。

高度経済成長期は，膨大なエネルギーを消費する新しい都市型生活のスタート地点として位置づけられるが，これの象徴が大都市近郊の団地の生活であった。しかし，都市部以外の場においても工場誘致などにより，人々の主な経済基盤は第一次産業から製造業を中心とする第二次産業へと転換していった。そして，テレビ，洗濯機，冷蔵庫などの家庭電化製品や自動車などが普及し，日常生活においても「都市型化」が進行

していったといえる。

具体的な研究目的として，以下の３点を考えている。第一に，そのような地域社会の変化を，経済伝承，社会伝承，信仰・儀礼伝承などに留意しながら個別具体的な事例分析を蓄積するかたちで研究を行なう。第二に，一人ひとりにとって身近な，生活における衣食住の変化についての資料情報を収集するために，たとえばどのようなa：調査項目が有効であるかを実践例を示しながら検討を行ない一つの調査モデルを作成し，b：列島各地からの調査情報の収集を行なうことを試みる。第三に，高度経済成長期における「都市型化」への変化を追跡しながら，一方，変わりにくいものについても留意しながら，「変わるもの」と「変わりにくいもの」とは何か，およびその関係性を明らかにし，生活文化伝承の特徴についての考察を行なう。

２．今年度の目標

昭和30年代以降の地域社会の変化について，各位によるフィールドワークと資料収集を行ない，研究会で発表を行なう。今年度は，ダム建設による集落移転と移転体験者への聞き取り調査や昭和30年代以降の植生景観の変化，団地の生活，衣食住の変化などを中心課題とする。

３．今年度の研究経過

〔研究会〕今年度は４回の研究会を開催することができた。

第１回研究会　６月22日（土）　場所：国立歴史民俗博物館

本共同研究の第１回目の研究会だったので，研究代表者による趣旨説明と質疑応答，「高度経済成長と地域社会の変化」に関連した共同研究員各位がこれまで行なってきた調査・研究の紹介，主な役割分担の確認などを行ない問題意識の共有をはかった。

第２回研究会　９月３日（金）～４日（土）場所：広島ガーデンパレス他

関沢まゆみ「高度経済成長とダム建設」

小椋純一「樽床ダム付近における昭和30年頃の植生景観の特徴」

石垣　悟「民俗文化財保護行政とダム建設」

竹内由紀子「山村の食生活」

宮内貴久「会津只見町石伏の収蔵文書について」

鈴木通大「神奈川県内のダム建設と移転集落」

新谷尚紀「ダムで水没した山村と柳田の山村調査」

第３回研究会　11月17日（日）　場所：お茶の水女子大学

鈴木通大「神奈川県内のダム建設と移転集落について〔２〕―ダムに沈んだ宮ケ瀬集落の民俗について―」

竹内由紀子「山村の生活変化捕捉のために―高知県旧土佐山村（現高知市）―」

小椋純一「広島県西部中国山地における植生景観の変遷―微粒炭分析からの考察を中心に―」

宮内貴久「高度経済成長と地域社会の変化―福岡市南区弥永地域を事例として―」

阿南　透「都市的生活様式の浸透過程」

新谷尚紀「東京女子大学郷土調査・民俗調査地とその追跡調査の可能性」

関沢まゆみ「ダム建設と移転した村の調査項目例」

第４回研究会　３月２日（日）　場所：東京ガーデンパレス

宮内貴久「昭和40年代初期の団地生活―福岡市を事例に―」
小椋純一「八幡高原付近における昭和30年頃の植生景観の背景」
阿南　透「結婚改善と公民館結婚式」
鈴木通大「神奈川県大和市域における地域社会の変化［１］―地図・統計からみた地域社会―」
新谷尚紀「儀礼食の変化／1990年代の民俗調査地のその後の生活変化の追跡（調査予定）」
〔調査〕
共同研究員各位によるフィールドワークにより，昭和30年代以降の地域社会の変化についての資料情報が蓄積されてきている。

４．今年度の研究成果

2013年度は共同研究の第１年目であり，共同研究員各位が高度経済成長と地域社会の変化に関する民俗調査を行ない，研究会においては各位の設定した課題について各地の変化の実態に関する情報共有と意見交換を行なった。

たとえば，団地の生活については，福岡県内の主要団地の建設時期を整理し，福岡市における昭和40年の市営住宅の建設と入居者の生活について，『西日本新聞』夕刊の「団地だんち」という連載記事（昭和42年10月～44年３月）の分析がなされ，自治会の協力による聞き取り調査を行なうなど，来年度の本調査に向けての予備調査が行われた。

このほか，とくに昭和30年代に特徴的な事例の一つとして，生活改善諸運動（特に新生活運動）のなかで推進された公民館結婚式に注目し，愛媛県等の資料の分析からその歴史の追跡がなされ，これについての議論では，比較的長く盛んに行なわれた地域とそうでもなかった地域との地域差があったことがわかり，来年度以降さらに調査対象を広げていくことになった。

また，衣食住のうち，食生活の変化について，一つのサンプルとして，流通が活発になる以前の村落の食生活の実態を知るために，明治末から大正初めにかけて調査が行なわれた『奈良県風俗志』資料の第三類「飲食並関連事項」の翻刻を行ない，基礎資料として共有することができたが，来年度以降，これの追跡調査を試みながら調査項目の作成に取り組むこととなった。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

石垣　　悟　文化庁文化財部伝統文化課民俗文化財部門・文化財調査官
小椋　純一　京都精華大学人文学部・教授　　新谷　尚紀　國學院大学文学部・教授
鈴木　通大　実践女子大学・非常勤講師　　竹内由紀子　愛国学園短期大学・講師
宮内　貴久　お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科・教授
阿南　　透　江戸川大学社会学部現代社会学科・教授
小池　淳一　本館研究部・教授　　○原山　浩介　本館研究部・准教授
◎関沢まゆみ　本館研究部・教授

（3）【展示型】「学際的研究による漆文化史の新構築」2013～2015年度
（研究代表者　日高　薫）

１．目　的

漆の木が生育する東アジアおよび東南アジアの諸地域では，それぞれ特色ある漆工技術が発達し，ユニークな文化をかたち作ってきた。漆文化圏とも呼びうるこれらの地域にみられる漆の文化は，多くの共通点をもち相互に影響を与え合う反面，実際には，利用される漆の木の種類の相違や，気候風土・民族などによって，それぞれの個性を強調する方向で発展している。

本研究は，このようなアジアの漆文化の総体を視野に含めつつ，縄文時代から現代にわたる日本の漆文化を，多視点的なアプローチにより，総合的にとらえることを目的とする。

多様な様相と展開を示す漆文化の全体像は，出土資料・伝世資料・文献資料・伝承資料・伝統技術等をあわせて検討することによってはじめて理解されるが，従来の研究では各学問分野で個別に論じられ，一部の領域では大きな成果をあげながらも，これらが統合されることはなかった。本研究においては，研究手法を異にするさまざまな分野のトピックを，展示の主要な構成要素と位置づけ，具体的な展示資料を通じて可視化し，これらを総合することによって，植物としてのウルシの特性とそれを利用する漆文化の全体像を浮き彫りにすることを目指す。このような過程で明らかとなった課題をもとに，新しい漆文化史の構築をはかりたい。

本研究の研究期間においては，各時代・地域の漆文化の多面的展開を網羅することは困難であるため，近年成果が著しく，注目されるテーマを中心に，研究成果の整理・再検討をおこない，あわせて今後展開可能な研究課題の発見の機会とする。本研究においては，以下の３つの点にとくに重点を置く。

（１）国内外における漆および漆器の流通と技術交流　植物学・考古学・文献史学・美術史学等に共通するテーマとして交流の問題に注目する。

（２）自然科学的分析手法の開発による漆文化の解明　自然科学との協業により，何が明らかにされるかを紹介し，また，開発された分析手法の応用として，館蔵漆器資料の剥落片，出土漆器等の分析を行う。

（３）漆の特性と多様な漆文化　漆のもつ特異な性格が，漆文化を特徴づけてきたことを，現代的な視点を交えて考察する。

２．今年度の研究目的

本研究では，最終的な研究成果発表形態としての企画展示の各コーナーを想定しながら，諸分野における漆文化研究の現状に関する報告をおこない，分野間の研究状況を確認し総合化して共通の認識を形づくるとともに，新たな課題発見の場とすることを目標とする。一方，資料の調査・分析等に関しては，テーマごとに，人文系と自然科学系の研究者による分科会を複数回開催することによって，実質的な成果をあげていけるような方法をとることとした。初年度である今年度は，展示の基本構想について意見交換をしつつ，最新の発掘による成果や植物学の研究状況についての理解を深めた。

３．今年度の研究経過

１）研究会の開催

2013年６月23日（日）於　：歴博

研究の全体構想・役割分担を決定し，国立歴史民俗博物館所蔵の漆関係資料（亀ヶ岡遺跡，加茂神社遺跡出土品，輸出漆器など約70点）の調査をおこなった。

2013年11月８日（金），９日（土），10日（日）於：　沖縄県

沖縄県観光商工部商工振興課工芸技術支援センターにおいて琉球漆器製作工程の見学，浦添市美術館において所蔵資料の調査をおこなった。また，シンポジウム「漆の科学分析を通し，琉球漆器の歴史や技術に迫る」（浦添市美術館）に参加した。

2014年１月26日（日）・27日（月）於：　明治大学

北野信彦　「桃山文化期における輸入漆の調達と使用に関する調査」

日高　薫　「展示構想について」

鈴木三男　「植物学的視点からのウルシ」

能城修一　「ウルシと縄文時代の植物資源利用との関係

２）中国製輸出漆器（歴博所蔵）の剥落片の分析（宮腰・岡田・吉田）

３）出土漆器の年代測定（工藤・永嶋）

４）漆製品出土遺跡一覧の作成（都築）

５）館蔵の漆関係資料のリストアップと調査（日高・林部・工藤・都築）

４．今年度の研究成果

１）沖縄の見学会によって，琉球漆器の製作技法と実際の遺品に用いられた技術に関する理解を深めることができた。

２）植物学の分野におけるウルシに関わる最新の研究情報を得ることができた。また人文科学と自然科学の協業による最新の研究状況を報告いただいた。

３）展示に向けた基礎的な情報を収集することができた。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

岩淵　令治　学習院女子大学国際文化交流学部（本館客員教授）

岡田　文男　京都造形芸術大学歴史遺産学科

北野　信彦　東京文化財研究所・保存修復科学センター

鈴木　三男　東北大学・名誉教授

多比羅菜美子　根津美術館

能城　修一　森林総合研究所

宮里　正子　浦添市美術館

吉田　邦夫　東京大学総合博物館

工藤雄一郎　本館研究部・准教授

齋藤　　努　本館研究部・教授

永嶋　正春　本館研究部・客員教授

竹内奈美子　東京国立博物館

中里　壽克　学識経験者

宮腰　哲雄　明治大学理工学部

山崎　　剛　金沢美術工芸大学美術工芸学部

四柳　嘉章　石川県輪島市漆芸美術館

小池　淳一　本館研究部・教授

○林部　　均　本館研究部・教授

◎日高　　薫　本館研究部・教授

（4）【展示型】「対外関係・交流史を歴史展示で表現するための実践的研究
―19世紀を中心とする対米および対独との関係・交流を展示で表現する試み―」2013～2015年度
（研究代表者　保谷　徹）

１．目的

この研究目的は，対外関係・交流史という視点で，テーマと時間を絞ることによって歴史展示を構築し，それで何が伝わるのかという点の実践的な研究・展示を試みることである。とくに，本館第三展示室・第五展示室の展示を通観すると，問題点となる部分をどう射程するかを検討する。それらは，まず①幕末・維新期の対外関係についての展示が五室を含めても，ペリー来航と日本からの漂流民と遣欧使節しか取り上げられていない。そもそも，今なお「ペリーと開国」というテーマで構成されている歴史叙述も多いし，展示でも「ペリーの来航によって…」という紋切り型の表現が多い。もちろん，ペリーの来航自体が日本に与えた影響は少なくなかったのだが，このあとの展開は実は単純ではない。このこと自体が，くわしい歴史年表的な説明を展示や教科書叙述に強いることになっているし，それも明治以降の展開はほとんどない。②第六展示室では，海外移民をテーマの一つとする，あるいは沖縄問題を含む戦後のアメリカによる占領問題など，この点での対外関係・交流史の水準を示した展示にはなっているが，たとえばアジア・太平洋戦争に至る経緯との関係など，アメリカ一つとっても，なぜ戦争に至るのか，についての説明は必ずしも十分ではない。西欧諸国ではアメリカ以外，アジアでは中国，朝鮮以外の国との関わりがほとんど見られないようにも思われる。たとえば，せっかくドイツの南洋の植民地を委任統治することの意味についても，そのあとのドイツとの思い出したくない関係も含めてほとんどない。

そこで，本研究では，大きく二つのチームに分けて研究を進め，まずドイツとの関係・交流史に関わる展示を実現させ，続いてアメリカとの関係・交流史を展示したい。少なくとも，展示プランのうえで，その両者が比較できるようにすることを目標とする。

まず，第一のチームは，アメリカとの関係についての研究・展示チームである。現在では，さまざまな意味でもっとも深い関係を持っている国だが，少なくとも開国以降戦前までの関係はそう単純ではない。たとえば，ペリー・阿部正弘の修好条約からハリス・堀田正睦の通商条約交渉へという展開は，アメリカが日本以前に結んだタイ（シャム）との条約などと比較することで，この二つの条約の歴史的性格を再検討することも大きな課題となろう。同時に，一九世紀末までを対象とするならば，フィリピン植民地化という問題も視野に入れておかなければならない。アメリカに限定されるわけではないが，条約批准および改正のための使節に関わる史料の調査・分析と展示への有効利用を試みたい。たとえば，参加者の一人である黒沢貞備が残した資料群の本格的な分析も課題となる。第六展示室でも課題とされたように，開戦にいたる日米交渉を，その前史から考えてみることも重要であり，たとえば日系移民の比重が高いハワイから，日米関係を考えることも重要なテーマとなりうるであろう。こうした点について検討し，せめて戦前までの日米関係・交流史を展示で表現することにしたい。

第二のチームは，このアメリカとの関係と比較できるように，プロイセン，ドイツ帝国との関係に注目したい。少し論点は異なるが，プロイセンと同時期にあいついで通商条約の締結交渉に入ったスイス・ベルギーあたりも含めて考えることも有効である。史料的には調査・研究が必要であるが，後述するようにこれま

での成果に依拠することができそうである。ここでは，それぞれの国との通商条約交渉とその内容，その後の関係をベースに，とくに，ドイツにある日本関連資料の調査の成果を活かすことができるので，ある程度展示プランの構想をつくったうえで，それをたたき台としながら，新たな調査・研究テーマを決めることも可能である。本館は第一次世界大戦で日本軍捕虜となったドイツ人の貴重な資料群を所蔵しており，こうした資料の研究・展示活用も重要な課題の一つとなる。

２．今年度の研究課題

アメリカチーム，ドイツチームで合同研究会を行い，全体構想，両チーム間の連携のありかたについて協議する。そのなかで，先行するドイツ展の第１次展示プランを作成し，それと平行して展示に関わるデータ整理を行う。必要に応じて史料複製のための写真撮影を現地で行う。

また，アメリカチームは，シンポジウムに向けて準備を行う。外交史料館調査を実施する。

３．今年度の研究経過

第一回研究会

2013年６月30日（日）於　国立歴史民俗博物館

（展示プロジェクト「ドイツと日本を結ぶもの―日独修好150年の歴史―」と合同会議）

第五室六室の展示見学

久留島浩・保谷徹　基幹研究「25年度の具体的な研究・調査プランについて」

保谷徹「東京大学史料編纂所における在外日本関係資料調査」

分科会A　展示プロジェクト会議

久留島浩「今後の計画―巡回展の可能性と協力依頼機関について―」

分科会B 日米関係・交流史

ロドニー・アームストロング「『日米関係展』企画の経緯とオリジナル案について」

第二回研究会ならびに史料見学会

2013年11月８日（金）

於　東京大学史料編纂所

保谷徹「調査報告・ドイツからの借用品候補リストについて」

東京大学史料編纂所第36回史料展覧会「東アジアと日本・世界と日本」ならびにプロジェクト展示（古写真・倭寇図像）見学

福岡万里子「史料編纂所所蔵『外務省引継書類』からの日独関係展示候補史料について」

久留島浩「共同研究および展示プロジェクトの現状について」

第三回研究会ならびに展示見学会

2013年11月23日

於　JICA横浜海外移住資料館

常設展示見学

於　横浜開港資料館
常設展示ならびに企画展「宣教医ヘボン」見学
於　ワークピア横浜
ロドニー・アームストロング「日米関係：最初の半世紀」

第四研究会（ミニ国際研究集会）
2013年12月14日
於　国立歴史民俗博物館
『日独交流150年の軌跡』執筆者の報告より
箱石大「戊辰戦争期の日独関係史料」
宮坂正英「呉秀三のシーボルト研究」
ヤン・シュミット（ゲスト・スピーカー）「20世紀政界史における日独関係を語るとき：『日独戦争』中の敵愾心，戦間期の交流と三国同盟の再検討」

第五回研究会（国際研究会）
2014年１月10日（金）
於　国立歴史民俗博物館

第五展示室見学
基調報告　ゲルハルト・ヒルシュフェルト（ゲスト・スピーカー）「第一次世界大戦の『博物館化』：大戦中期以降のドイツを手がかりに」
ヤン・シュミット（ゲスト・スピーカー）・荒川章二　コメント

第六回研究会ならびに公開書評会『開国前夜の世界』（横山伊徳著，吉川弘文館，2013年）を読む
2014年３月９日（日）
於　東京大学史料編纂所大会議室
麓慎一「書評報告」
横山伊徳　コメント

４．今年度の研究成果

ドイツ展に向けては，第１次展示プランを資料の選定も含めて固めることができた。また，研究会では『日独交流150年の軌跡』（日独交流史編集委員会編，雄松堂書店）を用いて研究を進めることができた。さらには，アメリカチームでのシンポジウムは開催できなかったが，日米関係展の企画に経緯についての報告，またシュトュットュガルト大学ゲルハルト・ヒルシュフェルト氏を招いての国際研究会を開催し，第一次世界大戦を中心に現状のドイツ歴史展示の問題点と本館研究員によるドイツ歴史への日本での研究における意見交換の場が持てた。さらには，本館も含め，数回の展示見学を通じて，歴史展示の叙述にかんする検証を行いつつ，研究会で今後の展示について議論を深めることができた。資料調査については，外交資料館は行っ

たが黒沢貞備関係は現地の都合で実施できず，代わりに徳川宗家収蔵のドイツ関連コレクションの調査を行ったほか，ベルリン国立図書館，枢密文書館の調査を実施した。

５．研究組織（◎は研究代表者　○は研究副代表者　所属は2013年度）

横山　伊徳　東京大学史料編纂所・教授　　箱石　　大　東京大学史料編纂所・准教授
三谷　　博　東京大学大学院・教授　　ロドニー・アームストロング　学識経験者
ペーター・パンツァー　ボン大学・名誉教授　　宮坂　正英　長崎純心大学・教授
宮田　奈々　オーストリア学士院近現代史研究所・客員研究員
ハンス・トムセン　スイス・チューリッヒ大学・教授
麓　　慎一　新潟大学・教授　　森田　朋子　中部大学・教授
福岡万里子　東京大学・研究員
大久保純一　本館研究部・教授　　岩淵　令治　本館研究部・客員教員
内田　順子　本館研究部・准教授　　原山　浩介　本館研究部・准教授
○久留島　浩　本館研究部・教授　　◎保谷　　徹　本館研究部・客員教員
秋山　かおり　本館研究部・リサーチアシスタント
〔ゲストスピーカー〕
ゲルハルト・ヒルシュフェルト　シュトゥットゥガルト大学・教授
ヤン・シュミット　ボーフム大学・専任講師

（５）「年代情報に基づく木材の利用・活用に関する横断的研究」

2013～2015年度
（研究代表者　坂本　稔）

１．目的

先史時代から現代に至るまで，木材は様々な形で利用・活用されてきた。森林資源に富む日本では木材が比較的入手しやすい。また，木材は比重が小さく容易に加工できる一方，耐久性に優れ，埋没や再利用などによっても後世まで残存する。さらに，樹木に形成される年輪には，生育時の環境が時間情報とともに記録されている。年輪の幅は年輪年代法に生かされ，木材自体は炭素14年代測定の代表的な試料である。両者の組み合わせは，炭素14年代を実年代に修正する較正曲線の整備に役立てられる。年輪の安定同位体分析による古環境・古気候の復元はさまざまに試みられてきたが，近年その過程で年輪セルロースの酸素同位体による年代法が提案され，効率的かつ精密な時間情報の獲得への道が拓かれつつある。

本課題では埋没樹，建築部材，木製品をはじめとする木材資料を素材とし，年輪年代法，炭素14年代法，酸素同位体法などによる高精度年代情報に基づき，考古時代・歴史時代の人と木材の関わりについて横断的な研究の実施を目指す。

２．今年度の研究計画

木材資料による年代情報の蓄積：これまでの研究で，炭素14年代を実年代に修正するのに用いられる較正

曲線が，日本列島周辺で特徴的な傾向を示すことが明らかになりつつある。従来からの年輪年代法に加え，酸素同位体比法による実年代の付された樹木年輪の炭素14年代測定を実施し，特に課題と思われる時期（弥生末～古墳開始期，10世紀，16世紀）について日本版較正曲線の充実を図る。

鹿児島県屋久島でのフィールド調査を予定し，本館教員や外部ゲストスピーカなどを招聘して屋久杉の利用について情報を得る。

３．今年度の研究経過

第１回研究会：平成25年10月６日，国立歴史民俗博物館

中尾七重：古民家材の年代

小林謙一：三鷹市丸山B遺跡における年代研究

研究の進捗状況と今後の方針に関する討議

第２回研究会：平成26年２月23日，三鷹市教育センター

三鷹市丸山B遺跡における出土木材試料の調査

下原裕司（三鷹市教育委員会）：東京都三鷹市丸山B遺跡

木村勝彦：年輪年代学が変わる―酸素同位体比を用いた年輪年代学

４．今年度の研究成果

今年度は，共同研究員がこれまで取り組んできた木材に関わる研究成果を交換し，その融合を図るための議論が行われた。特に，酸素同位体による新しい年輪年代法については，降水量を反映した変動パターンが良好に同調し，しかも樹種を選ばないというきわめて有力な方法であり，その成果を発信することで普及を目指したい。

一方，本研究は科学研究費補助金（基盤B）「東アジア産樹木年輪による過去千年間の大気中炭素14濃度の復原」と連関し，16世紀樹木年輪の炭素14年代測定も進められたが，切断時に用いた切断機のダイヤモンド粉が混入するという不具合を起こし，測定結果は思わしくなかった。次年度以降は処理法を改善しながらデータの蓄積に努める。

なお，今年度予定していた屋久島でのフィールド調査は，来年度実施される総研大日本歴史研究専攻の集中講義Bに同行を予定する。

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

木村　勝彦	福島大学・教授	中塚　　武	総合地球環境学研究所・教授
中尾　七重	武蔵大学総合研究所・研究員	横山　　操	京都大学大学院農学研究科・研究員
尾嵜　大真	東京大学総合研究博物館・特任研究員		
小林　謙一	中央大学文学部・教授		
齋藤　　努	本館研究部・教授	大久保純一	本館研究部・教授
◎坂本　　稔	本館研究部・教授	鈴木　卓治	本館研究部・准教授
小瀬戸恵美	本館研究部・准教授	○工藤雄一郎	本館研究部・准教

（６）「研究資源としての民俗研究映像の制作と活用に関する研究」

2013～2015年

（研究代表者　内田　順子）

１．目　的

第１期の共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」(2004～2006年，代表：内田順子）では，制作から活用にいたるプロセスを検討し，権利処理等，活用に支障のないかたちで映像を資料として残すためのワークフローを構築した。続く第２期「民俗研究映像の制作と資料化に関する研究」(2007～2009年，代表：青木隆浩）では，それを実践することによって映像制作を行った。その結果，2006年度以降，歴博映像フォーラムを開催して作品をひろく一般公開するほか，2007年度からは，研究資料としてDVDで館外への貸し出しを実施するなど，成果の公開を促進することができた。また第２期以降，過去の作品の撮影素材のコピーを作成するなど，映像の保存対策も講じてきた。第３期では，制作・公開・保存のサイクルを継続して遂行するとともに，撮影素材のデータベースを試験的につくるところまで行った。また，民俗研究の観点から重要とみられる映画フィルムの保存と活用にも着手した。

以上の成果を踏まえ，2013年度からの第４期では，以下を目的として実施する。

①映像人類学の分野において高い研究業績を有している研究者とともに，具体的な映像を素材として映像制作論をみがき，新規に製作する研究映像の質を高める。

②民俗研究映像の撮影素材のデータ変換を継続し，試験的なデータベースから実用的なデータベースへの移行を試みる。

③民俗研究にとって重要とみなされる各地域の映画フィルムの保存・活用を進める

④歴博独自の研究映像のありかたについて議論を重ね，第５期以降の制作・活用計画を検討する。

２．今年度の研究目的

①「盆行事と地域差」をテーマとして新規の民俗研究映像を制作する（担当：関沢まゆみ）。列島各地の盆行事は，盆棚設営と墓参習俗と霊魂感覚をめぐる地域差から，３つのタイプに分類することができ，盆行事の伝承の実態と地域差の意味の解読を映像制作を通して行うものである。

②これまでの民俗研究映像（素材を含む），映像人類学やドキュメンタリー映画から適切な作品・場面をとりあげ，「インタビュー」の方法論を検討する。

③第３期最終年度（2012年度）に制作された民俗研究映像「石を切る」（担当：松田睦彦）の上映・討論を行い，英語版を制作する。

④過去の民俗研究映像の撮影素材の保存を行う。

⑤2014年度制作の研究映像について，制作計画を検討するほか，予備調査・撮影を行う。

⑥民俗研究にとって有用な映像資料を収集し公開方法を検討する。

３．今年度の研究経過

第１回研究会

日時：５月19日（日）　13：00～17：00

場所：歴博　第２会議室・講堂（上映のみ）

内容：・研究メンバーの紹介と本研究会の趣旨，今後の日程調整

・「石を切る―花崗岩採石の技術と民俗―」（制作担当：松田睦彦）の上映

・作品についての討論

第２回研究会

日時：８月23日（金）　13：30～18：00

場所：歴博　第２会議室

内容：川瀬慈「海外の民族誌映画の動向について」

内田順子「インタビューの方法論―歴博民俗研究映像の事例から」

第３回研究会

日時：12月15日（日）　13：30～18：00

場所：歴博　第２会議室

内容：屋久島での映像制作計画について（報告：柴崎茂光氏）

全員討論

４．今年度の研究成果

【新規の民俗研究映像制作】「盆行事とその地域差―盆棚に注目して（50分）」「土葬から火葬へ―両墓制の終焉（28分）」「甑島の盆行事（20分）」を制作した（制作担当：関沢まゆみ）

【英語版制作】2012年度制作の「石を切る」（制作担当：松田睦彦）の英語版を作成した。

【2014年度制作準備】2014年度制作民俗研究映像「森に眠る人々の記憶―開発される屋久島―（仮題）」（制作担当：柴崎茂光）について準備を進め，４月からすぐに撮影を始める必要があり，年度内に制作協力業者の確定・契約を行った。

【データベースの試行】過去に制作された民俗研究映像の撮影素材データベース試行として，第３期に制作したデータベースプログラムへの映像の登録を開始した（「遠野民俗誌」「物部の民俗といざなぎ流」「沖縄・糸満の門中行事」「風の盆フィーリング」についてその作業をはじめた）。

【研究成果の公開】歴博映像フォーラム８「石を切る―採石技術の伝統と革新―」（2013年８月３日（土），新宿明治安田生命ホール）を実施した。

【研究会】共同研究会を３回開催した。第１回は，３年間の全体の計画を確認したほか，2013年度制作の「石を切る―花崗岩採石の技術と民俗―」（制作担当：松田睦彦）を上映し，討論を行った。第２回は，川瀬慈共同研究員による上映と報告で，同氏が制作した映像の上映とともに，現在の映像人類学の動向について報告があり，質疑を行った。また，内田順子による報告では，歴博のこれまでの研究映像制作で収集された映像からインタビューの場面をとりあげて上映し，インタビューの手法が整理された。第３回では，2014年度制作の「森に眠る人々の記憶―開発される屋久島―（仮題）」の制作を計画している柴崎茂光共同研究員から，これまでに撮影した素材の上映とともに制作計画が報告された。その計画について討論をおこない，映像制作の目的およびその目的に適った撮影・編集方法についての議論が深まった。

【その他】歴博友の会の協力で，「我が家の記録」というテーマに該当するフィルムの提供をうけ，デジタル化して内容を確認した。

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表）

	岩谷	洋史	国立民族学博物館	川瀬　　慈	国立民族学博物館
	分藤	大翼	信州大学全学教育機構	坂田　裕輔	近畿大学
	新谷	尚紀	國學院大學		
○	青木	隆浩	本館研究部・准教授	川村　清志	本館研究部・准教授
	小池	淳一	本館研究部・教授	齋藤　　努	本館研究部・教授
	柴崎	茂光	本館研究部・准教授	関沢まゆみ	本館研究部・教授
	西谷	大	本館研究部・教授	葉山　　茂	本館研究部・特任助教
	松尾	恒一	本館研究部・教授	山田　慎也	本館研究部・准教授
	松田	睦彦	本館研究部・助教	◎内田　順子	本館研究部・准教授

◇先端博物館構築研究

（１）「民俗儀礼の変容に関する資料論的研究」2011～2013年度
（研究代表者　山田　慎也）

１．目　的

通過儀礼や年中行事など，地域で伝承されてきた諸儀礼や習俗等の民俗は，近代化の過程で大きく変容している。なかでも，現在実践されている儀礼は，さまざまな要因によって地域のコンテキストからはずれ，均質化する傾向が多くみられる。例えば，七五三は，地域によりさまざまな年齢別，男女別などの組み合わせによって従来行われてきたが，現在，女子の三，七歳，男子の三，五歳とされ，従来慣習のない地域でも行われるようになっている。これは商業化による宣伝と作法書の普及で全国に浸透したことによる。また墓制は，明治17年の墓地及埋葬取締規則（のちの墓地，埋葬等に関する法律）により，多様な墓の習俗の有り様も次第に平準化しつつある。

こうした民俗儀礼を取り巻く環境については，法令の施行や行政の働きかけ，風俗改良運動や生活改善運動などの影響などを含む政治的要因，出産や終末期，死亡確認など生物医療の進展による医療的要因，またデパートや葬祭業など，儀礼の産業化による消費文化的要因，地域の過疎化，少子高齢化などによる社会的要因による変容などが考えられ，日本という国民国家の枠組みの中での均質化であり，一種の「国民儀礼」ということができよう。

しかしこうした点について，産育や年中行事などの一部で個別的には指摘されているが，それを総合化する研究はあまりなされてこなかった。むしろ民俗学では，地域が独自に実践している儀礼をおもに取り上げてきた。だが地域の儀礼が成立するのも，情報が容易に流動する現代において，全国的な平準化とのせめぎ合いの中で生じているものであり，全国的動向の理解は地域性を持つ儀礼を理解する上でも重要である。

なかでも地域博物館は，地域性を帯びた儀礼については積極的に調査を行い資料収集する一方，平準化していくものについてはあまり体系的に取り上げることはなく，とくにモノ資料も体系的にまた積極的に収集されてはない。

そこで本研究では，第一に通過儀礼，年中行事を中心に現代の民俗儀礼の様相と変容の要因について，政

治的，医療的，経済的，社会的な観点など多様な視点から総合的に分析検討し，地域から乖離し国民儀礼化した民俗の傾向を検証する。第二にそれにともなう関連する資料，なかでもモノ資料の収集の方向性を確立する。以上の研究を行うことで現代の民俗儀礼の動態を明らかにすることを目的とする。

２．今年度の研究計画

教育の場と民俗儀礼の関係について検討を行う。とくに初等学校における暦と学校行事，休日との関連，また唱歌や教科書における民俗的記載の関係について考察する。さらに医療的な要因は，生と死の民俗の場において顕著であり，歴博フォーラムにおいても民俗と医療制度のせめぎ合いが起こっていることが明らかになった。そこでさらに両者の関係について資料の収集の点から検討する。都道府県別の通過儀礼の作法書の整理に目途をつけ，全国的な共通性と地域特有性との関係の整理分析を行う。また引き続き民俗変容の政治的要因，社会的要因の補足調査を行い，発展した問題についても検討しながら研究の総括をする。さらに重要な目的である資料の収集方針の策定を行い，今後収集を必要とする収集すべき民俗儀礼資料の方向性について一定の指針を出し，必要に応じて資料も収集する。

３．今年度の研究経過

第８回研究会　平成25年６月22日（土）～23日（日）　場所：歴博

山田慎也（歴博）

「第４室民俗展示」における人生儀礼の展示について」

民俗展示の見学

加藤紫識氏（千代田区日比谷図書文化館）

滝口正哉氏（東京都公文書館）

「都市における人生儀礼に関する資料論」

第９回研究会およびフィールドワーク　平成25年９月４日（水）～６日（金）

場所：青森県弘前市・五所川原市

津軽地方のお山参詣について，弘前市の岩木山および岩木山神社，また岩木山のうつしである五所川原市の市浦脇本地区の脇本岩木山の参詣行事のフィールドワークおよび研究会を開催した。

研究会

小山隆秀氏

「近代における岩木山信仰と習俗の変容」

下田雄次氏（弘前大学大学院地域社会研究科・後期博士課程）

「岩木山のお山参詣」

俵木悟氏

「民俗資料としての「審美の基準」へのアプローチ―鹿児島県いちき串木野市，大里七夕踊の事例から」

第10回研究会　平成25年12月21日（土）～22日（日）　場所：歴博

近代火葬文化論序説：映画『死体焼却人』を手がかりに

郷堀ヨゼフ氏：崇徳大学設立準備委員会事務局・教員）

「その１：チェコの視点から」

土居浩氏

「その２：日本の視点から」

重信幸彦氏

「復活という創生―福岡市早良区脇山における「おひまち」から」

第11回研究会　平成26年２月16日（日）

浮ヶ谷幸代氏

「近代化としての「医療化」」

「精神医療における病院医療から地域医療へ」

相澤出氏（医療法人社団爽秋会・東北死生学研究所研究員）

「「地域」のなかの看取り―宮城県における在宅緩和ケアの現場から」

門田岳久氏

「消費される聖地―沖縄・斎場御嶽における観光／宗教の重層的コンフリクト」

立石尚之氏

「オリコミと民俗―博物館資料としての折り込み広告と拡散される民俗的解説」

４．今年度の研究成果

民俗儀礼の資料化に関しては，東京都千代田区の資料収集と「ひとの一生―千代田の人生儀礼」の展示をもとに，資料化の留意点や課題について検討した。民俗儀礼に関する資料は，登録時には他の種別や機能で登録されているものも多く，対象とする資料の範囲を設定する必要がある点や，消耗品など後に残らないものも多いことに留意することが指摘された。さらにカタログ等，儀礼の産業化に関連する資料や写真資料等も収集する必要があることが改めて確認された。あわせて2013年３月にオープンした本館の民俗展示について，見学したあと討論を行い今後のさらなる資料収集の必要性が指摘された。

また近代化における火葬の普及について，チェコの映画『死体焼却人』を素材にチェコおよび日本の葬制を検討し，衛生行政を通しての死の国家管理と隠蔽化の状況が報告された。火葬は，死の政治的管理や医療的管理，社会変容との関連を照射する課題である。またオヒマチ行事を素材に，地域の行事の変容，創成が生じており人々が求める民俗の様相と地域社会の再編の姿が示された。

さらに経済的変容と儀礼の関係について，生産だけでなく社会的プロセスとして消費も含めて捉える必要が指摘された。近代化によって記号的消費がなされ，儀礼や宗教も再編されていることが，聖地や年中行事の調査から指摘された。医療化と民俗の関係について，精神医療の地域化と在宅の終末期医療の取り組みを通して，医療現場における死生観，人間観等の表出と現在の有効性などが検討され，生活世界の把握の重要性が提示された。

また教育と民俗との関係性については，節供行事が学校や家庭教育の中に取り入れられ，消費文化の進展とともに節供が国民儀礼化していくことも明らかになった。それに関連して本年は，第４室特集展示「さまざまな節供」が2013年11月より開催され，節供の民俗的多様性と商品化による均質化，観光化について関連資料を展示し，研究成果の一部が展示として公開された。さらに都道府県別の通過儀礼の作法書の整理もおわり，全国的な共通性と地域特有性との関係や広告を通した儀礼の商品化の様相も明らかになった。

５．３年間の研究成果

民俗儀礼の変容について，本研究では政治的，医療的，経済的，社会的な要因など多様な観点から総合的に考察を行ってきた。具体的事例を検討するなかで，それぞれの要因が複合的に絡み合っており，単に要因を認知するだけでなく，変容の過程を幅広い背景から読み解き関連する要因を考察する必要があることを改めて認識した。まず，政治的要因として墓制や生活改善運動を例に取り上げ，法制や政策による民俗変容を検討した。墓制では明治17年の墓地及埋葬取締規則は現行法の墓地，埋葬等に関する法律に引き継がれ全国の共葬墓地化が推進されたが，なかには報告のように埋葬地と石塔建立地を別にする事態など地域ごとの差異も生み出しており，地域の社会構造の位置づけや衛生観など，変容の多系統的な変遷に留意しつつ変容を見ていく必要があることが指摘された。これは生活改善運動においても同様で，生活の効率化を目的とし儀礼の合理化が進められたが，愛媛県では巳正月などの死者儀礼で地域合同の儀礼を生み出すなど，規制される対象や目的も多様であり，多視的な変容の理解が必要である。そして墓地法制は，公衆衛生的な取り締まりを目的としており，医療的な要因による近代化とも連関している。

医療的要因としては誕生と死の民俗に大きな影響を与えていった。医療の介在により，従来の多くの呪術的な儀礼が消滅する一方で，新たな民俗も生成しており，民俗と生物医療の相克が判明した。とくに戦後成立する水子供養は，当初産科医や助産師，胎盤処理業者など医療関係者によって担われており，そこにはエコー診断など医療技術の発達による生命観の変化が背景にあることが指摘された。医療化は法制や行政によって推進され，また受け入れる社会状況とも関連があり，やはり相互の要因を見ていく必要がある。

経済的要因については，従来の民俗学では生産に関する研究の方が優位であったが，特に近代以降の儀礼を考える場合には，消費文化の影響は無視することができない。消費としての儀礼を通して，社会階層の顕示だけでなく，結婚式や葬儀を通しての私らしさの構築など個の形成にも浸透しており，社会的行為としての消費を積極的に検討することが重要であることが提示された。

社会的要因については，上記三つの要因とつねに相関関係にあるが，とくに地域のコミュニティーの変容に関して，儀礼や祭礼の価値の変化と，その積極的な利用による紐帯の形成など単純な衰退のプロセスではないことが明らかとなった。また医療現場ではあらためてコミュニティーの有効性などが問われ民俗知識の重要性も指摘されている。

こうして多様な相関関係の中で民俗儀礼を検討していく必要があること認識されたが，こうした儀礼について，博物館としての資料化の指針を見いだすことが第二の目的であった。資料に関しては，個々の儀礼に関するものの外，生活改善運動のリーフレットなど変容に関する資料も拡大していく必要があることが明らかとなった。ただし，こうした変容に関する資料について，また儀礼資料自体も生活実践の一つであることで，儀礼用とだけ登録されているわけではなく，資料情報の多層化と集積が必要であり，歴史学や社会学など関連分野との協業の必要性も指摘されている。

さらに儀礼は一回限りで消費する消耗品も重要であることから積極的な収集をはかることや時には複製品の製作なども行うことが求められる。さらに近代以降の特徴として，カタログや広告など，消費文化の進展による儀礼産業に関連する資料や家庭等で保存されているアルバムなどの写真資料，ビデオなど映像資料も重要な調査資料となりつつあり，資料の収集保存だけでなく，研究や公開に利用可能な体制の構築も必要であることが指摘された。

以上のような研究成果に関しては，本館の研究報告において集成していきたい。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

前田俊一郎　文化庁伝統文化課・文化財調査官
土居　　浩　ものつくり大学技能工芸学部・准教授
板橋　春夫　國學院大學・講師　　鈴木由利子　宮城学院女子大学・講師
浮ヶ谷幸代　相模女子大学人間社会学部・教授
岩本　通弥　東京大学大学院総合文化研究科・教授
門田　岳久　立教大学観光学部・助教
小国　喜弘　東京大学大学院教育学研究科・教授
重信　幸彦　本館・客員教授　　松田香代子　愛知大学・講師
加藤　紫識　千代田区日比谷図書文化館・文化財調査指導員
大本　敬久　愛媛県立歴史文化博物館・専門学芸員
俵木　　悟　成城大学文芸学部・准教授
立石　尚之　古河歴史博物館・学芸員　　小山　隆秀　青森県教育庁文化財保護課・主査
小井川　理　神奈川県立歴史博物館・学芸員　　八木　　透　仏教大学歴史学部・教授
青木　隆浩　本館研究部・准教授　　原山　浩介　本館研究部・准教授
常光　　徹　本館研究部・教授　　松尾　恒一　本館研究部・教授
○小池　淳一　本館研究部・教授　　◎山田　慎也　本館研究部・准教授
〔リサーチ・アシスタント〕
田中　孝枝　東京大学大学院・博士課程３年

◇公募型共同研究

（１）「高松宮家伝来書籍等を中心とする漢籍読書の歴史とその本文に関する研究」2011～2013年度
（研究代表者　静永　健）

１．目的

本公募研究は，高松宮家伝来禁裏本等のコレクションの中から，特に漢籍に重点を置き，その読書歴史（何を，どのように読んだか）と，またその本文についての精密な調査を行い，それらの書籍が，何時，どのようにして我が国に伝来したのか，そして宮家所蔵となる過程にどのような事実があったかを究明するものである。

中でも『古文孝経』や『周易抄』，『論語集解』，『二十一史』，『白氏文集』については，宮内庁書陵部蔵本等との比較調査を通じて，日本における漢籍の受容とその展開のありかたを具体的に把握する。例えば高松宮本の中に室町前期尊円親王筆と伝わる「琵琶行」および「長恨歌」があるが，これら白楽天の漢詩は，現在一般に通行している本文と著しい異同がある。その本文系統の考察は本研究代表者静永および分担者の神鷹，陳などがこれまでにも他の伝来資料をもとに随時分析をすすめてきている。今回，歴博に所蔵される高松宮家伝来禁裏本に存するこれら白楽天の詩巻を中心に，日本の全国各地に伝来している白詩旧鈔本を整理

し分析することで，我が国の平安中後期からおよそ室町期までに至る「知」の体系とその伝承過程を究明したい。

研究期間内には，これらの文献資料の公開（写真版等による出版）と分析を行い，内外の研究者の利用に便ならしめたい。また，年数回に分けて行う調査活動のうち１回は，テーマに応じて，中国・韓国等，海外の文献学研究者をも招き，これらの資料を「東アジア」の視点から眺めた意義について，共同調査と研究懇談会を開催し，その知見を更に深めてゆきたい。なお，この研究は，もちろん和書（和歌文献など）の研究促進にも役立つ。『和漢朗詠集』や中世の『和漢聯句』などの漢籍と交響する和歌文学についても，中国文学×日本文学の垣根を超えて，新たな知見が提示できるものと思う。

２．今年度の研究目的・計画

最終年度である本年は，いよいよ各研究分担者が三年間の研究を報告書としてまとめるべく，最終的な調査と研究をおこない，その成果を研究会等で報告することとなった。また，国内および海外の学会シンポジウム等にも積極的に参加し，その研究結果の妥当性について，内外の研究者と討議するほか，この共同研究の存在をアピールすることにつとめた。幸いにも昨年度歴博で開催した国際シンポジウム「東アジアをむすぶ漢籍文化」については参加した研究者などから多くの反響を得，特に浙江工商大学日本研究センターの王勇教授，南京大学域外漢籍研究センターの張伯偉教授，復旦大学中文系の陳尚君教授唐代文学会会長等の斡旋により，平成26年３月に北京大学中文系において「東亜漢籍研究・以日本古鈔本及五山版漢籍為中心国際学術討論会」が開催されることとなった。今回の歴博共同研究の成果が海外より高い関心を持たれている証拠であり，研究代表の静永の他，この共同研究分担者も積極的にこの招請に応じることとした。

３．今年度の研究経過

第一回研究会　10月12日（土）　於秋田大学

報告①大渕貴之「『白氏六帖』と白居易の文」

第二回研究会　11月２日（土）　於歴博

報告①髙田宗平「国立歴史民俗博物館所蔵『論語集解』簡介」

報告②陳　　「屋代弘賢と『白氏文集』―内閣文庫蔵『管見抄』の抄写者について―」

報告③土屋　聡「『秋萩帖』所収王羲之尺牘十一通について」

報告④堀川貴司「五山僧による中国詩総集の編纂について」

報告⑤井原今朝男「日本中世における天皇知の独占体制崩壊と清原家漢学私塾の開始」

第一回資料調査　５月16日（木）～17日（金）　於歴博

調査者：静永健・神鷹徳治・陳・中尾健一郎・大渕貴之。

第二回資料調査　８月27日（火）於歴博

調査者：静永健・陳・土屋聡・中尾健一郎・大渕貴之。

第三回資料調査　９月13日（金）～９月19日（木）　於中国・山東大学中文系

調査者：静永健・陳。

第四回資料調査　10月14日（月）　於山形県鶴岡市致道博物館

調査者：静永健。

第五回資料調査　10月30日（水）～11月６日　於中国・浙江省温州市および杭州市
調査者：中尾健一郎。
第六回資料調査　11月１日（金）　於富山大学附属図書館ヘルン文庫
調査者：静永健。
第七回資料調査　11月17日（日）　於福岡県大野城市目加田文庫
調査者：神鷹徳治・陳・大渕貴之。

４．今年度の研究成果

今年度は共同研究の総仕上げとして，歴博所蔵貴重漢籍資料（木活字版白氏文集など）の写真撮影と，その朱点や書き入れなどの目視調査，また，全国各地の図書館等における漢籍所蔵調査，そして，国内外の学会や学術シンポジウム等の機会を利用して，ここまでの我々の研究成果の紹介と，内外の研究者とのさまざまな意見交換を行った。特に９月には研究代表の静永と研究分担者の陳広島大学准教授が中国・山東大学に赴き，中国文心雕龍学会（古典文学理論研究の中国最大級の全国学会）に参加，あわせて静永は山東大学儒学高等研究院において特別講演「日本古鈔本を用いた白居易〈琵琶行〉研究」を行い，日本に残る貴重な中世古写本の研究意義を紹介した。中国の学術界ではいまだこれら日本の旧鈔本研究の意義について十分な認識が得られているとは言えず，我々が具体例を挙げて説明することは，日中の学術交流の面でも大変有意義なことであった。また，10月12日～14日に開催された日本中国学会においても，大渕貴之鹿児島大学講師が研究発表を行い，最終日には静永がその開催の総責任者となって「中国学におけるテキストの諸問題」というシンポジウムを開いた。いずれもこの歴博所蔵漢籍の熟覧調査によって得た知見に基づいての活動である。これらの学会発表によって，さまざまな立場の多くの研究者たちから貴重な学術的意見を得た。このことも本年度末に纏められる研究報告に好い刺激となった。更に山形県鶴岡市に保存されている昭和の漢詩人土屋竹雨（1887～1958）旧蔵の漢籍群，富山大学附属図書館のヘルン文庫（小泉八雲1850～1904の旧蔵書コレクション），福岡県大野城市に移管された中国文学研究者目加田誠（1904～1994）の旧蔵書群など全国各地の漢籍コレクションとその保管状況を実地に調査することができた。我が国の重要な文化遺産である漢籍（とくに明治期以前に日本に流入および覆刻された線装本の書籍）の保存について，特に地方の大学や自治体図書館での現状と今後計画されている取り組みなどについて把握するとともに，これらの情報を繋ぎ，適切なアドバイスができる全国的な機関の設立の必要性を痛感した。

11月にはいよいよ共同研究の報告書作成のための最後の研究会を開催した。髙田宗平当館外来研究員，陳広島大学准教授，土屋聡岡山大学講師，堀川貴司慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授，井原今朝男当館研究部教授が研究報告を行い，その研究成果について討議するとともに，三年間の共同研究の成果の総括についても話し合った。

５．全期間の研究成果

古来，中国より伝来し長い歴史を経て日本に保存されてきた，いわゆる「漢籍」については，その受容の歴史を探ることの意義は大きい。本共同研究の研究報告では各氏の研究成果を，Ⅰ歴博所蔵漢籍の研究，Ⅱ漢籍の日本伝来とその本文，Ⅲ漢籍から見えてくる中世の「知」の世界，の三つのカテゴリーに分けて示す予定であるが，これは漢籍研究に特徴的な三つの特性にもとづいて分類したものである。

まずその特性の一つが連続性である。第Ⅰ群に収録予定の髙田宗平氏の「国立歴史民俗博物館所蔵『論語』書誌解題稿」が示しているように，我が国には古代から中世近世に至る各時代において，中国から多くの書籍が輸入された。しかもその各時代の異なるテキストが我が国において蓄積され，発源地である中国にはもはや類似するものが見られないような独自のテキストが生み出され，継承されていることは，この『論語』一書を以て概観することが可能である。

紙・火薬・印刷・羅針盤という言葉があるように，書籍文化（紙に印刷された書物）は古代中国文明を代表する，その最たるものの一つと言えよう。しかし，その書籍の印刷がどのようにして発生し，そしてそれが現在一般に見られるような糸綴じ本（線装本）の形態に進化していったのかについては，現在の本土中国においてその考究に資する物証はあまり多く残っていない。だが，その視線を日本に所蔵される中世以来の書籍（すなわち日本において「漢籍」と称されて保存されている古文献）に広げることによって，その解明は大いに進展するように思われる。陳氏の「上杉本『史記』の原本形態と渡来時期について―東アジア印刷史における線装本の濫觴に関する一考察―」は，その多くの部分において今後のさらなる検証が待たれるものだが，日本を飛び超え，東アジアの書籍文化について幅広く考察しようとする意欲的な報告となっている。

また，中国において印刷が本格化する宋代以前，その文献の本文はすべて写本によって伝承されてきたはずであるが，それがいったいどのようなものであり，かつ，宋代においてそれらが初めて印刷される（版木に刻される）に当たって，その本文にはどのような無意識的また意識的な改訂作業が加えられていたのかについては，いまだ十分には検証されていない。我が国において，このように印刷本以前の本文を持つ漢籍を特に「旧鈔本」と称している（参照『旧鈔本の世界―漢籍受容のタイムカプセル』神鷹徳治・静永健編，勉誠出版アジア遊学140，2011年４月刊）。当国立歴史民俗博物館にもそのような旧鈔本と認定される貴重な漢籍が数多く所蔵されているのだが，静永健「高松宮家伝来禁裏本『長恨歌』詩巻・『琵琶行』詩巻について」は，唐の詩人白居易（白楽天772～846）の代表作を書き取った詩巻が，その本文の系統としては印刷本（宋刊本）以前のものであることを紹介したものである。すなわち，この二つの詩巻は14世紀南北朝時代のもの（さらにその一巻は江戸時代に入ってからの精巧な複写本）ではあるが，その本文は九世紀に日本に伝えられた白居易の原作にまでさかのぼり得る貴重なテキストであることを述べた。日本に所蔵される漢籍群は，このように日本の長い時空間を直接つないでいる貴重な資料なのである。

漢籍についての第二の特性は広域性である。研究報告の第Ⅱ群に収録予定の各報告は，歴博を飛び出し，日本各地に所蔵されているその他の漢籍資料について，その本文や字体，表記法などをも精査熟読して研究をすすめたものである。土屋聡氏の「『秋萩帖』所収王羲之尺牘十一通について」，また大渕貴之氏の「光明皇后筆『楽毅論』に見える重文符号」は，ともに中国の書聖王羲之（307？～365？）の法帖として日本に伝来している国宝を取り上げたものであるが，このような墨跡資料においても，中国に伝承されているものと日本の伝存資料とは，その本文に著しい異同があることを指摘したものである。そもそも書写資料における本文の異同は，一般的に見れば単なるケアレスな「書き違え」に端を発するものであろうが，奈良時代の遣唐使によって伝えられ，正倉院等第一級の宝庫において大切に保存されてきたものは，間違いなく中国唐王室所蔵品からの精巧な複製に由来するものであろうし，中国の宋代以降に蒐集された法帖（現在ではこちらが王羲之のスタンダードなものと見なされている）とはやはり資料価値としては対等に比較検証されるべきであろう。これら正倉院御物や東京国立博物館所蔵の資料についても，その歴史的な考察にあたっては当国

立歴史民俗博物館が中心となって調査研究をすすめてゆく必要があるのである。

また宮内庁書陵部に所蔵され，これまで一般の研究者にも十分な情報が伝わっていなかった白居易詩篇の貴重な断片についての報告が，住吉朋彦氏の「『白氏文集』巻十六『東南行』校記」である。日本に残る漢籍の研究は，ある一箇所に所蔵される資料だけを見ているのみでは何も始まらない。全国各地に所蔵される同一書籍の情報を可能な限り集積し，それらの本文を一つ一つ丹念に見比べてゆかなくてはいけないのである。しかし，例えばこの『白氏文集』に限って見ても，現実は理想からはほど遠く，全国各地に貴重な旧鈔本（神田本・金沢文庫本・管見抄本・要文抄本など）が散在し，かつ幾つかは研究者でさえも容易に熟覧が許されていないために，十分な研究ができない状態にある。今回の我々の共同研究の成果が，このような障壁を解消してゆく切っ掛けとなって欲しいと，切に願うものである。

さて，日本における『白氏文集』の版本として，世界的にも極めて貴重とされているものに，江戸初期那波道円（1595～1648）が刊行した，いわゆる那波本『白氏文集』がある。今回，この研究報告には神鷹徳治氏の「那波本の源流と成立」が収録される。神鷹氏は，歴博高松宮伝来禁裏本コレクションに含まれる一本はもとより，その他全国各地に残っている同版本を丹念に調査した結果，那波本は，従来の説のように単に朝鮮半島に残存していた宋版の覆刻本をそっくりそのまま出版しただけのものではなく，その当時（16世紀末）に日本に伝わっていた旧鈔本の各種『白氏文集』本文をいくつか参照するところがあったことをはじめて指摘している。日本の漢籍出版の歴史についてもこれまでに無い新しい知見を提供する重要な成果である。

ここで，この機会に我が国における漢籍の影響の大きさ，多様さについても，皆さんに思いを巡らせて欲しい。西岡芳文氏の「瀟湘八景から金沢八景へ―日本における異国憧憬の一展開―」は，その影響が単に文字上にとどまるものではなく，我が国の伝統的な景観にも及んでいることを考察したものである。なお，本共同研究期間中の最大の活動として平成24年（2012）11月に歴博で開催した国際シンポジウム「東アジアをむすぶ漢籍文化―敦煌から正倉院，そして金沢文庫へ」があるが，シンポジウムの翌日には中国，韓国，香港，台湾等海外からの研究者を中心に鎌倉および称名寺・金沢文庫の巡見調査を行った。日本の漢籍保存の歴史において，極めて重要な意義を有する金沢文庫跡については，海外の研究者にはその場所や文物についての理解がまだまだ十分ではないと考えたからである。その反響の大きさについては，この報告文の後段に再び触れたい。

最後に第三の特性として挙げられるのは階層性である。研究報告第Ⅲ群にはまず井原今朝男氏の「中世天皇知の集中・拡散と清原家の漢学私塾」，そして福島金治氏の「鎌倉中期の京・鎌倉の漢籍伝授とその媒介者―金沢文庫とその周辺―」を収録予定である。今回，この共同研究の代表となった私静永の率直な告白を述べるならば，日本に残る「漢籍」というものが日本の歴史研究にいったいどのような新しい成果を提示することができるのか，その開始当初はまったく五里霧中の状態であった。これはひとえに代表の私が文学（しかも中国古典文学）を専攻する者であり，歴史学，考古学そして民俗学研究を主とする当館の研究方針からは遠く乖離していたからである。研究会の途中においても，この問題がしばしば表面化し，その研究活動が著しく頓挫する場面も幾たびか存在した。しかし，そのそもそもの原因は，近世近代以来，中国から持ち込まれた「漢籍」を，我が国独自の文化の領域から意識的に排除し，その前提の上で我が国の歴史や文化の成り立ちを考えてゆこうとしてきた日本のある固有の学術思想史の流れに端を発するものであることに，私たちは少しずつ気づきはじめた。

なお，私たちのこの共同研究には，幸いにも現在の日本の学術研究，そして社会的な新しい潮流も，大い

なる味方となってくれた。

その最も顕著なものが，中世の特に室町時代に主に展開された京都五山文化の研究である。日明貿易の再開とともに一気に花開いた「唐物」への憧れ，それがやがて「和漢の境をまぎらかす」という名言とともに完成されていった我が国の茶の湯文化の研究などの進展によって，我々の日本所蔵漢籍の研究も，日本の文化の流れを知る重要な研究資料となり得ることが少しずつ了解されていったことは，この三年間の研究活動の中でほぼ同時並行的に経験できたことがらである。また，残念ながら採択には至らなかったが「武家の古都・鎌倉」を世界遺産に登録しようという地域の運動もあり，中世鎌倉文化についての研究が社会的にも大いに話題となったことは我々の研究の追い風となった。日本文化の研究において，漢籍読書の歴史を探ることはやはり不可欠なのである。堀川貴司氏の「『錦嚢風月』解題と翻刻」，水口幹記氏の「名古屋市蓬左文庫蔵『天文図象玩占』について―附・全文翻刻」，そして中尾健一郎氏の「光源院本『梅花無尽蔵』について」の各調査研究は，従来どの研究分野においても顧慮されなかった（言わば日本研究と中国研究の狭間に埋没していた）中世の資料にそれぞれ新たな光を当てた研究報告である。堀川氏が紹介する『錦嚢風月』は室町時代の五山僧による唐宋元明の七言絶句の一大選集であり，中尾氏の紹介する『梅花無尽蔵』も室町末期の五山僧の詩集の江戸期における異本調査である。また，水口氏の紹介する『天文図象玩占』は，尾張徳川家に伝えられた天文瑞祥に関する貴重な図像集であり，いまだ日本および中国においても十分な研究が行われていない書籍である。

さて，漢籍研究が開拓する新たな歴史研究の課題とは何か。今回の共同研究において，その最も重要な成果が前述の井原氏，そして福島氏の報告である。すなわち，我が国古代（奈良～平安前期）において，漢籍は天皇が独占する「知」の象徴であった。言わば威信財の一つとして厳重に保存されていたものでもあったのである。しかし11世紀，『白氏文集』の影響の下に『源氏物語』が誕生したことに象徴されるように，この天皇独占の「知」はまず藤原摂関家に許可され，やがて次の時代には鎌倉御家人（安達氏・金沢北条氏など）にも徐々に「伝授」が許されてゆく。その「天皇知」から「貴族知」への階層的な授受，また「京都」から「鎌倉」への地域的な文化の伝達が，具体的にどのようであったのかを知るためには，金沢文庫を中心とする中世の漢籍所持（伝写）の過程を探ることが最も有効であることは，今回の共同研究によって，おそらくはじめて明確化された成果だと言えるのではなかろうか。漢文学および書誌学研究と日本歴史学研究とが約一百数十年の時を経てようやく辿りついたそれぞれの融合のかたちが今回の共同研究の到達点なのである。

なお，最後にもう一つ報告すべき喜ばしい成果がある。それは平成24年の歴博国際シンポジウム（前述）の成功を受け，その第２回シンポジウムともいうべき国際会議が，本共同研究終了の直前，平成26年（2014）３月に中国の北京大学で開催されたのである。正式名称を「東亜漢籍研究：以日本古鈔本及五山版漢籍為中心国際学術討論会」とし，日本と中国双方の研究者約30名が集められ，二日間にわたって白熱した討論が展開された。すなわち，我々をはじめ現在日本で新たな研究が展開しつつある日本の「古鈔本」と，中世の日本独自の印刷文化である「五山版」についてを専門的に討論するシンポジウムである。けだし「日本の漢籍」のみをテーマとしたシンポジウムが中国で開催されるのは，おそらくこれが初めてであろう。

シンポジウム最終日の総合討論では「古鈔本（古写本）と旧鈔本とはどのように違うのか？」そして「中国の出版印刷と日本の五山版の境界線はどこか？」の問題に集中して討論が行われた。特に静永がその日本側代表となって討議し，一応の結論を見るに至ったのは，前者「古鈔本と旧鈔本の違い」である（「五山版」

の問題については住吉朋彦氏が主に当たった)。「古鈔本（古写本)」は目前の所蔵資料そのものの年代に即して判別するもの（例：平安時代写本，鎌倉時代写本……）であり，筆写者の署名や紙質等に基づいて判断されるものであるが，「旧鈔本」とは，あくまでも筆写された本文（文字の異同）について定義されるものであって，印刷本（中国宋刊本）以前の古いテキストを保存しているものは，筆写の形態や書写者，また現存している資料の最終的な筆写年代とは関係なくすべて「旧鈔本」と言えるということである。

例えば……として，私は歴博所蔵の高松宮家伝来禁裏本「長恨歌」詩巻と「琵琶行」詩巻を挙げて説明した（本研究報告に収録予定)。この両詩巻は日本の南北朝時代の書家尊円親王（1298～1356）の筆写したもの（かつ「長恨歌」詩巻の方はその江戸時代転写本）である。中国の王朝に当てはめて考えれば，すでに元（モンゴル）の時代にあたる。しかし，その本文を仔細に比較検討すると，中国に現存する宋刊本とは異なり，逆に『源氏物語』中の引用文や中国北宋初期の『文苑英華』等に一致するのであり，中国においてはおそらく『白氏文集』の印刷本が製作される際に「誤った本文」として排除された本文である（しかし実は白居易の原作に最も近いもの）と。

日本に残る貴重な漢籍群は，発源地の中国の古典研究にも大きな成果をもたらし得るものとして，その更なる研究が期待されているのである。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎静永　　健　九州大学・准教授　　大渕　貴之　鹿児島大学・講師
神鷹　徳治　明治大学・教授　　住吉　朋彦　慶應義塾大学附属研究所斯道文庫・教授
陳　　広島大学・准教授　　土屋　　聡　岡山大学・講師
中尾健一郎　梅光学院大学・准教授　　西岡　芳文　神奈川県立金沢文庫・学芸課長
福島　金治　愛知学院大学・教授　　堀川　貴司　慶應義塾大学附属研究所斯道文庫・教授
水口　幹記　立教大学・助教　　○井原今朝男　本館研究部・教授
小倉　慈司　本館研究部・准教授　　高田　宗平　本館研究部・非常勤研究員

（２）「柳田國男収集考古資料の研究」2011～2013年度
（研究代表者　設楽博己）

１．目　的

国立歴史民俗博物館には，柳田國男が明治後期に収集した考古資料が収蔵されている。収集された遺物には，「ソロイヨフカ」という注記があることからサハリンで採集されたと推測される磨製石斧や，北海道の縄文時代や続縄文時代の土器，「長野県下伊那下川路」で採集された打製石斧などがあり，合計66点の資料からなっている。この資料は，柳田のご子息為正氏が成城の中の原書店に寄贈したものを，歴博が収蔵したものであり，素姓の正しいコレクションである。

本研究は，これらの資料の整理作業と分析を通じて，柳田考古資料の全体像を明らかにするとともに，それを基礎に柳田の考古学に対する考え方の遍歴をたどり，明治～昭和初期という，日本のあらゆる学問が科学的な様相を帯びてくる時期に，考古学と民俗学がお互いをどのように意識しながらそれぞれどのように個々の学問の体系を構築していったのか，人類学や民族学，文献史学など周辺の学問とのかかわりあいのな

かで明らかにしていくことを目的とする。

柳田がサハリンにわたった明治後期は，日露戦争によってサハリン南部が日本領となった時期である。柳田の渡海の目的や考古遺物を収集した目的は何であったのか。おそらく日本人とは何かという問題の解明が，目的のひとつであったと推測されるが，それは日本の領土拡張政策と深くかかわる動きであった。当時の諸学界をあげての研究テーマであった日本民族起源論争のなかで柳田のサハリン渡航目的を理解することを手掛かりに，周辺学問のこの問題に対する動きの意義を探ることを目的とする。

個別の主要な目的は，以下のとおりである。

①柳田旧蔵考古資料の整理と分析

②民俗学と考古学の方法論確立過程における相互交渉の理解

③柳田の考古学に対する考え方の変化とその理由の解明

④近代史学史における考古学・民俗学の位置づけ

⑤柳田國男旧蔵考古資料の学問的意義の検討

２．今年度の研究目的

考古班は，昨年度に行った柳田考古資料の実測・写真撮影に引き続き，トレース・版下作成など，基礎的な整理作業をおこない，その年代や系統などの基本的性格をおさえることを目的とする。また，同時代の人類学者や考古学者，歴史学者の日本人論を俯瞰しつつ，柳田の初期の日本人論について考察を及ぼす。民俗班は，成城大学民俗学研究所に収蔵されている「柳田文庫」を手がかりとして，考古学関連書籍の調査を行い，柳田が民俗学を独立した学問として構築していった時期に，考古学に対してどのような関心を持っていたのかを検討する。また，共同研究員全員でサハリンを訪問して「樺太紀行」において柳田國男が訪れた遺跡群を調査し，考古学・民俗学双方の視点から，柳田が考古資料をどのような目的で収集したのか，樺太紀行が柳田のなかでどのような意義をもっているのかの検討を行う。

３．今年度の研究経過

2013年度は研究会を３回開催した。また，柳田國男収集考古資料の図版の判組み作業をおこなった。以下にその概要を記す。

第４回研究会　2013年６月22日～23日　於：遠野文化研究センター，遠野市博物館

〈６月22日（土)〉

黒田篤史（遠野文化研究センター，ゲストスピーカー)「遠野物語と考古学」

佐藤健二「『遠野物語』前後の柳田国男」

山田康弘「鳥居龍藏と柳田國男―日本人種論の動向をめぐって―」

設楽博己「今年度の研究計画について」

〈６月23日（日)〉

・デンデラ野，ダンノハナ等，「遠野物語」における考古学関係の記載がある場所を見学

・遠野市立博物館，とおの物語の館を見学

第５回研究会　2013年10月28日～29日　於：宮崎県椎葉村

〈10月28日〉

・椎葉勝氏所有の焼畑見学

研究会　於：民宿焼畑

和田健「1900年～1910年代の柳田国男と長野―養嗣子，婚約，講演旅行―」

工藤雄一郎「柳田國男旧蔵考古資料について」

〈10月29日〉

・椎葉村民族芸能博物館見学

第６回研究会　2014年３月22日～23日　於：国立歴史民俗博物館

〈３月22日〉

・柳田國男旧蔵考古資料の見学，再調査

・工藤雄一郎ほか「柳田國男旧蔵考古資料について」

・熊木俊朗「鈴谷貝塚と鈴谷式土器」

・福田正宏「鈴谷式成立直前のサハリンと柳田資料の位置づけ」

・高瀬克範「柳田國男コレクション中の石器の使用痕分析」

・林正之「柳田國男著作中考古学関連箇所引用表・年表作成について」

〈３月23日〉

・設楽博己「柳田國男と考古学―ミネルヴァ論争と縄文農耕論とのかかわりから―」

・山田康弘「鳥居龍藏と柳田國男―日本先住民論をめぐる二つの対応―」

・小池淳一「柳田國男と考古学」

・佐藤健二「柳田の樺太紀行・前後」

・和田　健「講演旅行・人生の節目の1900年代から見る柳田國男の考古資料」

・設楽博己「来年度以降の計画について」

４．今年度の研究成果

第４回研究会では，柳田國男と関連が深い岩手県遠野市において研究会を開催した。ゲストスピーカーの黒田篤史は，柳田國男の「遠野物語」112話にみられる考古学関係の記述を手がかりに，当時の柳田國男の考古学に対する感心の高さを解説した。佐藤健二は『産業組合』『農政学』『後狩詞紀』『石神問答』など1902年から1914年頃に刊行された柳田國男の著作に焦点を当て，『遠野物語』の位置づけや柳田國男の「農政学」と「民俗学」の錯綜について議論した。山田康弘は，ある一時期に同じく日本における「先住民」の存在を主張していた鳥居龍藏と柳田國男を対比し，山人＝日本先住民＝アイヌ説がどのような形で提唱され，それはどのような形で展開し，そして収束していったのかについて，当時の形質人類学の研究状況を踏まえながら，戦前における日本人種論，特にアイヌを中心とした先住民論のあり方について議論した。

第５回研究会は宮崎県椎葉村で開催した。和田健は柳田國男旧蔵考古資料のうち，特に地名の手がかりのある注記があった収集遺物３点（①A-624-1-2（打製石斧），②【A-624-2-2（書付和紙）】【A-624-2-3（剥片）】【A-624-2-4（自然小礫）】，③【A-624-1-3（打製石斧）】）に留意して，1900年代の比較的長期間の全国を巡る講演旅行等の足跡を踏まえ，この期間に取得した可能性がある各遺物に対する柳田の興味・関心を考え，その意味づけを行った。工藤雄一郎は，「柳田國男旧蔵考古資料」の石材鑑定の結果について報告した。石材

に東北・北海道・サハリンに産地がある硬質頁岩が多いことを指摘し，柳田為正氏の東京の自宅周辺での採集活動とは異なる遺物であることを議論した。

第６回研究会では，これまでの３年間の研究成果に基づいて，「柳田國男旧蔵考古資料」を再度研究員全員で確認し，土器や石器の出土地や型式学的な位置づけを議論した。特に柳田為正氏による収集活動の時期と，柳田國男による収集活動の時期の違いなどを明確化し，「柳田國男旧蔵考古資料」のうち，柳田國男と特に関係が深い資料を特定した。これに加えて，柳田為正氏の自宅から発見されたときにいくつかの資料が新聞紙に包まれていたが２点の新聞紙がこれまで日付不明であった。これについて民俗班が調査を行い，１点は明治40年の新聞紙の可能性が高いこと，１点は大正５年の可能性が高いことを確認した。また，27年度の研究報告の刊行に向けて，共同研究員が執筆予定内容を報告した。なお，リサーチアシスタントの林正之は，『柳田國男全集』から考古学に関連した記述を抜粋し，一覧表を作成する作業の成果を報告し，柳田の考古学に対する考え方にいくつかの変化の画期がみられることを指摘した。また，『定本柳田國男集』年譜をもとに柳田國男と考古学に関わる年表を作成した。

５．全期間の研究成果

３年間を通じた共同研究により「柳田國男旧蔵考古資料」の個別の石器・土器について，その年代や系統などの基本的性格を把握することができた。「柳田國男旧蔵考古資料」は，柳田為正の自宅の床下から柳田為正の収集品に混じってみつかったものであり，一部柳田為正の収集品の混在の可能性があったが，明確な注記があるものや日付が分かる新聞紙等に包まれた資料は，柳田國男の収集品である。柳田國男自筆の墨書による包み紙や，日付が判明している新聞紙に包まれていた資料から，柳田國男による収集活動は主に1905（明治38）年から1908（明治41）年に行われた可能性が高いことが明確となった。これは柳田為正の生前のものであり，東京周辺において柳田為正が行った考古資料の採集活動の時期である1927年（昭和２年）から1931年（昭和６年）頃までとも異なっている。

特にサハリン関係資料については，サハリン国立大学およびサハリン州郷土博物館所蔵資料と関連遺跡を調査し，柳田がどの遺跡でどのような資料を採集したのかを確認した。石器にラベルによる注記がある資料には「ソロイヨフカ」「吉川」「田村」などの記載があるが，これらの資料はサハリンのソロイヨフカ遺跡群および南貝塚遺跡にも類似資料があることを，2012年に実施したサハリン大学所蔵資料の見学および関連遺跡の現地見学において確認することができた。「柳田國男旧蔵考古資料」の土器には，道北～サハリンのオホーツク式土器（十和田式），北海道の御殿山式など，サハリンや北海道で採集された資料が含まれており，これらは柳田國男の1906年の信州・東北・北海道・樺太旅行の際に収集するか譲り受けた資料である可能性が極めて高いことを再確認した。これに対し，「前山」の注記がある石斧や「上田国分寺」の注記がある瓦は，柳田國男の筆跡とは異なる可能性があり，入手の経緯が不明なものもあることがわかった。また，「柳田國男旧蔵考古資料」の特徴として，石斧や尖頭器などの特定の器種への偏りがみられることから，発掘品を一括して持ち帰ったものではなく，特徴的な遺物を譲り受けるなどして持ち帰ったものと考えられる。

一方，民俗学と考古学の方法論確立過程における相互交渉についての理解を深めるため，柳田の考古学に対する考え方の変化とその理由を学史的に検討するとともに，近代史学史における考古学・民俗学の位置づけについて考古学・民俗学・歴史学・人類学の複数の視点から議論を深めた。当時の諸学界をあげての研究テーマであった日本民族起源論争のなかで柳田のサハリン渡航目的を理解することを手掛かりに，周辺学問

のこの問題に対する動きの意義を探った。これらにより,柳田國男旧蔵考古資料の学問的意義を明確化した。

なお，共同研究の成果は国立歴史民俗博物館研究報告特集号として，平成27年度に刊行することを目標に準備を進めている。また,「柳田國男旧蔵考古資料」とそれが残された学問的背景に関する小規模な展示を行いたいと考えている。

６．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

熊木　俊朗　東京大学大学院人文社会系研究科・准教授
佐藤　健二　東京大学大学院人文社会系研究科・教授
高瀬　克範　北海道大学大学院文学研究科・准教授
福田　正宏　東京大学大学院新領域創成科学研究科・准教授
和田　　健　千葉大学国際教育センター・准教授
小池　淳一　本館研究部・教授　　松田　睦彦　本館研究部・助教
山田　康弘　本館研究部・准教授
◎設楽　博己　東京大学大学院人文社会系研究科・教授　　○工藤雄一郎　本館研究部・准教授
［リサーチ・アシスタント］
林　　正之　東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
［研究協力者］
黒田　篤史　遠野文化研究センター文化課・主任兼学芸員
前川さおり　遠野文化研究センター　調査研究課　主査兼学芸員

（３）「歴史資料デジタルアーカイブデータを用いた知的構造の創生に関する研究　―小袖屏風を対象として」2013～2015年度
（研究代表者　濱上知樹）

１．目　的

歴史資料デジタルアーカイブの蓄積が進む中，その莫大なデータの利活用の方法が重要となっている。電子的に保存されたデータベースとしての静的な存在ではなく，非構造化されたデータから意味や新たな構造を抽出する自律性を付与することで，歴史資料の新たな利活用とこれを用いた研究の発展が期待できる。本研究は，歴史資料デジタルアーカイブをBig dataとみなし，様々な分野で活用されている画像処理・解析を初めとする特徴抽出と，これらの解析技術で培われた機械学習，セマンティックデータ処理を用いて，莫大なデジタルアーカイブからの知識発見をはかるシステムをつくることで，この期待に応えることをめざす。

この研究の嚆矢として，まず野村コレクション小袖屏風のデジタルアーカイブデータについて検討を開始する。小袖屏風画像は，既にデジタル化がなされており，画像の様々なレベルにおける特徴量の抽出とその構造化を進め，さらに他の史資料についても検討を拡大する。最終的には歴史資料デジタルアーカイブデータを用いた知的構造の創生をはかり，歴史研究の新たな展開と，得られた成果の効果的な展示技術に結びつけることを目的と定める。

２．今年度の研究計画

初年度は，小袖屏風画像の高精度デジタルアーカイブデータからのメタ構造の抽出準備と試行を重ね，次年度以降に着手する，歴史資料高度データマネージメントシステム（仮称）の設計指針をつくる。具体的には，下記の事項を明らかにする。

１．画像メタ情報の自律的抽出アルゴリズムの検討（濱上ら知能化班）
２．高精度画像データからの特徴抽出アルゴリズムの検討（内田・中島ら画像処理班）
３．高精度画像セマンティックデータベースの技術要件に関する検討（富井らデータベース班）
４．次世代デジタルアーカイブのための要件整理（福永らアーカイブ展示班）

３．今年度の研究経過

第１回準備研究会

2013年３月27日（水）　国立歴史民俗博物館　大会議室
濱上知樹　「共同研究趣旨説明」
濱上知樹　「歴史資料デジタルアーカイブの研究動向」
濱上知樹　「小袖と小袖屏風について」
各委員　　（各委員の研究背景を含めた研究紹介）
各委員　　総合討議
その後　　展示見学会

第１回共同研究会

2013年６月７日（火）　国立歴史民俗博物館　大会議室
デジタルファッション（株）代表取締役社長　森田修史　「デジタルファブリケーション技術」
富井尚志　「データ工学技術とユビキタス情報処理」
内田誠一　「画像情報学の基礎と応用」
濱上知樹　「プロジェクトロードマップ」
小澤耕太郎　「リアルな物体展示インタフェースのためのCG技術の調査」
露崎考英　「類似画像検索技術と小袖画像検索への応用」
福永　香　「グランフロント大阪ナレッジキャピタル・メタミュージアムシアター報告」
各委員　　総合討議

第２回共同研究会

2013年３月31日（金）　国立歴史民俗博物館第２会議室
濱上知樹　「H25年度共同研究実績報告および会計報告」
今井さやか　「津波デジタルライブラリの研究紹介」
富井尚志　「歴史資料の新たな利活用を目的とした小袖屏風DBの設計と高度知的検索システムの構築」
矢田紀子　「SIFT特徴による歴史資料の高精細画像合成」
福永香　「キトラ古墳壁画分析について」
濱上知樹　「歴史資料デジタルアーカイブデータからの知的構造の抽出―小袖屏風を対象として―」
各委員　　総合討議

４．今年度の研究成果

小袖屏風画像の高精細画像の撮像を行う傍ら，歴史資料のアーカイブと機械学習を組み合わせたHistorical Big Dataという新たな分野を提案し，画像処理とセマンティックデータベースに関する研究について，３件の学会発表（濱上２件，富井１件）に至った。また，福永らにより，高度展示技術に関する動向調査を進めるとともに，評価用システムを導入し，高リアリティインターフェースのデモシステムを完成させた。以上の成果により，次年度以降に設計される，高度展示システムの理論的基礎および実装技術を明らかにすることができた。

５．研究組織（氏名　所属　役割分担／◎は研究代表者，○は研究副代表者）

内田　誠一	九州大学大学院システム情報科学研究院・教授	高精細画像処理
富井　尚志	横浜国立大学大学院環境情報研究院・准教授	セマンティックDB
福永　　香	（独）情報通信研究機構電磁波計測研究センター主任研究員	高度展示
白川　真一	青山学院大学理工学部・助教	進化的画像処理
矢田　紀子	千葉大学大学院融合科学研究科・助教	視覚的画像処理
中島　慶人	電力中央研究所・システム技術研究所・上席研究員	画像分析
澁谷　長史	筑波大学大学院システム情報工学研究科・助教	特徴機械学習
安達　文夫	本館研究部・教授	大規模資料画像提示技術
○澤田　和人	本館研究部・准教授	美術・美術史としての立場からの助言・要望の抽出
◎濱上　知樹	本館研究部・客員教授／横浜国立大学大学院工学研究院・教授	総括

［人間文化研究機構連携研究］

（１）「人間文化資源」の総合的研究

Ａ「正倉院文書の高度情報化研究」2010～2014年度

（研究代表者　仁藤　敦史）

１．目　的

歴博が創設以来，遂行してきた正倉院文書レプリカを基礎に，デジタル化したうえで表裏の接続状況を容易に観察できるシステムを整備する。そのうえで木簡・漆紙文書などとの比較により古代における帳簿・文書論の深化を目指し，さらには中世や近世文書との機能論的比較を行う。

約一万点に及ぶ正倉院文書は日本古代史研究の基本資料であり，文献史学だけなく多様な学問全般にわたる貴重な歴史情報資源の宝庫といえる。これまで豊富な内容を有する正倉院文書の情報は，保存の問題から十分には公開されてこなかった。これを原本保管機関である宮内庁正倉院事務所の協力を得て，デジタル情報として利用できる基盤を整備することは大きな意義を有する。

古代日本の歴史資源開発は，新たな古代史像を描くことを可能とし，まさに国立歴史民俗博物館が目指す「博物館型研究統合」（博物館という形態をもつ大学共同利用機関としての特徴を最大限に活かし，資料の収集・共同研究・展示を有機的に連鎖した研究）にふさわしい研究事業であるといえる。

正倉院文書に対する研究者の閲覧は極めて限られており，モノクロマイクロフィルムの焼き付けを使用することによって研究を進めるのが一般的である。そのため，朱やシミ色の相違などを区別することができず，写経所文書の多くを占める帳簿の復元的な分析を行う場合に大きな障害となってきた。デジタル化によりその障害を克服し，正倉院文書の分析を飛躍的に容易化しようとする試みである。

資料目録を継続的に出版し，奈良時代フルテキストデータベースを作成している東京大学史料編纂所および原本保管機関である宮内庁正倉院事務所との連携が可能である。さらに正倉院文書研究の中心の一つである大阪市立大学の栄原永遠男研究室が中心となった科研データベースとのコラボレーションも可能である。

２．今年度の研究計画

五年間の研究計画はおおよそ以下のように予定しているが，重点的年次進行を示すもので内容は重複していく。

第一年目　レプリカ撮影およびデジタル的接続　三年目まで継続

第二年目　自在閲覧方式の改良（表示位置反転・微細連動表示・画面切り替えなど）

第三年目　写経所帳簿群の分析，下総・美濃国戸籍等の現地調査，中間総括シンポ

第四年目　中世・近世文書との比較検討，韓国文字史料との比較

第五年目　復元複製の作成，従来の釈文訂正，総括国際シンポ

第四年目の計画としては，自在閲覧方式の改良（透過光写真・往来軸写真などの詳細部分表示・エリア解説枠の表示ボタン・単一左右表示でのエリア解説スクロール・比較用画面表紙など）を中心に，公文情報をこれに入れ込み，高度情報化のツールとしての機能を検証する。ひきつづき，文献目録の充実と，個別断簡ごとの文書情報整理を継続する。宝庫外流失文書の調査などを実施する。

３．研究経過

第一回研究会

１．日時：2013年６月３日（月）　　13：00～17：00

２．場所：国立歴史民俗博物館　第一会議室

３．内容

13：00　　開会

連携研究中間実績評価結果報告書について（仁藤敦史氏）

13：10～　正倉院文書研究支援閲覧システムに関する意見交換（安達文夫氏・鈴木卓治氏）

14：00～　津田光弘氏プレゼンテーション

「画像の仮想的な再配置シミュレータについて」

15：15～　休憩

15：20～　遠藤慶太氏報告

「資財としての書物―正倉院文書の漢籍から」

16：30～　遠藤氏報告討論

17：00　　散会

第二回研究会

１．日時：2013年９月７日（土）　13：30～18：00

２．場所：国文学研究資料館　オリエンテーション室

「９～19世紀文書資料の多元的複眼的比較研究」班との合同研究会

３．内容

13：30　開会

研究会の主旨について（渡辺浩一氏）

自己紹介

13：45～　山口英男氏報告「古代官司の書類と業務―正倉院文書の解析から―」

14：40～　山口氏報告討論

15：05～　高橋一樹氏報告「意思決定の記録と伝達にみる日本中世の官僚制的組織と文書」

16：10～　高橋氏報告討論

16：20～　休憩

16：35～　大友一雄氏報告「幕府役職と大名・旗本」

17：25～　大友氏報告討論

17：50～　研究会のまとめ（仁藤敦史氏）

18：00　散会

現地調査

１．日時：2013年10月24日（木）　14：30～16：00

２．見学地：古録天遺跡，柴又八幡神社古墳　ほか

３．主な見学場所　谷口榮氏（葛飾区郷土と天文の博物館）による案内

①国府道

②古録天神社

③古録天遺跡（発掘現場）

④柴又八幡神社古墳

⑤柴又帝釈天

⑥江戸川土手（矢切の渡しを臨む）

第三回研究会

１．日時：2013年11月20日（水）　13：00～17：40

２．場所：国立歴史民俗博物館　第二会議室

３．内容

13：00　開会

13：10～　安達文夫氏・鈴木卓治氏プレゼンテーション

13：25～　谷口榮氏報告「発掘された養老五年下総国葛飾郡大嶋郷戸籍の故地」

14：20～　休憩

14：30～　谷口榮氏報告　討論

15：20～　休憩

15：30～　田中禎昭氏報告「下総国大嶋郷戸籍の統計的検討」

16：40～　休憩

16：50～　田中禎昭氏報告　討論

17：40　　散会

第四回研究会・史料調査

１．日時：2014年１月10日（月）　　13：00～17：30

２．場所：奈良国立博物館・宮内庁正倉院事務所

３．内容

13：00～　奈良国立博物館において「万昆嶋足解」・『紫の水』の実見

15：30～　宮内庁正倉院事務所へ移動

16：00～　佐々田悠氏報告

「経巻製作の作法と正倉院文書―継打界と端継をめぐって―」

16：50～　討論

17：30　　散会

４．研究成果

本年度は，研究会だけでなく，宝庫外流出の正倉院文書の調査，合同研究会を実施した。研究会においては，正倉院文書の画像閲覧システムの改善方向性および，正倉院宝庫外流出文書の最新情報収集，および下総国戸籍の従来厳密に行われていなかった統計的分析による実態把握，などを高度情報化の一環として議論した。一方，実務としては，表裏自在閲覧システムの改良および正倉院事務所の協力により続々修のデジタル写真を収集し，写経所文書復原の道筋をつけた。正倉院文書にかかわる断簡ごとのデータベース作成を進めるとともに，間写経ごとの文書ファイル化や写経段階ごとの文書分類を行った。

第四年度までの成果を集約した報告書をまとめ『国立歴史民俗博物館研究報告』特集号として，来年度中に刊行する予定である。

主な成果

・正倉院文書にかかわる仏教・写経・建築などの論文目録作成
・続々修オリジナル写真のデジタル化試行
・昨年度デジタル化のデータ一部修正
・間写経事業に関係した写経所文書のファイル化
・公文における接続状況を示す一覧表作成
・歴博研究報告特集号への「中間報告書」投稿（研究概要・論文３・研究ノート８・調査研究報告６，　26年度刊行予定）など

５．研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

栄原永遠男　大阪市立大学大学院・名誉教授　　飯田　剛彦　宮内庁正倉院事務所・調査室長

佐々田　悠　宮内庁正倉院事務所・整理室員　　後藤　　真　花園大学文学部・専任講師

山下　有美　学識経験者　　高田　智和　国立国語研究所・准教授

富田　正弘　富山大学名誉教授　　高橋　一樹　武蔵大学人文学部・教授

今津　勝紀　岡山大学大学院社会文化科学研究科・教授
倉本　一宏　国際日本文化研究センター・教授　山口　英男　東京大学史料編纂所・教授
◎仁藤　敦史　本館研究部・教授　○小倉　慈司　本館研究部・准教授
安達　文夫　本館研究部・教授　鈴木　卓治　本館研究部・准教授
［リサーチ・アシスタント］
林　友里江　東京大学大学院博士課程

B「近現代の生活と産業変化に関する資料論的研究」2010～2014年度
（研究代表者　青木　隆浩）

１．目　的

近年，伝統産業の衰退や大量生産・大量廃棄の進行，材料・素材の変化などにより，明治時代から高度経済成長期にかけての生活資料が急速に失われつつある。それに伴い，モノを生産してきた技術や道具の使い方なども，徐々に忘れさられてきている。博物館は本来，そのような生活資料を収集し，それに関する技術や知識を記録保存する使命を担っているが，例えば渋沢敬三のアチック・ミュージアムが工業製品を民具と見なさず，収集の対象から除外したことを典型として，民俗学や歴史学の博物館が近代化・工業化以降の生活資料を積極的に収集したとは言い難い状況にある。

また，近現代の生活資料はガラスや金属，樹脂など長期的な保存に向かないものが多く，全国の博物館でその扱いに苦慮している。だからといって，それらを記録・保存していかなければ，近現代の生活活動に関する博物館展示の手法が制限されてしまう。とくに歴博では第６室の現代展示と第４室の民俗展示がオープンしたこともあり，モノの状態や民俗学，近現代史学の研究蓄積に合わせた，生活資料の収集方針，整理・保存の方法をあらためて検討する必要に迫られている。

２．研究の意義

近現代の生活資料の収集・整理，保存は，まだ全国的にノウハウが蓄積されていない。それは主に素材の面から修復，保存が困難なためであるが，近現代の研究・展示を進展させていくためには，その可能性と限界をどこかで示す必要がある。そこで本研究は，近現代資料の状態調査を通じて，それらの収集から保存に至るまでの１つの提案を示していきたい。

その際，本研究ではモノ資料を，産業史との関わりに重点をおくことに特徴をもつ。近代化・工場化，大量生産の進展といった産業の歴史は，新商品の開発や素材・材料，部品の転換など，いわばモノの歴史でもある。大量生産・大量流通された近現代のモノ資料には，時代を遡るほど産地や製造年の不明なものが多いが，産業史と関連させることで，それを使用した地域や時代的背景を合わせて調査することができる。また，商品開発や素材・材料・部品の歴史が整理されれば，地域の生活史をモノの面からより具体的に復元し，かつそれらの情報をモノ資料の収集方針や保存計画にも有効活用できると思われる。

３．研究計画

まず，種類や材質が多様な館蔵の「金沢地方近代生活資料」(H-686)や「石川県白山麓山村生活用具」(F-12)，「飛騨路の民具」（大塚集古資料館旧蔵コレクション，F-169)，「青森県の衣生活用具」（F-7）などを対象として，生活資料の分類・整理の方法を検討しつつ，素材分析を行い，資料保存のための適切な調査票と調査マニュアルを作成する。そのためには，分類・整理や素材分析の補助，様々な素材・形態の資料に対応した状態調査をおこなえる手法を確立する必要がある。

次に，分類・整理した生活資料を商品開発の歴史や素材の変化などと照らし合わせ，産業史・技術史の中に位置づけるため，商品カタログや取扱説明書，社史などを収集し，それらを用いてデータベースを作成する。そのために，資料購入費が必要である。

商品カタログや取扱説明書，社史で明らかにできなかった主要な生活資料については，該当する業界団体や個別の企業への訪問によって情報をいただく。そのために，調査旅費が必要である。

以上の研究成果は，歴博の他，元興寺文化財研究所での研究会で報告し，情報を共有化する。

〔今年度の研究計画〕

研究会３回（公開研究会１回を含む）

展示資料状態調査の調査票作成と実践

戦後の家庭生活に関連した商品・部品目録の作成

素材（とくに金属）の分析

４．今年度の研究経過

研究会

第９回研究会　平成25年６月19日（水）・20日（木）　国立歴史民俗博物館

＊６月19日は，公開研究会の打ち合わせを実施

青木隆浩「国立歴史民俗博物館所蔵資料と石川県」

松村敏「近代金沢地方生活資料　検索結果」

笹原亮二「量の可能性・再説　民博所蔵大村しげコレクションを中心に」

山田慎也「葬送儀礼資料の収集と展示について」

角南聡一郎「国内博物館コレクションにおける海外資料の来歴及び存在形態とその意義」

金山正子「複合的な素材で構成される近現代民俗資料の保存について」

＊６月20日は，金属分析の結果報告

青木隆浩「ハンドヘルド型蛍光Ｘ線分析計を用いた『金沢地方近代生活資料』の金属分析結果中間報告」

第10回研究会（公開研究会「博物館における地方資料の収集と活用」）　平成25年12月１日（日）　石川県政記念しいのき迎賓館（金沢市）

青木隆浩「公開研究会開催の趣旨」

青木隆浩「国立歴史民俗博物館における石川県関連資料―金沢地方近代生活資料と石川県白山麓山村生活用具について」

小林忠雄「1960年代以降にみる有形民俗文化財収集の意義―石川県の場合―」

松村敏「歴博所蔵，金沢地方近代生活資料―資料の来歴を調べる―」

角南聡一郎「国内博物館における海外資料の来歴及び存在形態とその意義―金沢地方近代生活資料コレクションを例として―」

笹原亮二「量の可能性・再説―民博所蔵大村しげコレクションを中心に―」

山田慎也「葬送儀礼資料の収集と展示について」

原山浩介「市民運動・ミニコミ資料の可能性」

金山正子「複合的な素材で構成される近現代民俗資料の保存について」

第11回研究会　平成26年３月29日（土）・30日（日）　小松市立博物館，尾小屋鉱山資料館（小松市），白山ろく民俗資料館（白山市）ほか

二木裕子（小松市立博物館館長）「白山麓西谷の人生儀礼用具について」

桃井宏和「文化財保存から考えるコレクション分割所有の意義」

小松市立博物館所蔵「白山麓西谷の人生儀礼用具」調査

尾小屋鉱山資料館所蔵鉱山用具調査

白山ろく民俗資料館所蔵「白峰の出作り生活の用具」,「白峰の出作り民家と生活用具」調査

展示資料の状態調査

事故への対応や資料に負担のかからない演示方法を検討する材料として，昨年度に引き続いて展示室で状態調査をおこなった。今年度は展示の初期状態を把握することを目的として，平成25年３月にリニューアルオープンしたばかりの歴博第４展示室（民俗展示室）を調査対象とした。

モノ資料の文字情報調査

来歴のわからない資料から，会社名や商品名，住所，ラベル，メモ書きといった文字情報を収集し，商店や工場，商品カタログのデータベース，電話帳などと突き合わせて，コレクションの構成を把握する。今年度は，昨年度実施した「金沢地方近代生活資料」約4,000点の文字情報のうち約1,000点について校正をおこなった。

戦後の家庭生活に関連した商品・部品目録の作成

生活資料の収集や整理・保存に役立てるため，ナショナルやキャノン，ソニー，コロンビア，サンヨー，三菱電機，東芝，日立，花王石鹸，サトウパーツなどの商品カタログを収集し，それらを素材として製作年代や商品名，部位名称などを調べることのできる商品・部品目録を作成している。

金属分析

近現代，とくに第二次世界大戦中になると，金属素材が複雑化する。それは，モノの携帯や保存性にも大きく関わるので，資料の種類や時代ごとの傾向がみられるように分析と整理を進めている。

５．今年度の研究成果

１）研究成果の概要

本研究会は，歴博所蔵「金沢地方近代生活資料」（H-686）をおもな研究対象として，近現代生活資料の来歴調査や整理･保存方法を検討することから出発しており,その成果を資料の収集先である金沢市で報告し，新たな情報を得るため，12月１日（日）に同市内で公開研究会をおこなった。また，その打ち合わせをするため，６月19日（水）に第９回研究会をおこなった。残念ながら地元住民から当該資料に関する有力な情報は得られなかったが，この公開研究会を実施したことで，研究成果の中間報告をまとめることができた。

また，平成25年度からは，これまでおもな研究対象としてきた歴博所蔵「金沢地方近代生活資料」(H-686)の資料的な特徴を明らかにするため，同じ石川県内で収集したコレクションである「石川県白山麓山村生活用具」(F-12）との比較分析を開始した。そして，このコレクションが国指定重要文化財の加賀市所蔵「白山麓の山村生活用具及び民家」や「白山麓の積雪期用具」，小松市所蔵「白山麓西谷の人生儀礼用具及び民家」と同じ収集者によって集められたことを突き止め，これら３機関の資料を比較検討する試みを始めた。さらに,「金沢地方近代生活資料」との比較においては，２人の収集者がともに子どもの頃の思い出をもとに資料を集めていたことや，都市再開発による民家の建て替えやダム開発に伴う集落の水没といった開発を契機に案外短い期間で大量の生活用品を収集する機会を得ていたことなど，いくつかの共通点を見いだすことができた。

さらに，戦後の家庭生活に関連した商品・部品目録については，家電とその部品，家具，文具，台所用具，玩具等の商品カタログを収集し，2014年２月25日現在までに約100冊分のデータを入力した。今後はデータ入力を継続するとともに編集作業を進めていく。

金属分析については，歴博でハンドヘルド型蛍光Ｘ線分析計を導入したことによって，それまでの据置型蛍光Ｘ線分析計では測定できなかった大型の資料を分析できるようになった。「金沢地方近代生活資料」を対象として，昨年度から始めたこの分析計による調査点数は，2014年２月25日現在までで375点となり，近現代の生活資料にみられる素材の傾向を把握できるデータ数になってきた。今後も分析を継続し，最終的な集計結果をまとめていく。

２）著作物名

青木隆浩「『石川県白山麓山村生活用具』について」歴博182，2014年，20-23頁。

青木研究室編『公開研究会　博物館における地方資料の収集と活用』，2013年，46頁。

３）研究会・シンポジウム等

公開研究会「博物館における地方資料の収集と活用」，平成25年12月１日（日），石川県政記念しいのき迎賓館（金沢市）

６．研究組織（◎は研究代表者）

松村　　敏　神奈川大学経済学部
本康　宏史　石川県立歴史博物館
角南聡一郎　元興寺文化財研究所
日高　真吾　国立民族学博物館
齋藤　　努　本館研究部・教授
小池　淳一　本館研究部・教授
原山　浩介　本館研究部・准教授
小林　忠雄　北陸大学未来創造学部
金山　正子　元興寺文化財研究所
笹原　亮二　国立民族学博物館
◎青木　隆浩　本館研究部・准教授
永嶋　正春　本館研究部・客員教授
山田　慎也　本館研究部・准教授

C「歴史研究資料としての映画の保存と活用に関する基盤的研究」
2010～2014年
（研究代表者　内田　順子）

１．目　的

映画のオリジナルフィルムには，撮影，編集，現像など，その作品の制作に関わる情報が豊かに備わっている。そのため，映画を歴史研究の資料として活かしていくためには，写っている内容についてだけではなく，フィルムという形ある物それ自体についての資料批判的な研究を同時に行うことが必要不可欠である。本研究では，歴博がコピーを所蔵している昭和初期の記録映画（ニール・ゴードン・マンローによるアイヌの記録映画および宮本馨太郎による民俗学的な記録映画。以下「マンローフィルム」「宮本フィルム」とする）を対象に，オリジナルフィルムを所蔵する機関と連携してオリジナルフィルムの資料批判的研究と内容調査を実施し，得られたプロファイル情報を映像と連動させることを通して，映画を歴史・民俗などの文化研究の資料として保存・活用するために必要な手続きを構築する。

２．今年度の研究目的

①マンローフィルム９本について，動画とショットリストを連動させるインタラクティブショットリストを作成する。
②マンロー関係資料についての成果公開に関する打ち合わせをイギリスの関連機関と行う。
③宮本フィルムについては，宮本の映画製作の背景および状況についての現地調査を数作品について実施するほか，渋沢フィルムとの比較をおこなう。

３．今年度の研究経過

①マンローフィルム９本について，動画とショットリストを連動させるインタラクティブショットリストを作成した。平成24年に実施した15本と合わせ，歴博・北大所蔵の24本について試作版が完成した。
②マンロー関係資料についての成果公開の打ち合わせをイギリスの関連機関と行い，写真を先行してデータベース構築を実施することが合意された。
③宮本フィルムについては，群馬県，富山県，八丈島で撮影された作品について現地調査を実施したほか，オロッコ・ギリヤーク，霞ヶ浦の地域文化を撮影した作品や，渋沢の映像作品と比較するために，撮影対象の専門家を招いて研究会を開催した。

４．今年度の研究成果

【研究成果の概要】

本研究が対象とするマンローフィルム全24本（歴博・北大所蔵）について，動画とショットリストを連動させるインタラクティブショットリストの試作版が完成した。今後，短すぎるショットをひとまとめにするなど，試作版の問題点を明らかにして改善をはかっていく必要がある。宮本フィルムについては，数作品について現地調査または撮影対象についての専門家を招いた研究会を実施することによって，宮本馨太郎の映画作品の特徴が新たに明らかになった。その成果の一部を「歴博映像祭」（11月17日，20日～24日）にて一般

に公開した。

【研究打ち合わせ】

７月６日　10：00～15：00　オロッコ・ギリヤーク，霞ヶ浦，中馬に関する映像について（宮本記念財団にて）

11月２日　13：30～17：00　宮本フィルムの制作情報の整理について（宮本記念財団にて）

11月17日　10：00～18：00　北方民族関連の映画について（歴博にて）

11月23日　13：00～24日17：00　宮本フィルム研究のまとめかたについて（歴博にて）

【その他】

11月17日，20日～24日　歴博映像祭「映像民俗学の先駆者たち：渋沢敬三と宮本馨太郎」（歴博にて）

５．共同研究員（◎は研究代表者，○は研究副代表）

板倉　史明　神戸大学	加藤　　克　北海道大学・植物園・博物館
原田　健一　新潟大学	丸山　泰明　元本館研究部・機関研究員
宮本　瑞夫　宮本記念財団	
小瀬戸恵美　本館研究部・准教授	鈴木　卓治　本館研究部・准教授
◎内田　順子　本館研究部・准教授	

（２）活動提案

◇カテゴリーⅠ

「『職人絵』を中心とする日本中世近世都市風俗画の研究」2013～2015年度

（研究代表者　大高洋司（国文学研究資料館），国立歴史民俗博物館担当者　小島道裕）

１．目的

「職人絵」は，日本中世～近世の都市風俗画にとって，景観図（名所絵）と共に，都市の繁栄を際立たせる重要な題材で，時の権力者の栄光を象徴するものとしても描かれ，現在，歴史学・美術史・文学史・民俗学・文化人類学など，様々な分野にとって有用な研究素材となっている。しかし従来，「職人絵」の研究がそれぞれの分野を超えて交流し合うことは少なく，「職人絵」を含む「職人」研究自体も，歴史・文学研究者が共同で取り組んだ『七十一番職人歌合』の校注作業（新日本古典文学体系61，平成５年）以降，異分野を裨益するような成果を挙げているとは言えない。

本研究のコアメンバーは，2010～12年度の３年間，本機構の連携研究及び総研大の学融合推進センター公募研究として歴史・文学を横断する共同研究・連携展示に従事し，16～19世紀における「名所絵」と「職人絵」がどのようにつながりあって「都市風俗画」の核を形成しているのかについて，概観的な理解を共有するに至った。またその間に，このテーマに興味をもつ若手研究者の参加を得られるようになった。

上記の上に立って，本研究では研究の対象を個々の「職人絵」に絞り，主として歴博・国文研所蔵史資料から「職人」画像を集積（現在2,500コマを超えており，当面5,000コマを目標とする）・分類し，共同研究会

を通じて，400年間に絵画化された個々の職業・職人について，職種とその変遷，職人の描き方の継承・変化等を識別し，研究成果をデータベースとして公開したい。

２．今年度の研究計画

「職人」画像収集のためのテキストを選定して画像の切り抜き・作業を行い，また「職人」・「都市風俗画」をテーマとする共同研究会を開催して，メンバーの専門に即した報告を行う。同研究会において，併せて『近世職人尽絵詞』（東京国立博物館所蔵）の注釈作業を継続的に行う。

これらを通じて，各メンバーから得た複合的な知見を「職人」画像の作成，解説項目の充実，『近世職人尽絵詞』の注釈に反映させる。

３．今年度の研究経過

画像集積作業は国文研・歴博それぞれで行い，共同研究会で随時報告と意見交換を行った。共同研究会は，本年度中，下記の７回を開催した。

第１回：2013年５月22日（水）13：30～　国文学研究資料館展示室・第３講義室

１．「職人画像データベース（仮称）」構築の相談

２．常設展示「和書のさまざま」見学（解説：海野圭介准教授）

第２回：2013年７月６日（土）13：30～　三省堂本社601会議室

１．研究報告：真島望「近世地方地誌の生成と伝播―鈴木秋峰『豆州熱海地志』を例として―」

２．「近世職人尽絵詞」注釈

第３回：2013年７月24日（水）13：30～　国立歴史民俗博物館第２研修室

１．企画展示「時代を作った技―中世の生産革命―」見学

２．研究報告：渡辺浩一「江戸名所と災害（三俣中洲富永町と江戸深川洲崎について）」

３．「近世職人尽絵詞」注釈

第４回：2013年９月４日（水）13：30～　国文学研究資料館第３講義室

１．研究報告：新江京子「若冲の描いた京都・上方」

２．「近世職人尽絵詞」注釈

第５回：2013年10月９日（水）13：30～　国立歴史民俗博物館第２会議室

１．企画展示「中世の古文書―機能と形―」見学（解説：小島道裕）

２．研究報告：新江京子「伊藤若冲の歌仙絵について」

３．「近世職人尽絵詞」注釈

第６回：2013年12月４日（水）13：30～　国文学研究資料館展示室・第３講義室

１．「和書のさまざま」展見学（解説：落合博志教授）

２．「近世職人尽絵詞」注釈

第７回：2014年２月15日（土）13：30～　三省堂本社601会議室

１．研究報告：恋田知子「虚無僧の絵巻―大阪市立美術館蔵『はいかひ』絵巻をめぐって―」

２．「近世職人尽絵詞」注釈

４．今年度の研究成果

「職人」画像については，本年度当初の共同研究会において行ったフォーマットの検討に即して集積作業を重ね，国文研では3705点が集積し，解説項目の入力も進行した。歴博では，「洛中洛外図屏風歴博乙本」について描かれた人物のデータ化を行い，現状で1170人分のデータを作成した。また，歴博所蔵資料の内，特に職人に関わる下記の５件について，デジタル画像の作成を行った。

「江戸職人歌合」「東北院職人歌合」「和漢三才図会（人倫）」「職人歌合絵巻」「職人風俗絵巻」

共同研究会において進めている『近世職人尽絵詞』(上中下巻) の注釈作業は，下巻を終え，上巻に入った。

５．研究組織（◎は研究代表者　○は国立歴史民俗博物館担当者）

工藤　航平　東京都公文書館・専門員　　水野　僚子　日本女子大学人間社会学部・准教授
藤川　玲満　ノートルダム清心女子大学文学部・准教授
稲葉　有祐　立教大学文学部・非常勤講師　　木村　裕樹　龍谷大学社会学部・非常勤講師
真島　　望　成城大学民俗学研究所・研究員
雨野　弥生　（株）三省堂辞書出版部
新江　京子　國學院大學・文学部・非常勤講師
◎大髙　洋司　国文学研究資料館・教授　　渡辺　浩一　国文学研究資料館・教授
恋田　知子　国文学研究資料館・助教　　大久保純一　国立歴史民俗博物館・教授
久留島　浩　国立歴史民俗博物館・教授　　○小島　道裕　国立歴史民俗博物館・教授

◇カテゴリーⅢ

「大規模災害と広域博物館連携に関する総合的研究」2012～2014年度
（研究代表者　小池　淳一）

１．目　的

本研究は，東日本大震災における東北地方の博物館を通して，大規模かつ広域の災害に際して地域の博物館をはじめとする人間文化に関する施設がどのような機能と連携関係を有するべきかを総合的かつ多角的に調査，研究しようとするものである。本研究は人間文化研究機構および国立歴史民俗博物館が，東日本大震災発生以後，繰り広げてきた文化財レスキュー活動を基盤とし，それを研究面において高度化し，さらに展示体制を模索することを目的としている。

２．研究計画

国立歴史民俗博物館が，東日本大震災の発生直後に開始した被災地における文化財レスキュー活動を継続的に実施する。瓦礫の中から救出された歴史資料，生活用具・民具は，損傷が激しく劣化も進んでおり，その保全,整理には専門的な知識の蓄積と方法論の深化とが求められる。本連携研究の研究員を現地に派遣し，被災した資料の保全・整理活動をおこないながら，その記録化と課題の検証をすすめ，今後，予測される大規模災害発生時における効果的な文化財レスキュー活動の展開に資するような調査，研究活動を実施する。

また，東北地方と新潟県の県立博物館に所属する学芸員と機構内の専門家による情報の共有，および広域の博物館連携をめぐる議論の進展を目的とした研究会を定期的に開催する。各県毎に実施された文化財レスキュー活動が有効に機能するためには，平時における学芸員，研究者間のネットワークの存在が不可欠な要素であったことが徐々に明らかとなっている。それぞれに異なる立場，状況で活躍した各地の専門家の経験に即して情報の共有をおこない，反省点も踏まえて，博物館相互の連携を念頭に置いた体制作りに関する議論をおこなっていく。

これと関連して，過去に大規模災害の被害を被った地域の調査，研究も実施する。特に地域住民，行政の取り組みについて，災害の記録，記憶という観点から博物館，資料館の展示などを対象に調査し，文化財の保護，減災をめぐる情報発信の場としての博物館のありかたを模索していく。特に本年度は以下の点に留意した。

・被災地で救出された文化財の保全状況と，その活用をめぐる調査，研究を継続して実施する。（平成25年４月～平成26年３月）
・被災地における文化財レスキュー活動の成果と課題に関する研究会を継続して開催する。国立歴史民俗博物館，新潟県立博物館，山形県立博物館などで研究会をおこなう。（平成25年４月～平成26年３月）
・文化財レスキュー活動に関連するシンポジウム，研究会等への参加による情報収集と発信をおこなう。（平成25年４月～平成26年３月）
・過去に大規模災害の被害を被った地域の調査，研究を実施する。（平成25年４月～平成26年３月）

３．今年度の研究経過

○文化財レスキュー活動

2013年４月～2014年３月まで継続して実施した。（宮城県気仙沼市など）

○研究会の開催

第１回研究会（2013年５月26日，27日　於：国立歴史民俗博物館）
第２回研究会（2013年９月１日，２日　於：新潟県立歴史博物館）
第３回研究会（2013年11月24日，25日　於：山形県立博物館）
第４回研究会（2014年２月10日，11日　於：大濱信泉記念館）

○調査・シンポジウム等への参加

・シンポジウム「文化遺産とまち，ひと，復興」東京大会への参加（2013年12月20日　於：文部科学省）
・シンポジウム「災害に学ぶ―歴史文化情報資源の保全と再生―」への参加（2014年１月25日　於：津田ホール）
・八重山諸島に被害をもたらした明和大津波に関する現地の研究状況と史跡等の調査（２月10日～２月11日　於：大濱信泉記念館ほか）

○研究の進捗状況

・文化財レスキュー活動を継続して実施したことにより，被災資料の収集，保全に関する作業状況が改善され，その整理も進んでいる。現在は安定化処理が終了した資料の詳細なデータと目録のデータベース化に向けた作業が進行中である。
・各地の文化財レスキュー活動に携わった専門家と定期的に研究会をおこなったことにより，それぞれの成

果と課題に関する知識の共有化が進展している。また資料の保管・返却・活用といった，今後，予測される諸々の課題についても議論がおこなわれている。

・新潟県長岡市，沖縄県石垣島市など過去に大規模な災害の被害を受けた地域で研究会，調査をおこなったことにより，災害の記録と記憶が，地域社会の中でどのように資源化され活用されているのかという点が明らかになりつつある。さらに東北芸術工科大学，長岡市立図書館，山形資料ネットといった大学・行政機関・市民団体に所属する関係者をゲストスピーカーとして招き，研究，調査活動をおこなったことで災害時におけるそれぞれの機関の役割，連携に関する議論が活性化している。

４．今年度の研究成果

１）研究成果の概要

宮城県気仙沼市小々汐地区と同市本吉地域大谷地区で救出された被災資料の写真データとリストの整理作業が進んでおり,文化財レスキュー活動の現状や課題について日本民俗学会等でグループ発表をおこなった。また研究員による調査・研究成果の報告書が出版された。

・第65回日本民俗学会年会（2013年10月12日，13日　於：新潟大学）

発表：葉山茂「生活の記憶とモノ・場所・身体―宮城県気仙沼市小々汐における被災生活用具・文書の救援活動から―」

小池淳一「オオイ（大本家）とは何か―津波による被災後の民俗像の再構築を通して―」

加藤秀雄「三浦家が経験した1938年－1945年―被災資料にみる戦争と家族―」

２）論文名

内山大介「奉納絵馬の救出と地域の活動―須賀川市朝日稲荷神社の事例」（『ふくしま再生と歴史・文化遺産』所収）

川村清志「七ヶ浜町吉田浜・花淵浜地区」（『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2012年度報告集』所収）

３）研究会・シンポジウム等

・第１回研究会（2013年５月26日，27日　於：国立歴史民俗博物館）

発表：小池淳一「博物館連携をどのように構築するか：２年目の課題」

川村清志「生活文化の再構成と博物館型研究統合」

・第２回研究会（2013年９月１日，２日　於：新潟県立歴史博物館）

発表：田邊幹「新潟県における文化財レスキュー活動」

見学：長岡市立図書館における中越地震避難所資料の保存，活用状況の見学

「中越メモリアル回廊」による震災の記録・記憶の保存，活用の取り組みの見学

・第３回研究会（2013年11月24日，25日　於：山形県立博物館，東北芸術工科大学）

発表：山口博之「山形県立博物館の概要」

川上新一（山形県立博物館・ゲストスピーカー）「植物標本のレスキュー活動について」

小林貴宏（山形文化遺産防災ネットワーク・ゲストスピーカー）「山形文化遺産防災ネットワークの3.11以後の文化財・歴史資料保全の取り組み」

米村祥央（東北芸術工科大学・ゲストスピーカー）「文化財保存修復センターと被災文化遺産のレス

キュー」

見学：東北芸術工科大学文化財修復センターの見学

・第４回研究会（2013年２月10日，11日　於：大濱信泉記念館）

発表：川島秀一「三陸沿岸と先島諸島の津波伝承」

松田香代子（静岡県民俗学会・ゲストスピーカー）「地震・津波の伝承―静岡県の事例から―」

島袋綾野（石垣市教育委員会・ゲストスピーカー）「津波の記録を検証する―記録と伝承と俗説―」

見学：石垣島における津波遺跡群の見学

５．研究組織（◎は研究代表者）

赤沼　英男　岩手県立博物館学芸第二課・課長

内山　大介　福島県立博物館学芸課・副主任学芸員

梅津　一史　秋田県立博物館・学芸主事

川島　秀一　東北大学災害科学国際研究所・教授

古川　　実　青森県立郷土館学芸課・副課長

笹原　亮二　国立民族学博物館研究部・教授

佐藤　憲幸　東北歴史博物館・主任研究員

田邉　　幹　新潟県立歴史博物館学芸課・主任研究員

西村慎太郎　国文学研究資料館研究部・准教授

日髙　真吾　国立民族学博物館研究部・准教授

山口　博之　山形県立博物館学芸課・学芸専門員

加藤　秀雄　本館研究部・機関研究員　　川村　清志　本館研究部・准教授

◎小池　淳一　本館研究部・教授　　齋藤　　努　本館研究部・教授

柴崎　茂光　本館研究部・准教授　　葉山　　茂　本館研究部・特任助教

（３）日本関連在外資料調査研究　2010～2015年度

１．【研究目的】

欧米における日本文化研究の比重が低下するなか，欧米・アジア諸国に現存する日本関連人間文化研究資料に関しては，専門研究者の不在・不足や個人所蔵であるなどの理由から，資料所在情報が把握できていないところも多く，また詳細調査が実施されていないためその全体像や資料的価値が確定していないものも多数存在する。これらについて，文化人類学，民俗学，歴史学，国文学，美術史学など人間文化研究の諸分野の専門的研究者の派遣・招請を行うことによって，国際共同研究に基づく調査・研究を実施し，放置・劣化・散逸から資料群をまもって資料の保存・活用に道を開くとともに，資料の詳細な情報をはじめとする調査成果・研究成果に関わる情報を広く提供することで，国内外の日本文化研究の発展・深化に貢献することを目的とする。

２．【研究対象】

日本関連在外資料は，世界各所に点在しているが，資料が作成された時代背景や海外に持ち出された事情等も様々であるため，本事業では，比較的所在のはっきりしている次の資料群を調査研究対象とする。

１）シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された在外資料（Ａ）

２）近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料（Ｂ）

３．【研究方法】

人間文化研究機構（以下「機構」という）に帰属する大学共同利用機関及び大学附置研究所などで個別に行われてきた在外資料に関する情報蒐集・調査・研究について，機構として計画的・組織的に研究体制を構築し，21世紀にふさわしい新たな国際共同研究を実施する。

さらに国際的な研究連携を密にした長期展望のもとで,さまざまな学術分野の国内外日本研究者による「在外資料」の総合的な共同研究を展開し，広義の日本文化研究と高度な教育に資する文化資源学的研究領域の創生を試み，海外における日本資料を体系的に文化資源化することでその情報を公開・発信し，国内外の研究者等が有効活用できるようにする。

また，海外の貴重な在外資料等の整理・保管等が充分になされていない問題を解消するため，派遣・招聘を含めた国際研究ネットワークの構築を図り在外資料の保存についても検討する。

４．【研究成果の公開】

日本関連在外資料調査研究の研究活動の結果として，以下のような全体的成果のとりまとめを行い展示も含んでさまざまな形で研究成果を公開する。

１．目録及びデータベースを作成しホームページ等での公開

２．国際シンポジウムによる調査研究成果の公開

３．書籍，論文集等の刊行による公開

４．巡回展示（海外での展示を含む）による公開

５．【研究組織・研究計画】

日本関連在外資料調査研究は，機構が設置する日本関連在外資料調査研究委員会が，企画・調整等を行い事業の総合的推進を図る。

調査研究は，Ａ・Ｂ２つの研究対象について総括機関（国立歴史民俗博物館及び国際日本文化研究センター）を中心として，実施機関及び連携実施機関が協力して次の調査研究を実施する。

なお，２つの研究対象について各々専門部会（各研究課題の代表者で組織する）Ａ及びＢを設け個別具体的な調査研究の実施計画等を審議する。また，２つの専門部会の調整組織として，各研究課題の総括責任者を中心として総括部会を設置し，日本関連在外資料調査研究の全体調整を図る。

本館では，Ａの研究総括および５つのチームを，Ｂではチームの一つを担当する。

A「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」2010～2015年度
（研究代表者　久留島　浩）

１．研究概要

本調査研究は，19世紀に収集されたことが確実な日本関連資料のうち，まとまりがあり同時代の日本文化や歴史を表象することのできるコレクションを，可能な限り総合的に調査研究する。その際，少なくとも資料に関する詳細なデータを，できる限り多く共有することで，同時期の「規準」となる「もの資料」を明確にする。19世紀のコレクションのうち，下記に示すようにいくつかのモデルケースを設定し，国内外の研究者コミュニティが，詳細な「記録」というかたちであれ，「実物」のままであれ，未来にわたって「共有」するために，長期にわたって継続でき，かつ成果を広く共有しうる調査方法と実現できる調査計画と公開方法を立案，実行する。同時に，すでに目録が整備されているもののうち，相互利用に関する合意ができる場合は，協定など利用規程を定めたうえで「共用」化を進める。さらに，資料群の現状（状態）を把握することで，今後の長期的保存・修復計画を策定することも目指したい。

具体的な調査研究は，以下のとおり。

（ａ）シーボルト（父子）関係資料の復元的調査研究（詳細調査）

１）ブロンホフ・フィッセル・シーボルト（父の一回目の来日時のもの）コレクションの総合的調査研究
＝19世紀前半の日本関連在外資料の「規準」資料たりうる

２）シーボルト（父）の二回目の来日時の収集資料および，子どもたち（アレクサンダー・ハインリッヒ）に関わるコレクションの総合的調査研究（詳細調査）
＝19世紀後半の日本関連在外資料の「規準」資料たりうる

（ｂ）海外に所在する（シーボルト父子関係史料以外の）日本関連資料の「共有資源」化に関する調査研究
（概要調査が中心だが，一部拠点を決めて詳細調査を行う）

１）ライデンを中心とする，具体的な資料（書籍・地図・絵画など）にそくした詳細調査・目録化とそれをふまえた研究

２）北米・ヨーロッパにおける日本関連資料の概要調査とその目録化（いくつかの拠点を設定して詳細調査を実施し，その目録も作成する）

調査研究は以下の７つのジャンルで，８チームに分かれて実施する。各チームの成果のとりまとめおよび毎年の具体的な調査計画の策定については，以下のとおり総括チームを設ける。この総括チームから，代表と副代表が機構の「日本関連在外資料調査研究委員会」のもとに置かれる「専門会議」に出席する。

【総括チーム】　久留島　浩と各チームの代表９名および事務局

以上の研究を実施するために，次のような研究チームをたてることにした。

（ａ）①【ブロンホフ・フィッセルチーム】　代表：松井洋子（東京大学史料編纂所教授）
シーボルト父子コレクションの復元のための前提作業として，ブロンホフ・フィッセルのコレクションについての詳細目録（日本語版，できれば英語版も）を作成する（ライデン国立民族学博物館

などと機構との間で協定を結ぶ必要がある)。【平成22～24年度】

②【ミュンヘンチーム】　代表：日高　薫（国立歴史民俗博物館教授）

ミュンヘン国立民族学博物館と共同で画像つき詳細目録を作成することを課題とする。この目録を作成するとともに，シーボルトの最後の「日本展示」を復元することで，あらためてシーボルト・コレクションの性格およびそれが表現しようとした「日本」とはどのようなものだったのかについて，できれば「復元展示」（シーボルトが構想した日本展示）を実施したうえで，議論する機会を持ちたい（同館と機構との間で協定を結ぶ必要がある)。【調査目録作成は平成22～26年度，展示は終了後を予定】

③【アレクサンダー・ハインリッヒチーム】　代表：宮坂正英（長崎純心大学教授）

ドイツ・シュルヒテルンのブランデンシュタイン家に収蔵されているシーボルトファミリーアーカイヴズについて，とくにアレクサンダーおよびハインリッヒ関係資料のうち未撮影のものについてデジタル撮影し，詳細目録を作成する。そのうえで，シーボルト（父）関係の未撮影資料があれば撮影する（協定が必要である)。なお，ボーフム大学にもシーボルト関係資料が収蔵されており，ブランデンシュタイン家文書と関連づけることができれば，両者の資料的価値も高まり，研究資源の共有化が進むことになる。この点では，この資料をデジタル撮影した宮崎克則氏および同大学との協力も不可欠である。(所蔵者・所蔵機関との十分な協議が不可欠である)【ブランデンシュタイン家の調査は平成22～25年度，ボーフム大学は平成24，25年度】

（b）④【ロシア・北欧チーム】　代表：近藤雅樹→佐々木史郎（国立民族学博物館名誉教授）

⑤【ライデンA（書籍）チーム 】　代表：鈴木　淳（国文学研究資料館教授）

【ライデンB（地図・絵画など）チーム】　代表：青山宏夫（国立歴史民俗博物館教授）

ライデン大学・ライデン国立民族学博物館などオランダにおける日本コレクションのうちのまとまった資料群について，画像つきの詳細な目録を作成する（日本関連書籍，地図，死絵などが具体的な候補としてあがっている（上記①のような協定を結ぶ必要がある)【平成22～25年度】。

⑥【イェールチーム】　代表：近藤成一（東京大学史料編纂所教授）

⑦【海外所在調査（概要調査）チーム】　代表：大久保純一（国立歴史民俗博物館教授）

現地の研究者・学芸員の助力を得ることができ，所蔵機関の了解が得られること（協定を結ぶこと）が前提ではあるが，北米・イギリス・フランス・スイス・ドイツにおける日本コレクションの基礎的所在情報を収集したうえで，何か所かの概要調査を実施し，概要目録を作成する。これについては，２年目に獲得目標を厳選する。

※北米では，モース・コレクションの現状調査を平成22～24年度に行い，今後の計画をたてるほか，アメリカではオークランド博物館【～平成27年度】，カナダでは文明博・ロイヤルオンタリオ博【～平成24年度】，イギリスではウェールズ国立博物館【～平成25年度】で博物館調査をおこなう。

⑧【異文化交流・情報共有化推進チーム】　代表：安達文夫（国立歴史民俗博物館教授）

調査地をとくに限定しないが，異文化間の交流という観点から在外日本関連資料の持つ意味を検討すること，および今回の研究の目玉でもある「情報共有方法」について検討することも不可欠なので，別途，チームを設ける。予算は，情報共有化のためのものを計上するが，メンバーが調査地を選択してそれぞれのチームの調査に参加するときの旅費は，それぞれのチームが負担することを原

則とする。

※ロシア・北欧チーム，ライデンA（書籍）チーム，イェールチームについての記述は省略する

２．６年間の研究目的

（ａ）シーボルト（父子）関係資料の復元的調査研究

１）ブロンホフ・フィッセル・シーボルト（父の一回目の来日時のもの）コレクションの総合的調査研究

①現在の所在が分散しているブロンホフ・フィッセル・シーボルト（父の一回目の来日時のもの）コレクションに関する「総合的な目録」を作成すること。

②シーボルト･コレクションの自然史関係資料群と人文文化関係史料群との相互活用を進めること(調査・研究・公開のうえで，自然史系研究者と人文系研究者とが相互交流，共同すること)。

２）シーボルト（父）の二回目の来日時の収集資料および，子どもたち（アレクサンダー・ハインリッヒ）に関わるコレクションの総合的調査研究

①シーボルト（父）が二度目の来日（1859～1862）で収集したと考えられるコレクションの総合目録を作成すること

②シーボルトの二人の息子（アレクサンダーとハインリッヒ）自身が収集した日本関連資料，彼らが残した書簡・記録類，および彼らが収集に関わった日本関連コレクションについての所在とその概要を把握すること

（ｂ）海外に所在する（シーボルト父子関係史料以外の）日本関連資料の「共有資源」化に関する調査研究

この６年間は，おそらく「概要調査」にとどまるものと思われるが，第一に，いくつかの資料所蔵機関（博物館・大学）で，まとまった「もの資料」を中心に，いくつかのデジタル画像つき詳細目録を作成することで，「もの」資料にそくした具体的な研究を進めるとともに，今後の調査研究上の課題を明確にしたい。具体的には，ライデンに伝来するブロンホフ・フィッセル・シーボルト収集の書籍や地図などを中心にしながら，少なくとも，海外の収蔵機関でどのような調査を行い，どのように記録し，目録化するかについてのモデルをつくることにしたい。同時に，資料収蔵機関・収蔵者および海外の日本研究者にとっても「共用」できるようにしたい。

３．今年度の研究目的（課題）（本館チーム以外の研究テーマは省略した）

【総括チームおよび事務局（本館に設置)】

・国際シンポジウムの開催

・国際協定の締結

・海外調査実現のための調整，新規海外調査事業実現のための準備

【国立歴史民俗博物館が統括する各チーム】

・ミュンヘン国立民族学博物館，ベルリン図書館等，シーボルト関連資料の海外調査実施

・シーボルトコレクションおよびそれに関連する各種史料の翻刻・翻訳・刊行化

・近代に収集されたその他の日本関連在外資料（シーボルト以外のコレクション）の調査

・日本関連在外資料の研究成果公開のためのDBおよびホームページの作成

4．今年度の研究経過（ロシア・北欧チーム，ライデンA（書籍）チーム，イェールチームの活動は省略）

【総括チームおよび事務局】

・海外資料調査関係

①新規の大規模海外資料調査のための施行準備

海外調査実施状況は各チームの報告に譲るが，24年度から始まったバチカンにあるバチカン図書館所蔵のマリオ・マレガ神父収集「豊後キリシタン関係史料」調査は，今年度は本プロジェクト内に新しいチームを発足して実施したが，総括班からも2013年９月（久留島），14年２月（勝田）の２回にわたって調査に協力した。ただし，2013年度実績報告・2014年度実施計画についてはマレガ神父収集キリシタン関係文書のチームに譲る。

②国際的連携・協力の推進状況

「成果の共有および公開」を可能とするために，総括班では海外の日本コレクション所蔵機関・所蔵者と機構の間の調査・研究協力協定（覚書）の締結を進めている。すでにドイツ・ミュンヘン国立民族学博物館・ロシア・ピョートル大帝人類学民族学博物館（クンストカーメラ，国立民族学博物館との間で調印），ドイツ・ブランデンシュタイン家，ボーフム大学，イギリス・ウエールズ国立博物館との間で協定を結んだが，2013年度は12月にバチカン図書館と機構と間で協定を締結したほか，国立歴史民俗博物館は，ベルリンのドイツ歴史博物館との間で研究協力協定を結んだ（調印2013年12月９日）。さらに，アメリカ・ピーボディ＝エセックス博物館，オランダ・ライデン国立民族学博物館と機構と間で協定を結ぶ準備は進行中で，2014年度中に締結予定である。

・国内外の研究者の育成状況

①国内外の次代を担う研究者の育成

ボーフム大学で大学院生を対象に講座を２回実施した。

１回目　2013年11月26日～30日

第３回古文書解読講座「近世の寺子屋関係資料を読む」宮崎克則担当（参加者20名）

２回目　2014年２月15日・16日

第４回古文書解読講座「長崎の文書を読む」松井洋子が担当（参加者14名）

・国際シンポジウム

①「シーボルトが紹介したかった日本―欧米における日本関連コレクションを使った日本研究・日本展示を進めるために―」を2014年２月11日（火）・12日（水）の２日間にわたって，ドイツ，ボーフム・ルール大学（以下略称ボーフム大学）で人間文化機構主催・ボーフム大学共催により開催した（日独両言語の同時通訳付）。日本の大雪のために金田章弘機構長以下機構の出席予定者が参加できなかったが，日本から20名，日本以外から41名の参加者を得，この４年間の調査・研究の成果を広く共有することができた。とくに，シーボルト父子関係資料の文献の調査およびデータベース化が進んだこと，ミュンヘン国立民族学博物館のシーボルト・コレクション調査が進んだことによって，現在同館に残る資料群についての詳細な情報を得ることができ，2016年度に国際巡回展示を予定している「シーボルトの見せたかった日本―シーボルト最後の日本展示―」（仮称）の実現に向けて大きな前提条件ができた。シーボルト以外の日本関連資料調査も進んでおり，この事業が国際的に認知されていることが証明された。

〈シンポジウムの主旨〉

人間文化研究機構「日本関連在外資料の調査研究」プロジェクトは，2010年以来，シーボルト関連資料を中心とする海外所在の日本関係資料の調査研究を進めているが，過去に行われてきた在外資料調査には様々な問題も指摘されており，検討に値する。我々は，こうした海外の所蔵機関の現状をふまえ，目録作成のために日本側専門家による調査・研究支援活動が必要であると考える。そのため，本プロジェクトでは19世紀に焦点を当て，購入した時期や経緯がほぼ明確であることによって「規準」資料となりうるシーボルトとモースに関するコレクションに関する調査・撮影をし，そのコレクションの全体像を把握するための画像付き目録の作成に取り組んできた。

なかでも，ミュンヘン国立民族学博物館に収蔵されているシーボルト（父）の２度目の来日時の収集品を中心にしたコレクションの調査を重点的に行っている。当コレクションは，地図・漆器・陶磁器・絵画資料・書籍などのほか，日用品についてもその製品とその素材（原料）および製作のための道具のミニチュアなどまで含めると，多岐にわたる大規模な資料群で，収蔵した時期（19世紀半ば迄）がほぼ確定できるために，日本関連コレクションの製作･使用年代などを推定するための「規準」資料としての価値を持つものである。さらにシーボルトに関する文献資料についても，シーボルト父子の書簡・記録・草稿などの調査研究を，ボーフム・ルール大学・ブランデンシュタイン家・ベルリン中央図書館の所蔵資料を中心に進めている。

またさらに，ほぼ同時期に同じく日本関連のコレクションを形成した，ブロムホフとフィッセル，ならびに，シーボルトよりも少し後のエドワード・モースのコレクション等，その他の近接する時代のコレクションも対象とし，近代に海外で収集された様々な日本関連資料の比較検討を通じた，視野の広い日本文化研究を進めている。

そこで今回は，2015年の最終年度の成果発表に向け，本調査・研究の一層の発展を図るため，一度中間的な総括を行い，今後の長期的な調査計画を構築すべく，日本研究の専門的研究機関を持つボーフム大学との共催で国際シンポジウムを開催し，その成果を公開した。

〈日程および内容〉

２月11日（火）

総合司会：大久保純一（本館教授）・スヴェン・オスターカンプ（ボーフム大学教授）

開会のあいさつ　エルマール・ヴァイラー（ボーフム・ルール大学学長）

今西祐一郎（国文学研究資料館館長）

趣旨説明　レジーネ・マティアス（ボーフム大学教授 ）

第１部　シーボルトの描く「日本」像　―歴史と文化―

１．「シーボルトと19世紀の日本神話研究」山田仁史（東北大学准教授）

２．「シーボルト第一次滞在時蒐集書籍」鈴木淳（国文学研究資料館名誉教授）

３．「シーボルトの朝鮮研究―朝鮮語関係の資料と著作―」スヴェン・オスターカンプ

討論

第２部　欧米（ドイツ語圏を除く）における日本関連コレクションの現状と課題

１．「イェール大学の日本関連コレクション」近藤成一（東京大学史料編纂所教授）

２．「北欧における日本関連アジア資料の調査研究」加藤幸治（東北学院大学准教授）

３．「モース・コレクション：もう一つの在外19世紀日本コレクション」小林淳一（江戸東京博物館副館長）

４.「イギリスにおける日本関係コレクションの現状と課題」三木美裕（本館客員教授）
５.「スイスの日本関係美術コレクション」ハンス・トムセン（チューリッヒ大学教授）
６.「国際共同に基づく日本研究推進事業：「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査，その実施と結果」　トモエ・シュタイネック（チューリッヒ大学客員研究員）
討論

２月12日（水）
第３部　シーボルトの「日本博物館」構想について　―日本を「展示」する―
（ミュンヘン国立民族学博物館所蔵シーボルト・コレクションを中心に)」
１.「シーボルト・コレクションにおける川原慶賀の動植物画と風俗画」野藤妙（九州大学大学院）
２.「シーボルトの地図編纂とブランデンシュタイン家所蔵資料」青山宏夫（本館教授）
３.「トラウツ・コレクションからみたシーボルトとその日本研究」湯川史郎（ボン大学人文科学系講師）
４.「シーボルトの勘定帳：出島における経済活動を探る」松井洋子（東京大学史料編纂所教授）
５.「ミュンヘンのシーボルト・コレクションについての考察　シーボルト・コレクションとフィレヌーフェコレクションの混在か？」マティ・フォラー（国立ライデン民族学博物館学芸員）
６.「シーボルト・コレクションの陶磁器」櫻庭美咲（本館機関研究員）
７.「シーボルト・コレクションの染織品」澤田和人（本館准教授）
８.「シーボルト・コレクションの漆器」日高　薫（本館教授）
９.「バイエルンにおける民族学への組織的取り組みの起源」
ブルーノ・リヒツフェルト（ミュンヘン国立民族学博物館学芸員）
討論
閉会の辞（総括と今後の課題）　　久留島　浩（本館教授）

②人間文化研究機構主催のPNC2013NIHUセッション（於：京都大学，2013年12月）のセッション２「日本関連在外資料調査研究事業（前近代資料）」で，本プロジェクトメンバーのトムセン，近藤，日高，櫻庭が本プロジェクトの研究成果に関わる以下の口頭発表をした。講演報告書として『PNC2013　NIHU企画セッション報告集』が2014年３月に刊行された。
講演「スイスにおける日本コレクション」ハンス・トムセン（チューリッヒ大学教授）
報告３「シーボルト・コレクションについて」　櫻庭美咲（本館機関研究員）
同報告へのコメント　日高　薫　（本館教授）
報告４「イェール大学所蔵日本関係資料について」　近藤成一　（東京大学史料編纂所教授）

③第７回シーボルト国際会議（ライデン・2013年10月）に協力し，松井洋子（東京大学史料編纂所教授）が口頭発表を行い，日高薫（本館教授）がコメントを発表した。

・成果物発信事業
①イギリス・ウエールズ内の日本関連資料所在調査では，日本関連資料の所在に関するアンケート調査を実

施し，報告書を作成・刊行した。

②アメリカ，ピーボディ＝エセックス博物館所蔵のモース・コレクション調査の成果が，江戸東京博物館主催展覧会「明治のこころ―モースがみた庶民の暮らし―」（2013年９月14日―12月８日）で活用された（機構および本館は「特別協力」）。

③本館のホームページに本プロジェクトのホームページを開設，本事業全体について情報配信した(http://www.rekihaku.ac.jp/education_research/list/joint/2010/siebold/index-j.htmlを参照されたい）。

④シーボルトの長男アレクサンダーが作成した父シーボルト収集品のバイエルン王国への売却目録（ミュンヘン民博所蔵シーボルト・コレクション）は，翻訳を完了し校正中であるが出版社は未定。2015年度の刊行を目指す。

【ブロンホフ・フィッセルチーム】

・資料調査

①同目録の出版のため所蔵者であるライデン国立民族学博物館と機構との間での協定ができていないので，ライデン国立民族学博物館において，目録に掲載する写真の撮影を行なうための調査は実施できなかった。

②2013年９月のブランデンシュタイン城調査（アレクサンダー・ハインリッヒチームと合同）にマティ・フォラーおよび松井洋子が参加した。2014年２月，ボーフム大学で行われた機構主催の国際シンポジウムの前に，同図書館所蔵のシーボルト関連資料の調査を行った（マティ・フォラー，フォラー=沼田　邦子）。

・成果発信事業

①ブロムホフ目録の翻刻翻訳作業の継続

同目録出版のため，翻刻・翻訳・資料情報の整理を行なったが，口絵写真の撮影・選定はできなかった。その代わり編集上での打ち合わせ（用語・表現等の検討，写真撮影の必要なものの選択と点数確認，翻刻翻訳者打合せ）を，松井洋子が第７回シーボルト会議に出席した折りなどにライデンで行い，以下のような内容まで決めることができた。

②シーボルト関連アムステルダム産業振興協会展覧会目録の蘭和翻訳（第２次）およびその他のシーボルト関連史料の翻訳は予算の問題で今年度は未完。

・国際シンポジウム

①2014年２月にボーフム大学で開催した機構主催の国際シンポジウムで，松井，フォラーが報告した。フォラー=沼田も出席した。

【ミュンヘンチーム】

・海外資料調査

ミュンヘン民博所蔵シーボルト・コレクション詳細調査

①第６回調査：９/16～９/23

金工，貝合わせ道具，面，楽器，長崎関係資料，書籍の調査および撮影，未調査資料の所在確認をおこなった

参加者：日高・櫻庭・勝田・平田・原田博二（長崎純心大学）　計５名

第６回までの調査により金工，貝合わせ等の撮影を完了し，漆器，絵画，地図，染織，仏像，陶磁，麦藁細工，民具，古銭，書籍，自然物，面から成る約5,350点の調査を完了した（総数約７千点の内）。

②第７回調査：３/４～３/10
参加者：日高・澤田・櫻庭・勝田・平田・原田博二　計５名絵画，書籍，民具，武器等の調査および撮影を実施し，今回までに約６千２百点の資料の調査を終了した。
・国際シンポジウム
①ボーフム大学で2014年２月に開催した機構主催の国際シンポジウムで，ミュンヘン民博所蔵シーボルト・コレクションの調査成果について発表した（発表者：日高・リヒツフェルト・澤田・山田・櫻庭）。
②京都大学で2013年12月に開催したPNC京都会議，人間文化研究機構のセッションに参加，作成中のミュンヘン民博所蔵シーボルト・コレクションDBについて報告した（櫻庭・日高）
・成果発信事業
①ミュンヘン民博所蔵シーボルト・コレクションのDB作成（調査済データ入力終了）
②ミュンヘン民博所蔵シーボルト・コレクション目録校正作業中（櫻庭・山田）
③ミュンヘン民博所蔵シーボルト・コレクションと本研究の成果を紹介する企画展示「シーボルトが紹介したかった日本（仮題）」を2016年度に本館で開催することを決定した。

【アレクサンダー・ハインリッヒチーム】
・海外資料調査
①ブランデンシュタイン家資料の調査・撮影を行った。
・シーボルト記念室の展示ケース内の資料および写真帳の撮影を行った。
・シーボルト関係文書のなかの幕末関連史料の抽出と調査・撮影を行った。
・城内居室に保管されている書簡貼り交ぜ帖の調査を行った。
②ベルリン国立図書館所蔵のシーボルト関係資料調査・撮影を行った。
・ダルムシュテッター・コレクションの中のシーボルト関連書簡の撮影を完了した。
・成果発信事業（データベース，その他）
①ブランデンシュタイン家文書中のフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト関係文書のデータベース構築作業を進めた。

【ライデンＢ（絵図・絵画など）チーム】
・海外資料調査
①６月に，ライデン国立民族学博物館蔵の死絵コレクションの調査およびライデン大学図書館蔵のシーボルト関係地図の調査を行った（青山・山田・加藤・三河）。７月には漆器の調査を行った（日高）。
・成果発信事業（データベース，その他）
①同館から提供された「死絵」資料のデジタル画像に基づく棒目録を作成（山田・加藤）。

【海外所在調査（概要調査）チーム】
・海外資料調査
①米国ピーボディ・エセックス博物館，ボストン美術館　2014年５月11（土）～５月23日（木）
モースが収集した日本コレクションのうち，ピーボディ・エセックス博物館が所蔵する約300点の民具，

ボストン美術館が所蔵する約30点の陶器の詳細な資料調査を完了した。またモースが収集した写真ガラス原板の約1,000点，およびモースが描いた約1,000点のスケッチを複写するとともに詳細調査も終了した（小林）。

②イギリス

ウエールズで調査した５つの城の記録文書は，全て国立図書館に保管されている。今年度は，国立図書館ではチャーク城の文書に絞って，所蔵目録を遡って調査を進めた（三木）。

・国内外の研究者の育成状況

調査を続けてきたウエールズ国内の５つの城と２つの博物館に，それぞれが所蔵する資料についての情報を還元し，同時に日本展示を通して，日本を紹介するための手法を，現地スタッフと構築する作業を進めている。具体的には，スタッフ向けのレクチャー，トレーニングを実施した。各館とも参加者は百人を越えた。チャーク城では，それをもとに，日本資料だけで見て回る「特別ツアー」を観客向けに開始した（三木）。

・国際シンポジウム

①国際セミナーの開催

2013年11月27日，ロンドンの国際交流基金ロンドン・オフィスにて，機構と同オフィスとの共催でイギリスの日本コレクションに関するセミナーを開催し，約100名の参加者を得た。金田機構長が在外日本資料調査の概要を，三木がウエールズ調査の内容を紹介した。スコットランド国立博物館の学芸員が，スコットランドの日本コレクションについて紹介した。イングランドのダーラム大学東洋美術館の学芸員も交え，パネルディスカッションを行った。

②ボーフム大学で2014年２月に開催した国際シンポジウムにおいて，モース・コレクションの調査について小林が，イギリスの日本コレクション調査について三木が発表した。

・成果発信事業（データベース，その他）

①展覧会「明治のこころ―モースが見た庶民のくらし―」開催　2014年９月14日～12月８日　於江戸東京博物館

これまでの本プロジェクトの成果を市民に還元すべく，特別展「明治のこころ―モースが見た庶民のくらし―」を開催した（主催：江戸東京博物館，朝日新聞社，特別協力：人間文化研究機構，国立歴史民俗博物館，大田区立郷土博物館，ピーボディ・エセックス博物館，ボストン美術館）。幕末から明治にかけての日本の庶民の生活の諸相を示す実物資料，スケッチ，写真ガラス原板など，多彩なモース・コレクションから展示品を精選し，さらにモース自身が残した言葉を織り交ぜた展覧会を実施した。８万人以上の観覧者を得た。展覧会として一般に公開することによって，国内外に本プロジェクトの意義について具体的な形で発信し，その重要性を喚起できた（小林）。

②イギリスにおける日本関連資料所蔵館のアンケート調査報告書の刊行

イギリスで日本コレクションを有する100館に，日本資料の現状，資料公開の状況，進める上での問題点などを尋ねる質問票を送り，81館から回答を得た。日本資料のデータベース化を進めるに当たり，直面している問題に関する報告書を刊行した（三木）。

・国際連携・協力の推進状況

①ウエールズ国立博物館はウエールズでの調査の成果紹介を含めた日本関連の展覧会を2016年に開催する計

画である。代表的な日本資料の紹介とともに，本館の資料も展示する。

【異文化交流・情報共有化推進チーム】

・成果発信事業

①総括班が制作した本プロジェクトの活動報告のためのHP掲載情報コンテンツを歴博の公式HPに掲載するためのHPデータを制作。2014年１月以来，歴博公式HP上で公開中である。

②デジタル撮影方法の検討および撮影後の処理プログラムを検討し，大枠使用可能な状態の書式を完成した。

③ミュンヘン民博のシーボルト・コレクション調査DBは，データ入力を継続している。

５．共同研究員（◎は代表者，○は各研究チーム代表）

◎久留島　浩　本館研究部・教授
○青山　宏夫　本館研究部・教授
○安達　文夫　本館研究部・教授
○宮坂　正英　長崎純心大学人文学部・教授
○近藤　成一　東京大学史料編纂所・教授★
齋藤　　努　本館研究部・教授
青木　隆浩　本館研究部・准教授
保谷　　徹　東京大学史料編纂所・教授
宮崎　克則　西南学院大学国際文化学部・教授
大場　秀章　東京大学総合研究博物館・名誉教授
山田　仁史　東北大学文学研究科・准教授
小林　淳一　江戸東京博物館・副館長
原田　博二　長崎純心大学・講師
原田　　泰　公立はこだて未来大学・教授
三木　美裕　本館研究部・客員教授

○日高　　薫　本館研究部・教授
○大久保純一　本館研究部・教授
○松井　洋子　東京大学史料編纂所・教授
○鈴木　　淳　国文学研究資料館・名誉教授★
○佐々木史郎　国立民族学博物館・教授★
澤田　和人　本館研究部・准教授
山田　慎也　本館研究部・准教授
笹原　亮二　国立民族学博物館・教授
岩淵　令治　学習院女子大学・教授
田賀井篤平　東京大学総合研究博物館・名誉教授
角南聡一郎　元興寺文化財研究所・主任研究員
小山　周子　江戸東京博物館・学芸員
海江田義弘　長崎県庁・係長
勝田　　徹　本館管理部・専門員
櫻庭　美咲　本館研究部・機関研究員

ハンス・トムセン　チューリッヒ大学・教授
マティ・フォラー　ライデン国立民族学博物館・学芸員
レジーネ・マティアス　ボーフム大学・教授
スヴェン・オスターカンプ　ボーフム大学・教授
ブルーノ・リヒツフェルト　ミュンヘン国立民族学博物館・学芸員
フォラー=沼田　邦子　シーボルトハウス・コーディネーター
ヨーゼフ・クライナー　法政大学大学院人文科学研究科・教授
マルクス・リュッターマン　国際日本文化研究センター・教授
フレデリックス・クレインス　国際日本文化研究センター・教授

※本館メンバー以外（★チーム）の共同研究員は省略した

付記　2014年度より代表は日高　薫になります

B　近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究
2010～2015年度
（研究代表者　鈴木　貞美）

「南北アメリカの移民関係資料ならびに移民社会に関する研究」
2010～2015年度
（研究代表者　原山　浩介）

１．目　的

本研究では，北米・ハワイ，ならびにスペイン語圏のラテンアメリカに存在する日系移民関係資料をめぐり，資料状況ならびに資料を保有する諸機関・コミュニティ・個人の現状を調査する。その際，単なる資料調査に終わらず，資料を支えている日系人コミュニティの現状等にも焦点を当て，地域調査との連動を図るものとする。

本調査は，資料調査と地域調査を連動させて実施することに特徴がある。これは，次の二つの理由による。

第一に，一般に近現代史資料の保存は，それらが映し出す歴史に対する人びとの関心に支えられる形で成立しており，関心の希薄化は資料の廃棄や散逸につながる。日系移民関係資料についても同様で，とりわけ移民第一世代の高齢化は，資料保存の危機を招来する。本研究では，資料状況とともに，資料の保存を支えるバックグラウンドの調査を並行して実施する。

第二に，移民関係資料に関わるバックデータは，もちろん博物館等で整理されているケースもあるが，多くの場合，資料を維持する個人や地域社会，日系人団体などで共有されている口頭伝承に依拠せざるを得ない。したがって，資料調査と地域調査を連動させることで，資料の持つ意味を十全に把握する必要があると考えられる。

以上の点から，本調査を，資料―地域の双方を視野に収める形で進めていき，資料とそれを取り巻く周辺状況をトータルに把握することを目指すこととする。

２．今年度の研究目的・計画

シアトルとハワイの二つの地域については，これまで通り，写真資料を中心とした資料の発掘とデータベース化を進める。

シアトルでは，これまでワシントン大学と，ウィング・ルーク・ミュージアムの写真資料のデータベース化のための作業を進めてきたが，これに加えて，歴史産業博物館の資料調査にも着手する。同館は，これまでリニューアルのために満足な調査ができなかったため，ここで新たに調査に着手し，データベース化の可能性を探ることとする。

ハワイでは，ビショップミュージアムにおける資料調査を継続するとともに，データベース構築に向けた本格的な作業に入る。

なお，シアトル・ハワイのいずれにおいても，これまで，覚書の取り交わしの交渉のみを行い，正式な調印には至っていなかったため，今年度は，この調印までを含めた形で作業を行うことを目指す。またデータについては，当面のオフラインデータベースを作業用に構築し，相互に共有することとする。

このほか，北米では，日系移民に関するオンラインデータベース「DENSHO」との協業について交渉を行う。同データベースは，写真等の日系移民関係資料につき，英語版の公開を行っている。しかしながら日本語ができるスタッフがいないために，日本人向けのページは作られていない。したがって，相互に協力の上で，日本語版の作成がどの程度可能かを検討することとする。

さらに，ロサンゼルスの全米日系人博物館においても，資料をめぐって協同で事業を行う余地が見えてきたため，こちらについては朝日班と合同で，現地調査と交渉を行う。

中米については，これまでの成果を活かし，メキシコに重点化して調査を進める。現状では，日本人文筆家のところに，オーラルヒストリーの音声データを含む諸資料が，コピーも含めて膨大に蓄積されていることを確認している。今年度中に，この文筆家の執筆作業が終わる見通しであることから，資料の全体把握と今後の取り扱いについて，様々な可能性を見据えて相談することとする。また同時に，現在のメキシコにおける資料について，日系人コミュニティの社会状況と重ね合わせつつ，地域社会における資料の扱われ方を示すことを目指し，地域調査を進める。

３．今年度の研究経過

今年度，本グループは，これまでの調査成果を踏まえ，各地域毎の資料調査，ならびに先方との交渉を進めた。

【中米】

メキシコにおいて，個人コレクションを中心とする調査を実施した。依然として資料所蔵者が，自ら所有する資料を用いて執筆を行っており，その後の資料の扱いの可能性を検討した。

【北米】

（１）ワシントン大学図書館，ウィング・ルーク・ミュージアム（いずれもシアトル），シアトルの歴史産業博物館（MOHAI）における資料のデジタル化ならびにデジタル化されたデータ整理を継続して行った。また，DENSHO関係者との面談を行った。

（２）取り交わす覚書の内容を相互に検討した。

【ハワイ】

（１）ビッショップミュージアム所蔵の写真資料につき，webカタログ作成のための手順についての交渉を継続するとともに，写真資料の選定を行い，一部をデジタル化した。

（２）取り交わす覚書の内容を相互に検討した。

４．今年度の研究成果

北米では，これまで交渉が進んでいなかったシアトルの歴史産業博物館（MOHAI）において，所蔵資料のデジタル化に関する交渉が終結し，写真資料のデジタル化に進んだ。またハワイのビショップミュージアムでは，懸案だった写真のデジタルデータの確保を行った。これらを通じて，データベース作成のための，データ面の最低限の基盤はできたと考えている。ただ，アメリカ合衆国内の各機関との覚書の取り交わしについては，年度内にまとめることができず，これは次年度に繰り延べになった。よって，2014年度は，そうした取り決め上の問題をクリアすることが非常に重要な課題となる。

メキシコでは，個人所蔵資料の整理を継続している。こちらについては，寄贈の可能性も含めて，今後とも交渉を継続する。

このほか，国内，とりわけ広島において，日本に帰国した移民に絡んで，被爆関係資料とハワイの資料の関連を調査した。これについては，ハワイと日本の資料面でのつながりを明らかにする新たなポイントとして，今後の移民研究への還元を模索する必要があると考える。

また，シアトルにおける調査と連動して，日系人史に関わるシンポジウムに出席した。ここでは資料所蔵者のほか，ロサンゼルスの全米日系人博物館をはじめとする各機関の関係者，ならびにDENSHO（ウェブアーカイブ）関係者と面会し，今後の取り組みについての検討を行った。これら機関とは，朝日班で具体的な調査を行うほか，本調査の枠組みを超えて，将来的に人間文化研究機構，ないしは国立歴史民俗博物館との関係のなかで，共同で資料整理や研究に取り組むための枠組みを作ることが必要であると考えている。

５．研究組織（◎は研究代表者）

中田　英樹　明治学院大学国際平和研究所・助手　　秋山かおり

三木　美裕　カナダ文明博物館／本館研究部・客員教授

◎原山　浩介　本館研究部・准教授　　山田　慎也　本館研究部・准教授